

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十七年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇五三号



日川協加盟

特集 こんにちは新同人です

No.1053

二月号

4月の本社句会：会場のご案内

※ 4月7日（火）の本社句会は、

《たかつガーデン》で開催します。

（会場＝8階「たかつ東・中の間」）

〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町7番11号

TEL.06-6768-3911

[会場案内図]

◇お願い

- *開場は13時です。
時間前の開場はできません。
時間前のご来場はお控えください。
- *会館内に、個人的に食べ物を持込むことはできません。
昼食を済ませてからご来場ください。
- *お茶の用意ができませんので、各自でご用意ください。

5月からは従来通りアウィーナ大阪です。



信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

古書店巡り

小島 蘭 幸

先日、東広島市の古書店で、作家田辺聖子の『川柳でんでん太鼓』を買うことが出来ました。一九八八年第一刷発行の定価四八〇円、新春特別セールでしたので凄く得した気分になりました。実は昨年夏に、竹原の書店に10冊申し込んだのですが5冊しか無かったです。届いたのは二〇〇七年第九刷発行の定価五九〇円でした。私は川柳を始めて間もない人に、この『川柳でんでん太鼓』をプレゼントすることがあります。川柳六大家をはじめ、井上剣花坊、鶴彬、吉川雛子郎、定金冬二をはじめ、故人となられた川柳塔社の主幹、同人の作品もたくさん掲載されています。

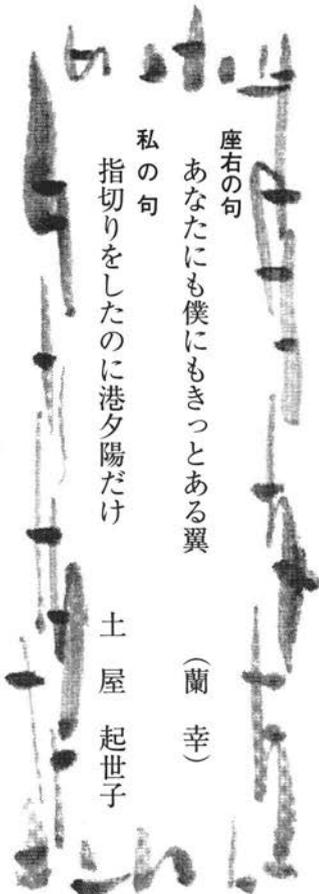
おろかにも顔見にゆけば雪になる
子猫そろそろみな宿命の顔かたち
癖のない人と言はれて庶務にいる

路 郎
生々庵
菜

亡母の闇この世は雨が降っています
命まで賭けた女でこれかいな
不細工な妻に子供はようなつき
税務署で冗談をいう出前持ち

薫 風
梅 里
梅 志
鬼 遊

珠玉の作品に作家田辺聖子の解説、鑑賞がつくのですからもう最高です。あとがきも素晴らしいのです。そもそも私が最初に古書店で手にした川柳書は、路郎先生の『新川柳講座』でした。昭和23年発行、私の生まれた年です。縁というものは本当に不思議です。広島に行くと、時間があれば必ず立寄る古書店があります。短詩型文芸のコーナーがあるのです。数十年古書店巡りをしています。これはという川柳書に出会うのは本当に希なのです。要はタイミングだと思えます。川柳書以外の掘出し物を見つかることも、古書店巡りの楽しみの一つです。大阪の古書店で川柳塔創刊号からずっと表紙を飾って下さっていた直原玉青先生の南画集を見つけた時も驚きでした。今、私が密かに探しているのは、自由律俳人、橋本夢道の句集です。旅先で、ひよいと立寄った小さな古書店にお宝は眠っているかも知れませんが、古書店巡り、お勧めです。



座右の句

あなたにも僕にもきつとある翼

(蘭 幸)

私の句

指切りをしたのに港夕陽だけ

土屋 起世子

川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「高野下」

■巻頭言 古書店巡り	小島 蘭 幸	：(1)
昭和3年	都 倉 求 芽	：(2)
川柳塔(同人吟)	小島蘭幸選	：(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑫	木津川 計	：(43)
自選集	温故知新	：(44)
水煙抄	西出楓楽選	：(47)
新川柳鑑賞 ③⑥	麻 生 路 郎	：(70)
西尾 菜句抄	俳風柳多留一二篇研究 20	：(71)
『麻生路郎読本』余滴 ②⑥	乗 原 道 夫	：(74)
英語 de Senryu ③⑧	吉村侑久代	：(76)
民族の詩歌 ③②	三 好 專 平	：(77)
愛染帖	新家完司選	：(78)
檸檬抄 「平凡」	牧野芳光・古久保和子共選	：(82)

昭和3年

都 倉 求 芽

昭和3年9月30日。これがわたしの誕生日。暦は戊辰。榎本武揚の戊辰戦争から丁度60年後の還暦にあたる。

千年の都から天皇家と明治政府が東京へ移ってから、京都は火の消えたように沈滞していた。博覧会や都をどりにももうひとつ意気があがらない。

そこへ降って湧いたように、天皇の即位御大典が京都御所で執り行われることになった。昭和3年のことである。

京都の街は沸きに沸いた。駅前には見事な祝賀門が立ち上がり、京都駅から京都御所に至る約3・5キロの烏丸通東側が拡幅されることになった。当時としては画期的な工事である。小さいころはまだ東側には裏側まる出しの家や横長の家、土蔵が通りに面して残っている家など、急工事の跡がそのまま残っていた。終戦後までそんなに変わらなかつたように記憶する。30年ごろからビジネス街となつて、

一路集「納豆」……………久保田千代選 (85)
 「ちよっと」……………加島由一選 (86)
 ………………大川桃花選 (87)

特集 こんにちは 新同人です…………… (88)

朝日なわ柳壇 今年の十秀…………… (89)

初歩教室「豆」…………… (90)

川柳塔鑑賞…………… (91)

水煙抄鑑賞…………… (92)

せんりゅう飛行船⁵⁰…………… (93)

追悼 熱い人 蛙城さん ありがとう…………… (94)

追悼 神夏磯典子さんを偲んで…………… (95)

インスピレーション・ナビ 印象吟…………… (96)

一月本社句会…………… (97)

句会燦燦…………… (98)

各地柳壇(佳句地十選/高瀬霜石・鴨谷瑠美子)…………… (99)

二月各地句会案内…………… (100)

柳界展望…………… (101)

■編集後記…………… (102)

……………朱夏・勝弘…………… (103)

…………… (104)

…………… (105)

…………… (106)

…………… (107)

…………… (108)

…………… (109)

…………… (110)

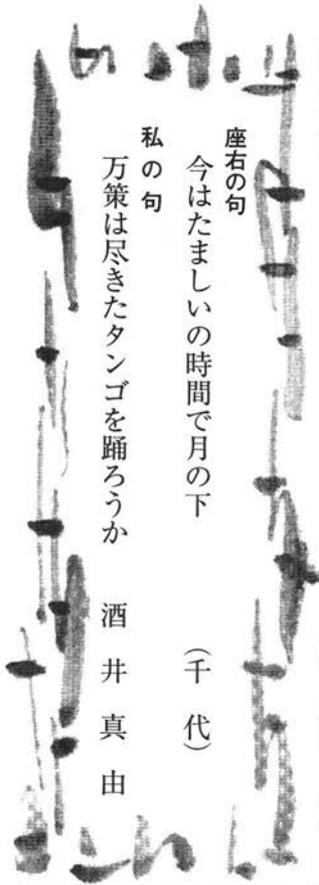
…………… (111)

…………… (112)

…………… (113)

…………… (114)

立派なビルが立ち並ぶようになったが、それでもまだ七条から五条まではその面影が見られるところも残っている。とにかく京都人にはこれ以上の歓喜はない。今でいうベビーブームにもなった。この年に生まれた子は昭和3年に因んで「昭三」「昭子」が圧倒的に多かった。昭三でなくても「ショウゾウ」と発音する名も多かった。わたしも昭蔵である。学校にあがっても同じ名が多かった。この年生まれのは徴兵役にも終戦で免れた。そんな訳で社会に出てショウゾウの名で昭和生まれがすぐわかる。「おい、みんな、こいつら昭和生まれだぞ」と今という「新人類」のように扱われた。川柳をはじめたころ(職場川柳)は当然本名で呼名していたが、水客先生が本社句会へ連れてくださった。ところがここでも本多省三さんがおられて後輩は遠慮して名を変えよう、例えば雅号をと。そんな照れくさい、と言ったがまあまあとなつて今に至っている。なお川柳雑誌の募集句欄を「一路集」に。女性作家欄を新設して「光耀抄」をこの年にはじめている。



座右の句
 今はたましいの時間で月の下
 (千代)
 私の句
 万策は尽きたタンゴを踊ろうか
 酒井真由



小島蘭幸選

京都市 高島啓子

鋭角に折らねば飛べぬ紙の鶴

山門の銀杏仁王のように立つ

跳ね橋を渡った猫は帰らない

炬燵ぶとんに睡魔が潜んでいる

スランプは終わった贅肉は消えた

スタミナをつけようというのです

松江市 松本知恵子

鍵穴の向こうは遠いプライベート

干し柿を薬代わりに日に二つ

玉手箱あけてはならぬ鍵がある

川に石投げてスツキリする不思議

典子さまようこそ渡り鳥も来る

逢いたいなあ天からふわり雪が降る

弘前市 高瀬霜石

あったかいジョーク腕組みほどこせる

陰口は嫌いだけれどまずは聞く

無料には引つかからないお金持ち

印籠をすぐ出す品のない男

詳しくはホームページという手抜き

ヘアピン・カーヴ抜けて大人の貌になる

和歌山市 木本朱夏

しろい紙のさみしさ秋の去り際の

鳩尾に酸っぱいものが溜まる夜

水のようにさびしい夜を抱いて寝る

孤独なんてみんな羊に食わせるわ

月光に斬られた影がうずくまる

ありのままのわたしはしろい再生紙

大阪市 谷口義

ここまで生きて早生れ遅生れ

お月さま合わせる顔がありません

出る幕がないので水を飲んで

モーニングサービスは好物のひとつ

胆石の大きさは勝っていた

睫毛が抜けて一日が終ります

大阪市 栃尾奏子

天辺の孤独にバラはなお赤く
皆魔女になって手作りチョコレート

厳寒の朝にきりりと志

寒の底ここにも神の愛があり

寒稽古敵は己と知る竹刀

半分こ覚えて社交デビューです

倉吉市 牧野芳光

ティッシュペーパー森の匂いが消えている

社員三人どの人も重役だ

介護度が階段に刻まれている

欠片から首長竜が出来上がる

よれよれになっても人間のかたち

足音を悲しみだけが追ってくる

高槻市 片山かずお

正論ばかり出てきて会議進まない

デパートの探訪地下の試食から

何もせず文句が言えるのが凄

もうやると決めた瞳だ澄んでいる

縁起など担がぬ北枕で寝る

イベントなしで終わる私の誕生日

橿原市 安土理恵

ダンディと言われた夫の食べこぼし

拭いてやる口許だつて妻だもの

何度でも言うわわわが妻なのよ

パーキンソンとわかつて謎が解きました

夢にみていた幸せというかたち

幸せをまだ追つててもいいですか

和歌山市 古久保和子

ヴェルレーヌのブックマークにするもみじ

バンクした自転車押して冬の坂

ドーナツの穴へ介護の車来る

コンビニで同じ時間に同じ人

りんご剥くテレビの中は吹雪いてる

シクラメンもポインセチアも我を通す

神戸市 山口美穂

玄関で尾を振る亡犬がいる気配

退院を亡母の笑顔に迎えられ

秋明菊わたしを待つてほろり散る

御仏飯と菊一輪で詫げる留守

バリアフリーも躓きそうな頼りなさ

人生の残りに恋を描いてみる

藤井寺市 鈴木いさお

湯豆腐と親しむ雪の南禅寺

母の遺品の中に僕の母子手帳

カタカナ語と折り合いつけて生きている

ポニーテールより三つ編みが好み

二上山ごときが登れなくなった

散骨で飾るわたくしのファイナール

大阪市 古今堂 蕉子

運ですと成しとげた人謙虚です
働き蜂の蔭でちよつと昼寝する

漢字書くヒントで書けた薔薇と鬱

しじみ汁小さいしじみをいとおしむ

常識も規格も彼に用はない

断捨離などしなくて済んでいる記憶

鳥取市 森山盛桜

百均でバツタリ逃げ場ありません

孤独死という難問は考えぬ

ファミレスに一人で入るのも勇氣

アメダスをかいくぐるのは難しい

みかん箱最後の一つまでなさけ

主義の無い輪ゴムぐにゆくにゆ生きている

篠山市 酒井真由

手の届くところに美しい獲物

列島が人魚のように横たわる

愛はまぼろしブレーキが軋む

丁寧に畳むテキストにない答え

友だちの友達と会う水車小屋

美しいポーズで支えあうふたり

橿原市 居谷真理子

強靱に絡んでしとやかに咲いた

手首には輪ゴム恋などもうしない

ほほえんで撮った写真だなどわかる

人間の文字で汚れてしまふ紙
善人の顔でただただ見てるだけ
こっそりと掘つてる自分用の穴

米子市 竹村紀の治

バカになれ力を抜けと酒を注ぐ

具を足しておでんが続くひとり飯

手抜きでは無いとおでんが味方する

廃屋の庭に無心の柿熟れる

当てにした大吟醸の訃報知る

お歳暮は今年限りと言う電話

鳥取県 斉尾くにこ

本開くどこでもドアへ入っていく

手帳開くはらり私が舞い落ちる

言えぬこと空にもあるか稲光り

スポットライトわたしの埃舞い上がる

腑に落とすにも価値観の微調整

ほころびのあつて光が射してくる

紀の川市 宇野幹子

しつけ糸もう解いてやる始発駅

にぎり飯子はゆつくりと発芽する

真夜中のラジオさざ波打つように

自在鉤へ夫を吊るし女旅

就活にまだ拾えない飯の粒

湯豆腐を掴みそこねる不整脈

札幌市 三浦 強一

背の丸さ形状記憶されたかな

選者には響かなかった自句自賛

デュエットを披露昔の美男美女

通院に柳誌一冊持つて行く

川柳のおかげで退屈を知らず

正直で喜怒哀楽が顔に出る

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

手の鳴る方へ落ちた気がする寒椿

さようならだけしか言えぬ鶴を折る

人差し指ひとをさしてはいけません

わたしの影傾くひとが出来ました

届いた頃ですぬ揺れてる頃ですぬ

球根を埋めて暫く冬眠だ

河内長野市 山岡 富美子

糸車回し余生を織ってゆく

織田作の街を乾いた風が舞う

落とし蓋家族ごっこをして暮れる

仄明かり凍てつく街の義援金

一票の明日へたくす重い問い

その視野に東京五輪入れておく

堺市 栞原 道夫

魂もやや縮んでる年の暮

踏切をいちばん先に渡る風

蘊蓄を傾けている掘炬燵

大欠伸してはきっちり眠る猫

綿ほこり君との時間こそ時間

寅さんも健さんもなくなり港

三田市 久保田 千代

古稀の春一味違う屠蘇を酌む

やんわりでいいのか北の拉致のこと

折り返し地点に願う花の彩

リセットに甘えて今日を生きのびる

目薬を差すと楔が疼きだす

特技ではないが笑顔を絶やさない

鳥取市 岸本 孝子

結ばれた縁を大事に生きてきた

血筋かな涙のもろい亡母だった

気配りが出来てそろそろ嫁に出す

年金が親子の絆もろくした

同じなら酒は愉快な人と飲む

やさしい子きつとやさしいママだろう

鳥取市 岸本 宏章

川柳の成人式は通過点

大企業のおこぼれ僕にまだ来ない

ほとんどは雑用僕のスケジュール

足して二で割った答に意味はない

足元が温いとこころまで温い

特急が威張って通る無人駅

鳥取市 両川 無限

点と線結ぶと語りだす星座
残業とデート男を迷わせる

ピーマンが嫌いで恋ができませんか
つなく手があつて窮地を救われる

父母眠る里へひとつの風になる
メビウスの輪を抜けられぬ愛と憎

寝屋川市 籠島 恵子

晩秋の余白に託すものがある
いろいろのいろいろの一つは悲しみ

わたくしが居ないとなんて思うまい
冬が来る前に仁王に会いにゆく

いつまでが新米だろう 食べながら
末っ子ようと甘えておきなさい

西宮市 西口 いわゑ

幾年を共に刻んできた時計
失敗が挑戦という二字を生む

頑張つて泣かせてくれる子役たち
ユーモアで済ませてくれてありがと

枯葉たち満足そうに地にかえる
新春の集い曾孫も初参加

大洲市 中居 善信

根気よく解かねばならぬ謎れ糸
聖護院ふつつ煮えて暮れている

本当は泣き虫だった父の酒

また一つ昭和が遠くなる夜明け

私のなかを走ったのは風か
取り敢えず鎮守の森へ行つてくる

堺市 村上 玄也

終活の手始め手紙整理する
食い物にはまだ執着がある救い

身体中のパーツばたばた壊れだす
老い夫婦半日かけて探し物

もう他人のゴルフスコア気にならず
ダイエーの名が消え昭和遠くなる

和歌山市 楠見 章子

消しゴムを味方に余生闊歩する
地下三階の電車モグラとすれ違う

ゆつくりと歩けば夢が逃げそうで
カメラマンのプライドときを止めたがり

いい笑顔目尻の皺がものを言う
人情の花咲かせるUターン

新しい花芽を抱いた冬木立
へこんでも復元力をくれる空

愛憎に騒めくことも無く老いよ
諦めぬ夢をマッサンから学ぶ

あつたかい思いを抱いて冬籠り
やれやれと今日の旅路の仕舞風呂

奈良市 大久保 眞 澄

日本語の危うい子らのグローバル

政治家が賭博を開帳するという

原発を安全という地震国

老いるとはメールの絵文字読みとれず

喪中葉書みな九十を越えている

整頓もできる掃除ロボ求む

奈良市 辻内 げんえい

クールビズ終わった途端ウォームビズ

前撮りし軽装で行く七五三

時代かなしゅうとめ嫁をおもてなし

儲けてもおごつてばかり貯まらない

働く気ないが家にも居られない

孫と遊べばまだ生きれると勇氣湧く

芦屋市 竹 山 千賀子

明日へ飛ぶ心の翼抱いて寝る

記念樹に話しかけてる七回忌

お遍路の旅でもらったお蔭様

あいまいな耳がにこにこさせている

心地よい音だけ拾う耳を持つ

お喋りの横避けているカニの鍋

海南市 堂 上 泰 女

命削った体に税が押し掛かる

フクシマの精魂見せた羽生君

反対ばかりせず野党も頑張れよ

大好きなフィギュア一人じゃつままない

故郷の匂いが届く柿ミカン

何もせんでも夫は側にいて欲しい

西宮市 山 本 義 子

雪こんこん紙漉きの里詩がうまれ

雪だよりふとんは軽いほうが良い

ゆるゆると冬の生きかた会得する

だんだんと偽装できない顔かたち

生き下手です今さらどうもならんけど

かごめかごめ姉もわたしも若くない

堺 市 澤 井 敏 治

小羊の笑みに心の満たされる

次々と夢を運んでくる羊

福袋福より欲が詰めてある

象さんが涙を流す一周忌

年初に誓う慌てない走らない

走るほど広い家でもあるまいに

三田市 堀 正 和

定番の祝辞をどうもありがとう

内視鏡僕のストレス見えますか

メガネの度進むも生きている証し

風邪ですとパントマイムで言うてはる

京料理器を褒めるしかないぞ

サッチモをゆったりと聞く深夜便

京都市 清水英旺

喧騒の秋の隅っこでつくねんと
雪虫は小春日和に酔っている
目に紅葉耳に水琴窟の呀
欠礼の踏んぎりつかず年賀書く
破りたい破れない殻まといつく

京都市 西村益子

何もないことが一番の幸せ
同窓会出席出来るありがたさ
同窓会昔の顔のちゃんと君
客が来て夫婦喧嘩を消壺に
里歩き大事な足と仲間達

京都市 榎本宏子

友達を選ぶわたしも選ばれて
婚活に財産は健康と書く
どうしようニキビが出来た古稀の春
ご近所に斎場下げた土地評価
断捨離まで元気でおいで下さいな

長岡京市 山田葉子

モラルから浸み出す灰汁のひとしずく
プライドがすぐ傷ついたのは昔
脇道に逸れたら見える色がある
匿名の手紙ストーカーの匂い
流れ作業ただ乗ってゆくのが極意

八幡市 今井万紗子

ドタバタと喜劇で終るそれがいい
おしどりも適度な距離で仲が良い
喜びも涙ももろて来るメール
群れの中時々雑魚が立ち泳ぎ
何着も脱がされていくひつじたち

大阪市 阿野壽美子

ママ友会負けない様にお付合い
顔立ちも年月通り重み出る
一人立ちやつと身に染む親の愛
ベートーヴェン判らなくても音に酔い
バスの中赤ちゃんの目と話し合い

大阪市 池上清治

転落のガンバ見事な返り咲き
LED見事なねばりノーベル賞
明るい明日の宣伝ばかり総選挙
孫娘におごってもらう年になり
般若経祈って書けば孫浮かぶ

大阪市 井丸昌紀

口説かないという選択もあつたはず
先延ばし解決をした振りをする
ギブアンドテイク英語にすると味気ない
洗濯物は元気に舞っているのだが
屑籠は僕の元気に比例する

大阪市 江島谷 勝 弘

久しぶり饅重たべてりッチです
十時間えんえん飲んでボタンキュー
残高の底がだんだん見えてきた
わりこみのお尻に僕はちぢこまる
ステーキを食べて階段苦にならず

大阪市 榎 本 日の出

選挙ともなれば敵です妻の票
子育てのつもりで花を育ててる
へこんだら元に戻らぬ知恵袋
カミナリが落ちなくなつて歳を取り
ストレスが顔に出ないが胃に溜り

大阪市 榎 本 舞 夢

旅立ちの日の早起きは気にならぬ
久しぶり学友と行く紅葉狩り
悲しいこと嬉しい事の積み重ね
御歳暮やクリスマスにと街に出る
落ち込んで居れない師走忙がしさ

大阪市 大 川 桃 花

試食して買わず立ち去るにも勇氣
生きすぎたとぼやきドリンク飲む婆あば
輪になって囲むいろりに咲く笑顔
御命日恩師だろうか窓の蝶
物差しを母にあわせてする介護

大阪市 奥 村 五 月

あの父が母の黙秘を恐れてる
レントゲン睨む医者にもでる笑顔
歩けない夫床からありがとう
せつかちも黙つて並ぶ味の店
年齢に制限ないと美人の湯

大阪市 笠 嶋 惠 美

柿もらう一緒に元氣くればった
その時はその時氣付く阿弥陀堂
大谷本廟納骨のこと行つて聞く
味の芸術五感集中するランチ
「好きな人でした」最高のお悔み

大阪市 川 端 一 歩

嘔むほどに味が出てくる友といふ
音のない雪がささやく明日の夢
年金減文化芸術また遠く
言いたいことこらえて今日は 一気飲み
嫌なこと忘れラブレターを書こう

大阪市 熊 代 菜 月

いいことが有つたとわかる靴の音
カレンダー赤丸の数また増える
名物の駅弁目当てにプラン組む
違う道生きた八十路の同窓会
喜寿八つこしても夢をまだ捨てず

大阪市 小谷集一

矢印に助言がほしい曲角
胸に手を置くと心がよく読める
愛情の記録は薄味のレシビ
リベンジを誓い助走を繰り返す
転ぶたび学んで明日の糧とする

大阪市 坂裕之

お世辞など要らん男のお付き合い
ちよつとミスしてライバルの様子見る
我慢して耐えているのは年長者
がむしゃらにでこぼこ道を駆けてきた
隅っこを突く自分が情けない

大阪市 佐藤忠昭

暴飲のツケを払えと消化器科
見掛けより腹は綺麗と内視鏡
医療器の管に繋がれ動けない
看護師の立ち寄り減った退院か
病床の夢はアルプスモンブラン

大阪市 田浦實

母の鮎鮎忘れられない里の味
鎮守の杜それぞれ違う秋見付け
ベランダの隅の南天温かい
妻のおしゃべり聞いて近所の動き知る
さすが白鵬神のお蔭と謙虚なり

大阪市 津村志華子

マイペースそれが何より長寿法
穏やかな余生苦楽の積み重ね
手の平で丸めて捨てた欲ひとつ
考えが浮かばないのでミカン剥く
ひとりぼち心に鞭を打ちながら

大阪市 津守なぎさ

紅葉の絵巻ルンルン車窓から
日本の四季見る美しい湖西線
体重の上り下りへ過敏症
衝動買いさせるデバ地下技比べ
腹六分感謝感謝の病み上り

大阪市 寺井弘子

職人の気概欲得抜きにして
目一ぱい働いて来たという自負
コンビニで真夜中に買う週刊誌
法の網くぐるハーブの後絶たず
正倉院展天平飾る古都の秋

大阪市 原田すみ子

石路の花に誓って黄色好き
何も言わないのに残高の力
働いた自負を背骨にして生きる
笑うとこ違い並んで見るテレビ
兄妹が見せてくれてる近未来

大阪市 板東倫子

愛知らずして情を知る筈が無い
選挙なら下げる頭も持っている
突然の地震テレビに文句言う
台風に地震に寝てる暇が無い
長年の柳友亡くした日の寒さ

大阪市 平嶋美智子

争いは嫌いやけれど勝ちたいね
容姿かて記憶力かて友が上
落しても割れない食器買いました
ヘルパーさんに家事してもらい気疲れし
風邪らしい沢山食べて追いはらう

大阪市 伏見雅明

ハグされてあたま一瞬白くなる
声高に内緒をしゃべる遠い耳
頑なに昭和のままで押し通す
花丸に走って帰るランドセル
雑草はひと雨ごとに根を抜け

大阪市 升成好

丸い背な歳を重ね着したようだ
挫折した数だけ骨が節が出来
頼みごとやんわり言葉化粧する
ふせ目した仏に頼むお目こぼし
ワイン栓きれいに抜けていい兆し

大阪市 松尾柳右子

ラジオ聞き雨の日過ごす七十路坂
医者通い若い日思う齢重ね
友達の病い気になる老齢で
朝晩の十指合わせて健康に
テレビより旅の思い出懐かしく

大阪市 山崎君子

日曜日娘の手料理に感謝して
若き日のアルバムに見る思い出よ
広い部屋みんな出勤寒くなる
ペランダにすみれ植えます美しく
テレビ見て気になる庭の花畑

大阪市 山本加お里

デイ送りしばしの別れホツとする
義母の手をしっかりと握り鍋囲む
ゴミの山姉の生きざま垣間見る
物忘れしない内にと遺言書
年毎に無理はしません趣味仲間

大阪市 吉内タカ子

師走雨一日おきに灰汁とかす
この世には成るしか成らぬ杖で立つ
身の丈の笑顔さがしの嘘きらい
一票を戴く私入れに行く
赤々と千両冴える内の庭

和泉市 横山捷也

大阪狭山市 矢野梓

人生がわかつたふりで日向ほこ
若い二人病支えて年の暮れ

ひと言もしやべらぬ日ありひとり者

可も不可もない年金のありがたみ

俺に似た男を娘連れてくる

池田市 栗田久子

幸せをただ嘯みしめて誕生日

立春と聞くそれだけで気が和む

柗の花の香りで気づく春

毒の無い河豚でスリルも無く食べる

ささやかな値引き季節に先がけて

茨木市 島田誠一

大空がとことん青い退院日

禁酒して残りの酒を夢で呑む

議事録にのらぬ苦言が吠えている

古里のニュースで包む野菜着く

頑張ろう次の羊に逢えるまで

茨木市 藤井正雄

交際費半分削る子の学資

リストラが年功序列の壁破る

ばらの芽の主張聞いている冬日和

民話聞くいろいろが繋ぐ今昔

古墳発掘学者に見えぬ菜っ葉服

生きている事だけで良い年の暮れ
借りた本読まずに返す年の暮れ

相槌を打ってその場を丸くする

寄せ鍋の具材冷蔵庫の掃除

風邪の床老老介護してされて

交野市 森本弘風

角隠し今日は貴女が主人公

妻になり母にもなると孫娘

曾祖父にもうすぐなるの予感する

披露宴親を泣かせて幕を引く

新婚の朝改めて見る薬指

河内長野市 植村喜代

よちよちと今日も「カット」に行く予定

いやだと言ったショートステイも早や一年

夫の年金病院が待っている

有難い文句言うのに置いてもらってる

一日をしつかりと生きよう八十五

河内長野市 梶原弘光

男って器大きく見せたがる

一輪の花でコロッと行くワイフ

宮仕え集大成の家一軒

こじらせた風邪のおかげで卵酒

スキップを待つ真つ新しいランドセル

河内長野市 木見谷 孝代

柿の朱にひかれて買って描いて食べ

大掃除日頃のなまけ悔いる暮れ

もこともことムクムクやる気羊年

マドラーで言葉かき混ぜ澄むを待つ

針ふくむ言葉ジョークで受け流す

河内長野市 黒岩 靖博

隠れ宿有名になり衣脱ぐ

傷口は完璧だよとオベの医師

買物は上手と妻に煽てられ

カラオケで鍛えています喉仏

仕付け糸つけたまんまで七五三

河内長野市 坂上 淳司

円安のニュースで泣いている庶民

白票で叱る大義の無い選挙

薔薇百本でワイフを飾る金婚譜

秘密法穿いた軍靴がむず痒い

来る春をもう気にしてる花粉症

河内長野市 谷 久美子

ゆっくりと拳を広げ許し合う

降る程の嘘も誠もあるこの世

冬枯れの心を包む温い風

何もかも実らぬうちにもう師走

窓を拭く未練を残さない様に

河内長野市 辻村 ヒロ

親友と泣いて笑った旅の宿

記事読めば命の軽さ多すぎる

オレ流を輝かせてる皺の数

携帯が先に見つける待ち合わせ

これ誰と古い写真を孫が聞く

河内長野市 松岡 篤

予定した買物出来て心晴れ

楽隠居したいお城に城ブーム

ワンコインでは昼飯も頼りなく

何事も前例主義は平和主義

さあ喜寿だ元気に書こう四コマ目

河内長野市 村上 直樹

綻びも縫って縫われて金婚譜

アベノミクス痒いところは放ったまま

思いつきり飲んでこころの大掃除

しゃくさないな孫に説かれて休肝日

大器晩成あの世で花を咲かせます

河内長野市 山室 光弘

カギ穴の中でうごめく永田町

政争に明け暮れ大儀なき選挙

妻逝って料理のイロハかみしめる

健さんも文太も逝って去る昭和

知っている時代遅れの不器用さ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

手は打った汗は流した今は待つ
覚悟決めペンを握っておりますか
輝いているかと僕に問うている
軸足を問われて少しうろたえる
彬なら声高に今なにを詠む

岸和田市 雪 本 珠 子

お互いに空気を読んで暮らして
世の中を斜めに見てる冷凍魚
酔うとすぐ空威張りする雑魚がいる
温もりが伝わって来る絵行灯
猫でさえ命令すると外方向く

四條驛市 吉 岡 修

茶道というコーヒーにない心飲む
赤ちゃんのまあるい四肢で天使だね
骨ばきばきとても羽ばたけそうにない
天地人手塩にかけて菊大輪
この次は笑い飛ばしてみたい恋

吹田市 太 田 昭

恰好をつけ矢面に立たされる
見知らぬ人に褒められている背中の子
組の鯉が他人の貌をする
後悔はしても懺悔はしたくない
腹は空いたが飯はまだかと言いそびれ

吹田市 大 谷 篤 子

ジnkスを器量で飛ばし明日を見る
あの長い橋を渡るとゴール見え
耕した穴に昨日を全部埋め
勝った事ほんのり胸で温める
耕して命が芽吹く春を待つ

吹田市 木 下 敏 子

兄弟も親子も揃う七回忌
カラオケの友から昭和甦る
句読点打ってゆつくり考える
生かされて診察券がまた増える
聞き流す耳は明日を考える

吹田市 須 磨 活 恵

雨の音風の音にも人を恋う
北風に私の芯を試される
抽斗の奥へ悲しみ仕舞いましてよ
意地少し張って独りの米を研ぐ
ウオーキング四季折々の風の色

吹田市 野 下 之 男

解散がなんだ一応言うてみる
銀盤を泣かせて良いぞ日本男児
ちびっこの元気な歌に明日を見る
初恋もはるかに遠く広島だ
ちさいくせ僕を知らぬか吠えかかる

傘寿には傘寿のテンポ深呼吸

図太く生きて人間らしく死ぬ

団体の絵を抜け出したマイペース

時代に転ぶネット社会の薄ら闇

月と交信私の悩み打ち明ける

吹田市 山本 希久子

一握りの米粥にして事たれり

幕切れをじっと見ている昼の月

新しいことにチャレンジもう出来ぬ

メカオンチ右往左往をしています

最後には御先祖様の助け船

高石市 浅野 房子

意を決し白髪のまままで生きていく

後期高齢すぐそこに見る細い道

眼鏡かけ天眼鏡で見る新聞

ラジオ体操寢床で聞いてから起きる

料理番組うまいと言って食べている

高槻市 井上 照子

高槻に根っこ下ろして早九年

どっこいしょと炬燵から抜け出る根っこ

悩んだらお腹を横にしています

遅れても信じて待ってくれました

没句にもおいしいお茶が待っていた

高槻市 指宿 千枝子

アルバムが遠い昔を呼びさます

あこがれてふんわり乗せた白い雲

干柿を食べつつ今日を語り合う

やわらかい心で支え合う暮し

思うこと胸にたたんで知らん顔

高槻市 左右田 泰雄

ほろほろと泣きたい時がたまにある

カラオケで台風通過待った宿

路地裏を横切る猫に道を問う

国産で賄いきれぬ御重箱

元朝の静寂を破る大太鼓

高槻市 島田 千鶴子

毛筆のこだわり棄てる年賀状

気取らずにふれあい築く縄のれん

まだプラスと無策決め込む楽天家

一家団欒輪の真ん中にいつも亡母

小声でもズバリ所見をいう老医

高槻市 初代 正彦

雲行きを読んだライバル雲隠れ

誉められた子供が今日はよく喋る

大相撲脇の甘さが命取り

ポイントにアンダーラインが引いてある

ライバルをペコンとへこます夢を見る

高槻市 杉本 義昭

限度越え迷想してる歩数計

高槻市 富田 美義

田舎者ですがと今じゃ自慢する
回転の寿司で孫らに見栄を張り

夫々の暮らしが匂う夜学生

出来るだけ安全選ぶ残り道

高槻市 富田 保子

今の世に誰が道徳どう説くか

新品のリュックも並ぶ登山口

血糖値どんな医者より粗衣粗食

お出掛けの有る日まな板軽い音

あす信じ肩寄せ生きる福寿草

高槻市 原 洋志

倅せになれよで終る留守電話

月も言うそれは危険な遊びだと

軒下をか弱い嘘に貸してやる

好きと書く鉛筆までもほほを染め

肩を抱く一歩手前でまた明日

高槻市 安田 忠子

美味しい物いっぱい食べてよう遊ぶ

旅先で大阪弁がよう弾む

東福寺燃える紅葉に生きる幸

良い友を沢山持つて日々豊か

忘年会したくない程楽しんだ

見知らぬ児に我が児の臓器生かす親

アナログなお方妥協もできそうだ

スタミナがあればあったでややこしい

控え目なお願い通じずに終る

諦めが良くて自分にすぐ負ける

豊中市 藤井 則彦

控え目に言うたお世辞に座が和み

声だけは大きくなつたクラス会

死ぬ覚悟で励む人ほど長く生き

毒舌も過ぎると刃先鈍くなり

汗染みた名刺綴は我が宝

豊中市 松尾 美智代

物置きに古い月日が眠ってる

崖つぶちに居るのに迷う好き嫌い

雨も風も積んで空気になる夫婦

やつかいな事はしません土踏まず

努力だけが私の砦咲かずとも

豊中市 松村 里江

躰出来ぬ親にマナー教えない

私の出番やつと来ましたおもてなし

痛み分けと握手をさせるいいリーダー

乾杯の泡の向うにお月様

仕舞風呂とろり私の小宇宙

豊中市 水野黒兎

一人旅合縁奇縁給ひとつ
箸袋に一句 宴は真つ盛り

義理を欠くほどには降らず腰あげる
紙ヒコーキの飛ぶ距離ほどの冬ごもり

ミルフィーユ落葉かさこそ冬の音

富田林市 片岡 智恵子

姿見をひとつ増やしてダイエツト

不安感じないのは欲が深いから

仕合わせを呼べるタクトが欲しくなる

出しゃばりも上手に言えばアドバイス

大空へ悩みをひとつほうり投げ

富田林市 関 よしみ

自画像は修正ばかり冬模様

肉体の古い精神で半跏趺坐

ふる里の道だしつかり四股を踏む

偽りの涙は見せぬ冬薔薇

わくわくのハートはいつも持っている

富田林市 中村 恵

友達になれそうとてもいい笑顔

至近距離魂さえも触れ合った

神様の前では演技など不要

過去は過去独り合点を繰り返す

後悔を拾い集めた帰り道

富田林市 肥山一文

かくれんぼ鬼の来ぬ間にねてしまふ

溢れる善意で人とおつきあい

えらい人謝り方がうまくなり

名画見てしんから心洗われる

医者よりも妻が知ってる僕のこと

富田林市 山野寿之

団栗のパーカッションで爆ぐ秋

枝葉から秋のリズムがアンダンテ

政治より選挙国より党大事

復興は遅遅みちのくに冬四度

きつちりと畳んだ服にある躰

寝屋川市 富山 ルイ子

ホテルでの年越しをしてみようかな

カレンダーに来年予定書き記す

李下の冠するべからずといましめる

未年時に鯖読み七十二

忙しくお礼あげたり貰ったり

寝屋川市 平松 かすみ

デラックスルームも同じ震度です

私も人魚気分で露天風呂

金鱗湖魚もとまどう外国語

友人の引っ付き虫で旅終り

来年は五泊ぐらいはしたい旅

寝屋川市 森 田 麗

詰め放題隣に負けぬ智恵を出す

元氣かと老母が電話する矛盾

絵に書いたおせち横目に豆を煮る

はやぶさの土産と五輪待つ余生

枯葉踏む春の約束聞く様に

羽曳野市 安芸田 泰 子

先頭が目立ちたがりの旗を振る

すれ違う人それぞれの暮し向き

有り余る暇があるのに手抜きする

春風がくしゃみを連れて駆けてくる

健やかな余生を祈る初日の出

羽曳野市 宇都宮 ちづる

古希五人政治憂いている茶店

癌のためお別れですとハガキ来る

景品につられて貯金してしまふ

いつもなら届いてもいい歳暮来ぬ

門前の真紅の落ち葉夫と踏む

羽曳野市 徳 山 みつこ

千両も万両もある小さい庭

大都市よ休めというが如き雪

来て欲しい時には息子来てくれず

大統領首相を超えた十七歳

文化遺産の和紙に遠慮をした羊

羽曳野市 永 田 章 司

訓練はパニック防ぐワクチンだ

ユーモアで白け会議を変える知恵

とことんに追いつめないの武士の情

妻が逝き目算はずれ老後の日

年金に餅代欲しい年の暮れ

羽曳野市 三 好 専 平

金婚の着物は母の形見なり

ビル群の底に音符のような人

秋の蝶流人のごとく去りにけり

不況でもファンは虎をあきらめず

マックからヤキトリ屋へとシマを変え

羽曳野市 吉 村 久 仁 雄

好きで歩む道だ足取りまだ軽い

寂聴講話笑って泣いて道を知る

一期一会の縁うれしくてまた奢る

ゆっくりと朽ちて変化に気がつかず

約束は何もないけど五時に起き

東大阪市 笠 井 欣 子

お墓にも御無沙汰してる老いの足

ひる寝して夜もすやすや呆れられ

宝くじ当らないけど買いましょ

老友が寄れば年金墓のこと

忘年会老いの幸せ花が咲く

東大阪市 北村賢子

おてんとさまに柏手打っていた母よ

古稀の坂彼岸は視野にまだ入れぬ

さりげなく別れを告げに来た野良よ

若いつて飾らぬほうが美しい

子らの楽園駄菓子屋にあるぬくい風

東大阪市 佐々木満作

予定表空欄の日が増えてくる

恒例の第九聴かぬと年越せぬ

気遣いの誤解を生んでから疎遠

棒読みの謝罪会見見苦しい

山彦が拭ってくれた気の迷い

枚方市 海老池洋

木枯らしと押し問答の冬木立

老いふたり可も不可もなく祝う屠蘇

活断層沈黙祈る外になし

ビールの泡立つようわつと笑いたい

その先を言わず笑顔でにごしとく

枚方市 小林わかこ

学校で元気になれる一人っ子

大好きな先生います休まない

大好きな先生の真似ばかりする

集団の登校下校なんてない

四十クラス体育祭は球場で

枚方市 伊達郁夫

福袋期待しないと買い急ぐ

忘れたい酒がいとしい酒になる

無理をして無理を通して狐

染まっつてはいけない人の色を着る

守るもの捨てるものなし風の音

枚方市 丹後屋肇

毘沙門堂捨てた男と鉢合せ

気が付けば五感五欲が空回り

妖怪の仮面が押してくるラッシユ

社会保障だけの一票持ち歩く

湯タンポで凌ぐ孤老の冬の陣

枚方市 寺川弘一

ブラックコーヒー飲んでちよつぱり背伸びする

暗証番号メモがあること内緒です

定年後目覚まし時計鳴らさない

晴れたら畑雨が降る日はヴェルレーヌ

譲れない尊厳死から安楽死

枚方市 二宮紫鳳

もみじ狩り五感楽しむ京御膳

寄り道に絆深める趣味仲間

落葉舞う木洩れ日揺れてハーモニ

シナリオをはずして生きるオンリーワン

朝ドラに背なを押されて動き出す

枚方市 二宮山久

老いて尚趣味にいそしむ良き人生

山茶花の庭の片隅丸く咲き

輪が集うどて鍋つつく退院日

甘い柿りこうなカラス知っている

さと帰り今尚きざむ古時計

枚方市 藤村亜成

秘密持つ親に子供も持つ秘密

暗黙の石は全てを秘めたまま

怠け癖がつき弁解癖もつき

質素で飾らぬ部屋に合う美人

絶妙な距離で今も続く仲

藤井寺市 伊藤アヤ子

古里の美味が色々届く暮

年賀状もう書かねばと年の暮

古々米もおいしく炊ける電気釜

何も彼も必死で生きて子宝も

幾年月生きて越えたわ山や川

藤井寺市 太田扶美代

友情の真っ只中でおひらき

この列のどこで道化になろうかな

白い花笑うとピンク色になる

師走の真ん中ひよっこり春の使者

面影も日記も少しあやふやに

藤井寺市 高田美代子

十二月炬燵を出すと眠くなる

生温いお茶と暫く句集読む

免許証パスポートまで硬い顔

旅の宿昔話をするもよし

当たり前の顔して雑煮餅を焼く

藤井寺市 津田シルク

諭吉一人縮こまつてる小銭入れ

耳に栓して妻の言い分聞いている

百均の財布に万札入れてます

孫の口諭吉二人でチャックする

缶ビール沈む魂取りもどす

藤井寺市 増井ヨシ枝

病室の向こうで選挙カーが走る

亡夫のセーターブカブカだけど暖かい

退院間近化ける準備をしています

一筆箋花一輪にある温み

縁側の陽射しと猫の大欠伸

藤井寺市 吉田喜代子

電車内スマホ教室如くなり

脳回路壊れたのかな七十九

老骨に苦味の効いた秋刀魚焼く

未年ゆっくり登る八十路坂

喪のハガキ寂しい風も付いて来る

藤井寺市 若松雅枝

半世紀前に貰ったラブレター
期待して郵便受けの前に立つ
亡夫の好きな秋海棠がいじらしい
ぬくもりが欲しくて今日も花を植え
天災は終りにしてと祈る日々

松原市 森松まつお

嘘だろと笑ってみたいガン告知
ボクよりも妻がシヨックのガン告知
病窓でぼんやり見てる冴えた月
リハビリの散歩も妻の付き添いで
句会には行きましようよと雨あがる

箕面市 酒井紀華

鳥になる心のままに逃避行
火の鳥の野心がのぞくわたしにも
青い鳥いつも私のマスコット
喜怒哀楽幾山こえて人になる
携帯にうれしい声が飛んでくる

箕面市 広島巴子

鳥獣戯画柳画のようで引き込まれ
妻の愛おでん湯豆腐ローテーション
師走とはこういうものと選挙カー
どうしよう残り五日の大掃除
年賀状書ける喜び届けます

守口市 井上桂作

聞き上手そんな過去です私も
前向きに進むと敵がまたふえる
同じ過去持つ人でした愛めばえ
解散は政党の意思ご勝手に
老人会政党色が強すぎる

八尾市 内海幸生

本持つて逃げぬが中味なら行ける
仏教を理解ができて不実行
大人しい羊になぜ要る硬い角
句にならぬ諦めてなどないけど
今日死ねばそんなジョブスを聞いて寝る

八尾市 高杉千歩

近未来ロボット支配世界地図
いつも本音へルバーさん優し
生き字引ひとりよがりの百年史
いつまでの命キリなく追われてる
好きだから少し離れてにこやかに

八尾市 寺川はじむ

ダンスレックスンミラーボールに恋詰まる
株高へ慌てて乗って蹴躓く
平和すぎて何でも出来る世の怖さ
原油安でもスタンド巡りする車
ダメよダメだめ許してならぬ自衛権

八尾市 宮崎 シマ子

ラッシュアワーにとけて若さを取り戻し

坊さんの斜め横から唱和する

長電話向うもひとり私も

残りわずか爪先立ちの老いの日日

デートする梅一輪がほころぶと

八尾市 村上 ミツ子

強烈寒波ちよつとやさしくできないか

大根だき湯気もいっしょにはおぼつて

熱熱の大根に笑顔こぼれます

不器用と云うて器用に生きたひと

何尾分空いっぱいのうろこ雲

八尾市 山根 妙子

手料理にもみじ葉置いてランク上げ

御光さす本願庭の大銀杏

福袋ふくたか価はあるが身に合わず

ふわふわと羊のような余生です

来る年も恙なきよう手を合わす

堺市 柿花和夫

目礼をもつて芯ある人と知る

少年が大人に化けたのが私

手術成功今日から嘘はつきません

パソコンは苦手ジルバは得意です

人間は考えるアホそれも良し

堺市 加島 由一

恋文を書きたくさせたランプの灯

美容院帰りの妻を褒め平和

爺ちゃんに孫見せに行く墓参り

見るとだけで済ませる大掃除

年男酔わせる屠蘇と嫁と孫

堺市 源田 八千代

リニューアルに薄らいでいく人情味

延命天寿二者択一を迫られる

転院日は4日仏滅雨となり

それからの寒波に比べ善しとする

戦争はノー愛国心は持ち続け

堺市 齋藤 さくら

年金に師走の景気通り過ぎ

夫婦しか判らぬ側に居る安堵

おいしいも言わずにお茶を飲んでいる

財産がないだけ気楽言うてます

初めから勝てる選挙をする自民

堺市 遠山 唯教

転ぶたび上手になつていく受身

飛ぶ鳥を落とす力がまだほしい

湯湯婆をスタンバイさせ冬支度

旅立ちの孫が一人前でいく

健康な寿命をねがいするテニス

堺市 内藤 憲彦

大阪府 桑田 ゆきの

金メダル妻にもあげる十二月
何があるうとバタバタしない蝸牛
日めくりのあと三枚に感謝する
母米寿すぐに喜ぶ笑い皺
定年日これから妻に甘えない

堺市 宮本 かりん

身についた仕草に滲むお人柄
心の傷慰め合つて愚痴となり
心配をしすぎて声が荒くなり
去り際の娘のひと言にほっとする
無駄口を入れて空気を覚えてくれ

堺市 矢倉 五月

絵馬吊つただけで勝てぬと知りながら
守護神の亡夫は右の肩の上
見たような顔やと頭下げておく
温かいハグセクハラじゃありません
バッチリと特ダネ撮つたのはスマホ

堺市 山本 半銭

いつの間に抱え込んだか冬の色
所在ない身に親しみの浮雲よ
ゆつくりと今出来ること見極めよう
柳歴を問われて無為に過ぎた日よ
そこそこに生きてゆくべし後少し

どっと来て賀客が湧かず冬座敷
着膨れて怠慢心むくむくと
北斗星拜んでからに床に付く
大根煮吹き吹き一会の仏心に
年の豆両手に溢れる媪の手

大阪府 野田 栄呼

カレンダーの印に今日を動かされ
喜怒哀楽心許せるのは絆
意気込んでシニア割引弾み行く
初顔と袖ふれ合つて呑み仲間
母の日がなかった頃の母拜む

大阪府 粕山 隆盛

年賀状名句かがやく初光
ペン先にいのちいきいき躍らせる
風花が美しく舞う老いの坂
たそがれの坂の夕陽はかなしき朱
一年の句読点打つ除夜の鐘

大阪府 米澤 俣子

平凡な道を歩けた満足度
ヨイショツと掛け声脳を自活さす
充電をしても元の若さに戻らない
懐の軽さ忘れる空の碧
狭くした世間片意地張りすぎて

神戸市 白川 淑子

健さんも昭和も流れゆく川よ
のほほんと踏んでいるのは地雷かも
振り向けばジグザグどこまでの命
泣いて下さった私の川柳で
終の里煩惱洗う冬銀河

神戸市 能勢 利子

ひつじ年紙食べられぬ様注意
仏壇を茶の間に移し長話
いかなごは古稀で最後にする予定
パパ抜きはいつも三歳ひとり勝ち
山彦を聞いてみたいと都会の子

神戸市 福原 悦子

神の手と届いた祈り生かされる
掛軸の羊が元気をくれる朝
無人駅風に誘われ途中下車
敵も味方も人間だから揺れている
奴と鳶のどかな空でつかみあう

神戸市 松井 文香

晩学は日日充実の好奇心
赤い糸鎖となった半世紀
ソウダネの相槌欲しいだけなのに
御嶽の未だ不明のまま雪が
交わりを持ってた菩薩が道しるべ

神戸市 山田 婦美子

子の短所妻に似たとか夫似か
出来不出来五等分ですそんなもの
価値観の違い異なる風の向き
トイレまでお供をしますアイパッド
目だけしか出せぬマスクに不信心

明石市 糀谷 和郎

ふと思う忘れた傘の行く末を
除夜の鐘ひとつ聞いては蕎麦啜る
納豆が日本の朝を絡めとる
ノーブラン猫の欠伸が飛び火する
倒立がちょっと苦手な生卵

芦屋市 黒田 能子

考え中少し黙っていてあげる
迷わないたった一人の途中下車
人生のプランに入れてないまさか
すつきりと飾り外した肩のこり
かたちから礼儀作法を身につける

尼崎市 市坪 武臣

コスモスも私も揺れてやがて冬
老夫婦平らな道をポチポチと
竹林を歩いて気分引き締まる
喪中ハガキ故郷の縁が一つ切れ
両隣マドンナが居る古稀の宴

尼崎市 長 浜 美 籠

いい年であつたと風呂の湯が溢れ
手遊びの糸が絡んで寝付かれぬ
笑えるっていいな疾しいことが無い
月深々月下美人の鉢入れる
手から毀れる石それだけのご縁

尼崎市 春 城 年 代

残念を引きずつてゐる十二月
日にいち度湯に柔らげる土踏まず
亡夫にも聞いてみようと思つた
煌煌と月夜の道を連れになる
老春もくち紅うすく若やぎぬ

尼崎市 藤 井 宏 造

診察券束にしながら生きてゐる
出戻りもこそそしないいい時代
県人会「ふるさと」歌いしめくくる
申カツの串もやっぱりチャイナ製
抜くために釘の頭はついている

尼崎市 藤 岡 り こ

夕焼けに飛行機雲が甘く溶け
雲海を抜けて心も青空に
紅葉狩お寺の鐘がよく響き
透明の水にも描く色づかい
色好みしてます服に合う帽子

尼崎市 山 田 耕 治

一時間の予定アルバム整理する
日曜の夕方からの雨が好き
白旗をあげて点滴見上げてる
黄信号恐ろしいのは転ぶこと
よいことをするには勇氣いるのです

加西市 金 川 宣 子

傘寿なる生への欲と死の覚悟
孫の守り構い過ぎたら疎まれる
メロディーに誘われ渡る青信号
生きてるか友と称える年賀状
ふる里の姉に代わつてする介護

川西市 西 内 朋 月

瓶さげて昔の友がやってくる
だしぬけに義妹の喪中葉書くる
ゴム紐の伸びた下着で磨く靴
十人も寄れば御の字クラス会
胸底にくつきり残る通過駅

川西市 山 口 不 動

小春日にリハビリの足少し伸び
六歳の脳死五人の命再生し
めでたいと言ひ聞かせつつ喜寿迎う
我が庭の桜もみじの色自慢
自炊して一人で食べる不満足

川西市 米原雪子

防虫剤匂わないので頼りない
友の笑顔思い浮かべて書く賀状
老化現象いやと言うほど感じてる
ふと気付く整理前より乱雑に
同じ話でも面白そうに聞いている

三田市 石原歳子

歩くのが速いと羨ましがられ
補聴器の説明を聞く一時間
回覧板やさしい声でお隣へ
美しい落葉葉に持ち帰る
何処へ行っても最年長はわたしです

三田市 上垣キヨミ

寒空にホットニュースはパンダの子
遺す物なくて身軽な千の風
窓灯りひとつ家路へペダル漕ぐ
風邪に臥す今頃旅はどの辺り
極楽はこの世にありと寝正月

三田市 尾崎一子

職人の父の気骨で里を発つ
空っぽにならないように書く日記
一番の笑顔親子おんなじ顔
里なまり捨て切れないで街に住む
墨の香をたっぶり乗せてご挨拶

三田市 北野哲男

少年期猫より犬とウマが合う
米俵大黒様の必需品
充電にならぬお酒もあるのです
過去帳の最長老になりそうだ
保険証お忘れなく言うツアー

三田市 福田好文

栓抜きが無くてお預けロゼワイン
無理やりに病気探しに行くドック
しつかりと貯めたお金が使えない
原発の輸出に誰も騒がない
テレビ見て合点したが直ぐ忘れ

篠山市 北澤稠民

この先も真ん中道を行くと決め
友人の友人として酒の輪へ
人間がまるでスマホにあやつられ
語り合う人も来れない寒い日は
冬に入る牛の歩みに似た日々を

篠山市 酒井健二

恋人も共に年取る世の無常
マララには有って私に無い勇氣
幼年期二つの羽根がはえていた
いつからか羽根もがれて地べた這う
あの世へは全身麻酔で行きました

宝塚市 田中章子

切って貼り今日のわたしの出来あがり
自分にはわからぬわたくしの匂い
育てたはずの子に育てられていた
犬嫌い宮司が仕切る七五三
パトカーに乗ると追跡したくなる

西宮市 秋元てる

ばあちゃんはシャツの裾出し気に召さぬ
回収の目途ありお年玉はずむ
機嫌よく生きてる自分を自慢する
早よ行けと振る手と握り締めた手と
淋しくて熱いコーヒー二つ入れ

西宮市 足立茂

法律ではもつれた糸はほどこけない
日本列島目指しておいで渡り鳥
自己チューの得意な歌は「マイウエイ」
そろばんがパソコン音痴育て上げ
人の苦勞知らぬ役所が「規定です」

西宮市 緒方美津子

過疎の村生きていました仲子張り
新米を研ぐ八十八に感謝のみ
門前の小僧とはいかぬパソコン
病気するといやおうなしに歳がでる
ころびました厚い脂肪に守られた

西宮市 片山忠

堪え性だけでお互い持っている
暖房をすぐ切りたがる妻と住む
逆恨みされてもここは叱つとく
先細りばかりが集うクラス会
些少ですがと置いてゆかれて困る金

西宮市 亀岡哲子

戎さんで大吉引いて大地震
二十年前でよかった若かった
お腹すくなんと清しい病み上り
眩くと眩き返すお星さま
のんびりと一人暮らして子孝行

西宮市 福島弘子

ルンルの二つ返事でレストラン
亡父母の長所短所の血をもらう
すれ違う点滴同士の会釈する
登下校見守る声と子等の声
偶然が生んだ奇跡の地球に住む

西宮市 牧渕富喜子

クリスマス師走わたしのパースデイ
選挙戦ただただお風邪召さぬよう
そう言えば子供の声が街にない
鳥インフルチウンチウン雀の声もない
ノーベル賞日本人は素晴らしい

西脇市 七反田 順子

奈良市 加門 萌子

オール電化雪が泣かせる文明化
一服を外は時雨だお茶を注ぐ
夢がある終着駅に留まらず
いい人だ愛敬黒子つけてはる
しめくくりノーベル賞が大ニュース

土曜日だドッシリ重い広告紙
ルミナリ工師走の風が光り出す
コンビニで今日のサラメシ決めました
駅前のおでん屋焼鳥に化ける
生垣は剪定障子張り換えず

姫路市 古川 奮水

予報とは違う冬將軍来たる
人間の営みおろおろするばかり
息子来るお見舞いという名目で
しかしです帰った後のこの疲れ
想定外定着しそうこの言葉
博士号表看板にしてよく稼ぐ
表と裏に南天を植えて気を休め
足跡を辿り中国の本を読み
二人三脚90年間走り詰め
もう一息と呼吸を続けてる

奈良市 天正 千梢

二月生まれ戦地の父が名を付ける
散り椿ひらひら落ちて春に酔う
大人しいが目の輝きに意志があり
ハンドボール孫全身でシュートイン
ロボットが働き口を取っていく

奈良市 阿部 紀子

仏壇に息を潜めていたまさか
勝負師の験をかついだ回り道
泣いて勝つ味を覚えた孫娘
景気回復ほくのふところ気配なし
居心地がよくて貧乏神いつく

奈良市 米田 恭昌

人間が壊す地球のハーモニ
団欒に寡黙な父のいる安堵
活け造り鯛はプライド崩さない
旅の宿妻は布団を引き離す
総選挙投票率で知る民意

奈良市 岩本 浩二

沸点を押えこんでも湯気は出る
シクラメン華麗にぼっと恥じらいが
雪の富士どこから見ても日本一
サーファーを遠目に眺め出るくしゃみ
積みあげた話術で沸かすガイドさん

生駒市 飛永 ふりこ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

聞き役の位置で独りのお水取り
ささやきか寝息か真夜中の天使
去るものは追わず来る春に乾杯
ありがとうが生きてる新春の祈り
身の程を悟る男の座標軸

奈良県 中 原 比呂志

喜びも悲しみもあり雪の嵩
赤白の蝶の乱舞かシクラメン
雪融けて去年のメッキ剥けて出る
おしやれ靴外反母趾が耐える午後
とうちゃんの知らぬ通帳夢抱かす

奈良県 渡 辺 富 子

年の瀬にちよつと入院するはめに
大掃除もおせちもバスの年の暮れ
その先に明かりが見えてくる気配
不機嫌な群れが行き交う冬の街
大志抱く息子の気炎たのもしい

和歌山市 岩 本 美智子

入院のたびに言葉を置いてくる
歯磨きの嫌いなわけがわからない
師走には心の掃除いたします
去年今年人の輪小さくちさくなる
忌中すぎ若松の一本をおく

和歌山市 上 田 紀 子

絡繰りを知らぬ他人が口挟む
あれこれと首突つ込んで忙しい
足腰に号令かける坂の下
主治医の手神様御座す奇跡呼ぶ
良い人になろう心の鬼退治

和歌山市 喜 田 准 一

子守唄代わりに聞いてます小言
気にしない若さひと言多くなり
探し物妻のヘソクリ借りて置く
言い訳に隙がないから身構える
拾い読み明るい記事に救われる

和歌山市 坂 部 紀久子

税金でシヤブシヤブ食べているパツヂ
絶対当たらないからジャンボ買いません
その時はその時心決めました
年のせいにして面目を保つてる
遠足の園児吸い込む路線バス

和歌山市 武 本 碧

三種の神器今はスマホに寄り切られ
だんらんのコーナーにいたブルータス
ブランドをほんの寝巻のように着る
奥の手がまだ一つある頭陀袋
七坂を越えて連理の枝となる

和歌山市 玉置 当代

朝寝坊たたり短か日暮れてゆく
こたつにみかん今年も恙なく暮れる
みそ汁の香りに眠気とんでゆく
とりとめもないこと書いている日記
明日も生きる望みへ苦い薬飲む

和歌山市 土屋 起世子

すれ違う笑顔に笑顔返してる
笑ったら運が方向チェンジした
孫来ると忙しくなる炊飯器
ピザを焼く年の功より若い嫁
記憶力低下メモ帳放せない

和歌山市 福井 菜摘

きつ先を少しも曲げぬ一本気
筋一本通す背中に見る孤独
それ以上言わぬ夫婦で丸く住む
生き抜いた母の思いと通じあう
昨日より明日に膨らむ辞書を繰る

和歌山市 福本 英子

下積みの思い出遠いほど深く
命まで削ってつくす程で無し
枝分れしてから絆うすくなる
遺産分け絆の怖さ見てしまう
竹光で斬った男と夢で逢う

和歌山市 堀 富美子

恙無く今年も集う年忘れ
金無いが満たすハートは何だろ
お帰りと今日も遺影の苦笑い
子が来ると張り合う意地が湧いて来る
ピークだと思うひと日をいとおしむ

和歌山市 松尾 和香

楽しみは焼きいも落ち葉焚く懐古
伸びる命いとしいわたし自然体
無理承知許してくれた遠い母
一歩引く心忘れず老いの道
校名が変わる最後のクラス会

和歌山市 松原 寿子

祝酒泣いて笑って春を漕ぐ
知らぬ間に一本取られていた不覚
おチャメな人が無口な僧を喋らせる
気がかりな闇を抜け出たホスピタル
原点へ戻る血潮にある歩幅

岩出市 藤原 ほか

折に触れしかつてくれる母の声
現役にこだわり今日も靴磨く
レシビから母の笑顔が溢れ出る
振り返る山坂越えた日は遠く
後悔の念にかられて徳をつむ

海南市 小 谷 小雪
明日こそへポデーイシャンプルー換えてみる

泡一つ揺れて七色描き出す

振り向けばいつも父母居る気配

ミスしても胸張れと言う友がいる

安心の引換券が見つからぬ

紀の川市 北 山 絹 子

黙ってる人へ気持を切り替える

形振りをかまわず爪を切っている

荒れ狂う地球の呻き声を聞く

少年の刺はやさしく抜いてやる

外は雪熱燭一杯下さいな

紀の川市 辻 内 次 根

踵からぼろぼろ身長低くなる

優先順位気づいた事から片付ける

探すのは自分ひきだしあけている

身の回り引き算になり冬になる

コスモスがゆれた冷たい風の日に

田辺市 岡 本 昇

脱穀機踏んで先祖の汗を知る

うきうきと心シャンプルーしています

四面楚歌自分を褒めて立直る

外堀を埋めてお迎え待っている

家計簿とにらめっこする日が続く

竜宮のお宝狙う不法網

三人の輝き照らすLED

繕った顔より背なで人を見る

旅の宿窓の景色でおもてなし

正面の風を受けよという試練

鳥取市 有 沢 せつ子

冬野菜いろいろ貰う有難さ

ご近所の犬に四五軒守られる

ほんやりとしてたら脳が錆びていた

一杯のコーヒー脳が始動する

今ここで怒ってならぬ深呼吸

鳥取市 池 澤 大 鯨

モーニングコーヒー体ととのえる

ケータイがスマホに変わり世は疎遠

冬日本海風いで忿怒を消している

合掌しても叶わないから願わない

父と母僕ははざままで生きてきた

鳥取市 加 藤 茶 人

良い人を演ずゴミ出し子と遊ぶ

タイガース隣の芝は良く見える

大阪のおばちゃんらしい話し声

さしすせそどの味だろう人間味

言い訳の言葉尻にはスキ覗く

橋本市 石 田 隆 彦

鳥取市 倉 益 一 瑤

栗めしがお好きでしたね仏サマ
節くれた指満ち足りた今がある

人間に節目節目の祝い唄

赤いセーター着てしたたかに老いる

振り向いて欲しい泣き真似だつてある

鳥取市 鈴 木 一 弘

割り引いた程に中身が軽くなり

新年は富士の峯から明けてくる

おさがりが身に合つてくるあたたかい

平凡を求めて暮らす車椅子

命より正義重いと教えられ

鳥取市 永 原 昌 鼓

褒めるのも叱るも微妙さじ加減

風の子が今じゃどつぶりスマホの子

早々と冬めく老いの一人部屋

子どもには内緒私のアキレス腱

お人好しじゃんけんいつも負けている

鳥取市 中 村 金 祥

北風小僧空いた子の部屋のぞき込む

外遊を終えるとあとはレール上

落ちこぼれの顔でライバル抜いている

慢心の総理が欲しい通信簿

大往生見届け肩の力抜く

鳥取市 夏 目 一 粹

石一つ投げて波紋を考える

子の無心貧乏ゆすりしてみせる

正直は貧しさゆえの贈りもの

つい本音言つて弱みを握られる

沈黙は不利な立場に立たされる

鳥取市 西 川 和 子

脆いから余計な事は伏せておく

ココロと何時も笑っているベツト

卵割る今日もいい事期待して

孫達の帰省涙腺また緩む

母の味辿り白菜漬けている

鳥取市 春 木 圭 一 郎

ありがとうまず言つてから引き受ける

落ち込んでいても笑顔の大切さ

ポジティブに気持ち切り替え笑顔増す

大好きな宮沢賢治見習うか

どうしたら素敵に笑顔できるのか

鳥取市 平 尾 菜 美

花の咲く日まで減反憎かった

汚れてる器ほんやり見てられぬ

虹色に染まる夕陽にあこがれる

憎悪の念する心経唱えよう

両立の草鞋心がつれだす

鳥取市 福西茶子

近くの池に鳥インフルの糞が来た
ドンドンドンドン波が我が家を威嚇する

日本海 鳥人間が寒そうに
パソコンが拗ねて決算書が出来ぬ
一卵性双生児かも海と空

鳥取市 前田楓花

すり抜けたそよ風今はどうしてる
ひび割れた恋の欠片を抱いて寝る
消しゴムで消されたような孤独感
謎だけが残る電話の向こう側
頭肩腰どこが痛くても鬱

鳥取市 吉田孔美子

恐らくははじめて終りコテージ泊
旅疲れ出揃った芽に嗤われた
旅カバンそのまんま陽は天中に
母でなく乙女の記憶が戻った
捕虜の事語られぬまま訊かぬまま

鳥取市 吉田弘子

ありがとう心の中にいつも書く
昭和一桁婦唱夫随夢の夢
割り勘の端数迷わず募金箱
木枯しへ後期実感するからだ
解らない経読み今日を締めくくる

総理殿政も体も心配だ

余暇出来て過去の反省次々と
半身浴に読書グッズで快適だ
候補者の妻の美人度比較され
秋篠宮家学習院がお嫌い

倉吉市 山中康子

炊事場は私ひとりの物だった
何十年続けた炊事嫁の手に
代譲り嫁はいそいそ割烹着
もう一度復帰したいよなあ炊事
今はもう借りものの炊事場なんだ

米子市 後藤宏之

箱書があれば高値はつくはずだ
脆い場所甘くみている地球人
古写真家族四人の登山口
ありがとう慣れぬことばを見つけ出す
なくさめの裏に愉快がかくれてた

米子市 後藤美恵子

不意の寒さ猫も私も慌ててる
ライバルの視線を感じまた燃える
話したくない日は自動販売機
政治資金洗うと汚れ浮いて出る
太陽を畏れず地球いがみ合う

米子市 中原 章子

片付けに費やす時間惜しくなる
片付けを任せるお金残しおく
新年を迎える準備走りだす
じんわりと気持ちに張りを生じます
白菜のレシピを試す飽きるまで

米子市 成田 雨奇

木のなかま紅葉する木もしい木も
窓側の座席で首がだるくなる
話そうと思つたニュースもう忘れ
漢和辞典手放せぬ日が来るなんて
計算が入ると絆脆くなる

米子市 吉田 陽子

年齢検査するのだいたい上回る
親切が身に染む財布無事戻り
知らぬ間に親の愛情子がかかり
未熟なら若い者にはまだ負けぬ
ノーと言える力を付けた枯れすすき

鳥取県 石谷 美恵子

老いふたりこの頃娘等に羨けられ
ふところが寒く愉快に笑えない
リハビリの毬隔つこで忘れられ
女の友情口惜しいけれど脆かった
骨密度自慢が脆く崩れた日

鳥取県 竹信 照彦

明日もある不意と出てくる若い癖
年取ると明日は目覚めるまでおぼろ
詩や歌になる雪命まで奪う
顕微鏡ミクロの雪は美しい
歳月は淡雪のごと春になる

鳥取県 西谷 悦子

東雲に今日もしつかり生きてゆく
やさしい言葉吹き溜る耳の底
生真面目がしたたかな尻尾を持ってぬ
久し振り鼻唄うたう声が出ぬ
高齢の町葬儀屋がいそがしい

鳥取県 松川 行男

支払いは三ヶ月先小企業
妻の名で出した葉書がまだ続く
習い事している孫がついてこぬ
気合いで立って寒さに勝つと大晦日
初恋の人を想えば傍に妻

鳥取県 山下 節子

反抗期親子の意思が行き違う
責任の重さ感じる孫の守り
言い過ぎて重い空気の中に居る
離乳食母は毒味をして与え
毒舌でたつぷりお世辞たまわった

鳥取県 山本正光

デイサービス職員誰も歯が白い
吹雪く日だ昔デートをした時も
寒い日と金のいる日がまだつづく
米寿すぎまだ燃えるもの隠し持つ
ダンディーねなどと言われてさわぐ胸

松江市 石橋芳山

相手にもされずそのままタンゴ虫
臆病がまさかを握り締めている
幾つもの風に刺されて死の予感
引き金は引ける切っ掛けだけがない
四畳半に沈んだままいる魚雷

松江市 錦織禮子

仏壇に飾っていますノーベルチョコ
若いねと言われた頃が遠ざかる
満面の笑顔が返るお嬢さん
柳友とめでたく後期高齢に
逸の城と見紛うほどのものも晒し

松江市 藤井寿代

靴紐を結び直してスローライフ
追伸の温い言葉が効いてきた
家中の電気をつけて鬼は外
夫婦ゲンカにエネルギー使い果たす
時々離したくなる命綱

松江市 松本文子

青空が見たのは紅葉と余生
どん底まで照らしてくれぬ這い上がる
神さまは何処に天と地を巡る
我が人生やはり幸せだったのだ
アメダスも当てにはならず傘を持つ

松江市 三島淞丘

情熱に触れて若さをチャージする
心とこころ男結びがほじけない
長生きは想定外という傘寿
傘寿傘寿と騒げばじじい臭くなる
有頂天心の鍵を掛け直す

出雲市 石倉芙佐子

流れ着く処は稲佐の浜です
出雲弁優しいような荒いよな
卒寿と米寿青春時代も遠くなる
城山の桜ひらひら吾が母校
ラブレターが時には入っていた靴

出雲市 伊藤玲子

真っすぐに生きる大きなもの抱え
手術後の幻覚つづく夫と病む
小さくなつた夫の着替えにふと涙
みかんまで当たりはずれでよろこばず
守られて累代の墓洗う暮

出雲市 岸 桂子

広島市 岸 本 清

頂点のない川柳をひた走る
お正月働く靴と遊ぶ靴

古時計ネジ欲しがってゆるく打つ

百歳の笑顔に隠すものはない

その先は知ろうとしないマッチの火

出雲市 小白金 房子

ご神殿お礼授かる感謝祭(十一月二十三日)

様々な思いが過ぎる隙間風

快方の爺に嬉しい娘の集い

おもちゃから未来を学ぶ大きな目

隣人の噂に触れぬ耳の穴

出雲市 多久和 敬子

横に居るだけで安心夫婦道

なにげなく拾った小石役に立ち

あの日から黒く染まったカレンダー

お互いに秘密を持って丸く住む

今日もまた喪中ハガキが舞い込んだ

島根県 伊藤 寿美

農政の歪み先祖の田が痩せる

残照の墓地でサングラスを外す

ぼろぼろの心励ます冬の虹

口に出したら泣きそうそつと肩を抱く

折り畳み傘も男も頼りない

不景気のせいか小銭も落ちてない

道草も食わずに孫は塾通い

好リード妻のサインで半世紀

減らしたくないものばかり減ってゆく

福寿草買って今年を締めくくる

竹原市 石原 淑子

ときめきをばらまく孫と鬼遣らい

おなじことおんなじとこでいうている

古書店で見つけたヘッセ読み耽る

点滴をうける小さな手に祈り

一直線走った過去の眩しすぎ

竹原市 岩本 笑子

日曜の朝はスズメもごゆつくり

肘ついて師走の雨のため息と

おはじきの様な流れ星の技

また一年また一年と医者通い

認知症の予備軍ですと言われても

府中市 藤岡 ヒデコ

この辺で自分を責めるのは止そう

背のびして少し遠くを見るつもり

食べたツケ膝に来るのをなんとしよう

世は太平体重如きの悩みとや

姉の忌も子供の忌にも経を読む

宇部市 平田実男

水加減火加減とゆうかくし味
危険より金に傾く再稼動

湯の街で風情楽しむ下駄の音

お世辞だと分つていてもやる気が出

チャン付けはタイムカプセルかも知れぬ

東かがわ市 川崎ひかり

生きているなんと楽しい事なんだ

一日を跨げば後期高齢者

都会人真似ても抜けぬ国なまり

実印を彫つて備える遺産分け

ふる里に疎遠でゴルフ上手くなる

松山市 古手川光

年末の掃除も手抜き古い二人

馴染みの歌手減り紅白も他人めく

センセイが又蹶いたのはオカネ

御尊顔などと言われる顔かいな

段畑も棚田も荒れて郷淋し

西予市 黒田茂代

厚岸草あの日には紅く燃えていた

お地蔵の深い眼差し秋の思惟

母の化身だろか墓前のしじみ蝶

山の辺が輝くからすうり真っ赤

くるみ紅葉忘れ得ぬ奈良の旅

高知市 小川てるみ

人間が好きでひとりていられない
初恋の訃報を知った秋しぐれ

長姉が今でもしきるのし袋

切除せず済んだセカンドオピニオン

誠心誠意荒ぶる声が折れてくる

高知県 小澤幸泉

はかなくも土砂に埋もれた新興地

日めくりがひとり歩いて年の暮れ

歳月の早さに今日が長すぎる

この年も生きてきました生きている

この空のつづき戦の町がある

唐津市 坂本蜂朗

七十年まだ日の丸を許せない

浮き沈み経て目の前に来た傘寿

網渡り済んでゆつくり振り返る

欲言えば限りがないけどまた歩く

群の中程で浮いたり沈んだり

唐津市 山口高明

亡母さんとおなじ小言を娘にもらい

口紅の濃さを他人が誹謗する

あのひとを繋ぎ止めたい縄を縛う

もう二分待てと我が家の鍋奉行

宰相も批判されると血がのぼる

熊本県 岩切康子

雨の重みに紅葉ばらばら淋しい日

貰い苗夫にまかせて花を待つ

取れたての南瓜配って自己満足

銀盤の舞に見惚れて今日終る

心根な親切あなたを忘れない

熊本県 高野宵草

目と耳に補助器を着けて朝になる

看病をするも受けるも辛い齡

絵を描いて祖母に教えるカタカナ語

生きて来た思い出語らう老ホーム

巡る季は寒い暑いの永いこと

札幌市 小沢淳

間引き菜の託ち戦力外となる

隙だらけだからみんなが寄ってくる

よこしまな証のペンがまた走る

寒月光仮設の屋根に冬四度び

ぐんぐんと生命線の伸びる音

黒石市 相馬一花

りんご狩り美女も野獣もかぶりつく

芯のない私を笑う姫りんご

熟女らも皮ごと食べるりんご狩り

りんご好き津軽熟女の光る肌

人妻の剥いたりんごは蜜の味

弘前市 稲見則彦

種袋振って明日を確かめる

時々牛の歩幅になつてゐる

澄んだ空ボクの名札を貼っておく

GPS老眼鏡に付けて置く

句読点だらけの坂で手紙書く

弘前市 岡本花匠

日日生きて長寿のみちの運不運

脳トレに夫婦の会話多くなり

介護され愛のまごころ受けている

愛憎のはざまを洗う介護の掌

忘れた字辞典で笑顔ベン進む

弘前市 今愁女

春夏秋冬こんなけじめもあるので

図書館で全集借りてきたけれど

美しい国ギャンブルは要りませぬ

辞書にないカタカナ新語解せなくて

去年今年歌合戦で貫かれ

弘前市 須郷井蛙

プロポーズ試行錯誤のマニフェスト

再稼働今のことだけ考える

孫つれてペットボトルと散歩する

寅さんの気分させる一人旅

ひと晩で工事を終える蜘蛛の糸

青信号ほうつと見落とす気の迷い
氣遣いが過ぎて足元掬われる
上げ底の自慢話に降る火の粉
従兄弟達仏事のお陰で継ぐ絆
すぐに手をつなぎたくなるもやしっ子

弘前市 高橋 洋子
弘前市 福士 慕情

お歳暮の多い隣が気に掛かる
体調を崩しているが妻を看る
晴れ渡る空にトンボの薄い影
車間距離とってたはずの凍結路
脆い場所削って河は蛇行する

青森県 松山 芳生

メトロノーム父より先に逝けません
みちのくの森から匂う血糊跡
許せるものがある地吹雪の辛さ
アカペラで歌うと星が降ってくる
戦渦の地へ植えてやりたい桃の花

さいたま市 星野 育子

得意と不得意あり持ちつ持たれつ
能力もなく運もないまま生きる
飲み込んだ言葉にもある食感
二千円札使えぬATM
いい話にはご遠慮申し上げます

そこは駄目馴染みの彼の指定席
タテ社会へそ曲がりかヨコを向く
子のために鬼を演じる母である
割烹着似合う男の目玉焼
大都会遠近分からぬ冬の雨

調布市 伊勢田 毅
横浜市 小野 句多留

依頼文題を決めれば走り出す
十二月喪中ハガキが溜まりだす
仲直り事の起りが恥ずかしい
一汁一菜それも不足な飢餓の国
真夜中の避難勧告にも事情

横浜市 菊地 政勝

一年があつという間の砂時計
神様へ頼む百歳の処方箋
切りつめた無駄に忍だけ残される
無試験で得したような喜寿の宴
宝くじもう茶柱を信じない

富山市 島 ひかる

初雪へ来たか来たかと身構える
夏山のトレーニングという除雪
泣かされた雪を逆手に村おこし
円空の里で見つけたのは笑顔
相性の良さへ感謝の未歳

可児市 板山 まみ子

毎日が未知の世界と卒寿の師

アイディアが湧けば楽しいクッキング

高齢の二人にしては良く食べる

旅に出る子を見送って渋いお茶

忙しいだけの歳末灯油買う

犬山市 金子 美千代

通信簿つけるツアアのアンケート

技術いる薄さ松茸ごはん膳

日程のやりくり友もみな多忙

長生きをしそうでちよつと怖くなり

新年へ向けて食べきる冷凍庫

犬山市 関本 かつ子

平凡に生きたいだけの票を入れ

年金の顔でレシート確かめる

いいことは三日続かぬ日記帳

ともかくも無事に過ごせてすす払い

気が合った頃にはやめてかれ

(前月分) 熊本県 岩切 康子

ガラポンを三度回して二ヶゲット

久々の友に逢うためキャンセルへ

伐り落しすつきり青空広くなり

足手入れ母の腫を思い出す

開会式腕取り誘導友優し

(前月分) 東大阪市 笠井 欣子

アルバムの歴史眺めて亡夫忍ぶ

時々はたたかう鬼もすむ心

七ころび八起きも出来ぬ八十の足

老いのうそすくにはれます笑います

孫が来て仏だん掃除してくれる

(前月分) 堺市 加島 由一

ウインクの練習をする風呂上がり

木守柿母は同居に領かず

捜すなとメモを残して立ち飲み屋

イケメンと美女の集うた天地人

道の駅夕餉したくの賢母です

(前月分) 枚方市 丹後屋 肇

しょぼしょぼの目が断片の虹を見る

補聴器を外せば静謐な此の世

鼻唄に出るのは昭和歌謡曲

我が齢身に沁みている季節風

訃報衝撃腰から崩れ落ちてゆく

(前月分) 岸和田市 岩佐 ダン吉

正論を抱えいつでもひとりぼち

頭打ったあの日があればこそだろ

森を出たヒト科が何か見失う

逆風の中も俯きなどしない

お互いさんそんな言葉が嬉しいね

川柳塔の

川柳讃歌

⑫

木津川 計

牛井屋いまだ入ったことがない

藤井宏 造

読売文学賞受賞の詩人・天野忠の詩「幸福よ急げ」はこんな内容だ。

老夫婦が山の端を散歩していると背の低いアベックがたこ焼をたべていた。「あれはまだ食べたことあらへんわ」と妻の言うのに夫は驚き、「そんなら今度はたこ焼やなあ」、そう言い合い、笑いながら散歩を続けた。

牛井屋へ入ったことのない男が宏造さんだとしたら、元氣な内です、「幸福よ急げ」

人生は二流の方が生きやすい

小谷集 一

一流と二流を、食べる牛肉の量で比べると「開高(健)は400gのステーキを食うとったなあ」と藤本義一がある日呆れた。だから開高は一流だったが、タイガーウッズは700gを食べると知って僕は悶絶しそうになった。この男は超一流である。

わが家のすき焼は妻と二人で400g。二

日目はおかず、三日まで持たせる。二流の僕の肉の量は毎食牛井並みである。一流と違い、僕らは安上りで、集一さん「生きやすいなあ」

賞味期限気にかかるのは食べてから

藤井文代

一流と二流の続きである。一流は狙われる。地位や権力だけでなく命まで危ない。だからヒットラーやサダムフセインは毒見役を傍に置き、聞けばブーチンまでらしき人物を同行させるという。

昔は殿様や側室に毒見役がついた。匂いを嗅ぎ、色を見、舌に乗せ、食べた。その反応を窺う役も居た。一流は守られて生きていく。二流の僕や、失礼乍ら文代さんは自らが毒見役、窺い役で、命を担保に生きていく。

淋しさを形にする人になる

牧野芳光

淋しい男はちゃらちゃらしない。人の輪の中に入らない。腹を抱えて笑うこともない。人の機嫌をとることができないから酒を飲みにも一人で行く。混み合う居酒屋のカウンターの端に座り、手酌しながら飲んでいく。くたびれた服装が似合い、パリッと装うことがない。陽の当たらない仕事を不平も言わず、黙々とこなしている。控え目を出しやばらず、目立つこともなく、寡黙に生きる。そんな男を「形にすると」そこには高倉健しかない。

悔しさのかけら一つもない遺影

藤井則彦

3・11の津波被災地に幽霊がいっぱい出るという。タクシーに乗った客の「〇〇へ」と言いながら車を走らせる。「この辺ですが」に返事がない。振り返ると客が消えている。非業の死である。無念だったろう。悔しかったろう。が「そのかけら一つもない遺影」だ。則彦さん、幽霊が出て当たり前ですね。

楢山へ行く日は花の種持って

木本朱夏

そうか、山姥は楢山で死を待つ老婆だったのか。斎藤隆介の名作「花さき山」は、裏山に登った女の子・あやが一面の花の中で山姥に出会った話だ。この花は村のだけれどが優しいことをすると一つ咲くと山姥は言う。驚いたあやが村に戻ってその話をするが誰も信じてない。が、あやはそのあと「あつーいま花さき山でおらの花がさいてるな」と思うことがあった。朱夏さんは花の種を持って楢山で山姥になるのだろう。優しい人間にならねば。

〔上方芸能〕発行人

一月号「スマホなんかゆめゆめ持つなアホになる」の作者は村上直樹さんでした。木津川先生はじめ直樹さん、玄也さんにご迷惑をおかけしました。謹んで訂正いたします。(編集部)

自選集

小島蘭幸

三宅保州

句集供えて師よ酌み交わそうではないか
ブレーキを踏んだことなどない羊
駅前で歌うロツカー姫と呼ぶ
付添いは姉で御祓受けてくる
岩田帯一番寒い日を選ぶ

前 たもつ

宮西弥生

老化順調早い一年始まりぬ
ボランティア教室終える十五年
これぐらい軽い気持が深い溝
癌もよし終の計画立て易し
羊飼その名を呼んで群を追う

政岡 日枝子

八木千代

厄年を無事に終わって寝正月
毎年同じこと願つてる初詣で
老いの今はしゃぐでないと心電図
とろりとろりと残り時間を夢うつつ
百人一首その一瞬はばけてない

紅白の梅が佳き日に花を添え
盆梅に一句を結び華やぎぬ
もうすぐ春噂話も連れてくる
大阪弁のニユアンス漢字では書けぬ
かな書きは漢字忘れただけのこと
花柄の杖にたのしい未来待つ
わたくしの都合蓄のままがよい
突つ張つた分だけ月がかけていく
マイナスもプラスも許す秋の天
木枯らしも言い分あつて門叩く
それならそれで
今までの旅が夢ならあともまた
一日ひと日の足どりさえも覚束おぼつかな
花いちもんめ 神は呼ぼうとなさらない
それならそれで歩んでみますあの道
旅は続いて二合の飯が炊きあがる

両川 洋々

色っぽい天女は童話から外す
じゃんけんで総理の順は決めなはれ
悪の根をこごと賄賂の数珠つなぎ
賞味期限切れた女が乱を抱く
脳死判定死者のラインはどこで引く

板尾 岳人

三億年前に戻りつつある地球
一本の果てなる道にあるいくさ
人間に咬まれた犬が告訴する
エンドレス・テープに秘密抱くキャベツ
大声で叱るムンクの叫び声

奥田 みつ子

たのもししい地下足袋みこし踊ってる
開戦記念日 戦争ダメと呟いた
母の死に父の号泣忘れない
何よりも夕陽に祈る子の無事を
嬉し泣き乙女の涙真珠色

河井 庸介

会議室風向き変わり策を練る
追い詰められ諦めはせぬ粘り腰
オフレコが漏れたと知って慌て出す
これしきの謎が解けぬと自己嫌悪
長考の一手読まれたのが不覚

川上 大輪

定型に収まりきらぬ春の夢
気がつけば馬が羊になっていた
群れを出た羊 ヒツジのままである
また惚けたふりをしているお爺ちゃん
挑戦状にハートマークが書いてある

小西 雄々

千羽鶴折って祈ったときもある
冬の虹 背中がすこし温くなる
わが家の非常持出し軽すぎる
アベマリア歌い争いせぬつもり
年金でやっと呼吸をしています

斉藤 効

生き方を問うには丁度よい石だ
囁きをひそかに抱いている冬芽
才能の芽がのびのびと子の絵筆
びっくり箱いくつも持っている子らだ
ちぐれ雲ちぎれた訳は語らない

新家 完司

皆さまの前では軽いステップで
としよりの空にも淡いレインボー
コマ送りピピピと一日が過ぎた
自死のことなどふと思う冬の底
浮き雲になろう潰されないうちに

好事魔がトラウマになる12月

津守柳伸

水漏れへ雀の涙ほど還付

枯れ葉とも仲良しになる露天風呂

馴れっこになるポイ捨でのパンの耳

侘び寂びに酔う迎春のおもてなし

遠山可住

卒寿へのお見舞新聞三日分

まだ酒が飲めて死にそうにはないぞ

入院から帰り梅干し土曜干し

糖尿というこれあかんあれあかん

有難い世だ敬老の字に甘え

都倉求芽

カレンダーなんのかんのと十二月

地下街のポインセチアがよく喋る

次つぎと忘れ去られてゆく事件

および腰ながら今年も年賀状

今年まだ賀状が書けるありがたし

土橋螢

天地人彩る松の緑かな

双六のあがりに鳴いたホーホケキヨ

謹賀新年今年も白い道をゆく

成人の日に成人になる誓い

消費税込みで値上げをしない店

誠実な証拠訛の抜けぬ人

西出楓楽

プチ断捨離でお茶濁しとく年の暮れ

誰かわたしのネジ捲いて下さいな

部屋中にリング勾つている至福

天皇も苦勞おありか背が丸い

仁部四郎

修身は甲の下ぐらいという血すじ

お祭りが済んで修身教えられ

尊徳は生活の知恵説いたのだ

修身はします治国はだれの責め

モラルとモラルコインの表裏

波多野五楽庵

合掌の指から漏れる涙かな

輪廻転生雪降りつもりまた消える

咲いて散って咲いて輪廻の輪の中に

色鉛筆いつもきれいな花ばかり

白昼夢醒めて涙に封をする

林瑞枝

若い葉に守られ花は凜と咲き

空気吸い吐いてるだけで生きられぬ

わたしから離れぬ月のある夜明け

負けて勝つ面を白寿は知っている

発明の神かも蝶もかまきりも

お湊抄

(つづき)

(前月分) 弘前市 高森 一 呑
 収穫を終えた林檎は背伸びする
 お日様の恵みでリンゴまっかつか
 落下さす林檎に詫びてりんご挽ぐ
 野ウサギもリンゴの旨さ丸齧り

(前月分) 大阪府 西川 怜子
 掃除ロボ任せておける部屋作り
 北の旅初冠雪に輝ける
 新種りんごお親がふじとて味抜群
 大地震安否不明に泣く家族

やまと番傘川柳社
 創立65周年記念川柳大会
 阪本きりり句集「ベビーピンク」発刊記念

日時 3月22日(日) 11時開場
 (昼食は各自でお済ませください)
 場所 榎原ロイヤルホテル(近鉄榎原神
 宮前駅下車 東出口徒歩1分)
 事前投句 宿題 「炎」 阪本 高士 謝選
 「光る」 くんじろう 選選
 「人形」 松本 柁子 選選
 「途中」 徳田 孝子 選選
 「鋭い」 西山 春日子 選選
 樋口 仁志 選選
 藤原 一志 選選
 西出 楓楽 選選
 森中 惠美子 選選
 締切 12時
 出句 各題1句
 事前投句 2月28日(土)までに所定の
 葉書に1句(出席者に限る)
 会費 2000円
 問合せ先 植野美津江 TEL.0744-27-4019
 FAX.0744-24-0273
 主催 やまと番傘川柳社

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

消えるから雪は利那を淨く舞い
 退院の空は果てしなく青い
 鼻ひとつ抜けない馬券握りしめ
 セーターの胸ふっくらと女 春
 負けてたまるか男赤いシャツを着る
 色を塗るだけで女が出来上り
 素うどんへ何ですかとは何ですか
 西成区 焼酎孤独 誕生日
 辞めますと言う切り札へああそうか

高杉鬼遊 略歴

大正9年4月12日 大阪市西区生れ
 昭和41年 羽曳野病院入院中に川村好郎指
 導の「どんぐり川柳会」に入会、
 川柳を学ぶ。
 川柳塔賞を受賞、同人となる。
 川柳塔社副主幹
 相談役
 逝去。81歳。
 昭和43年
 平成6年
 平成10年
 平成12年12月7日

水煙抄

西出楓楽選

弘前市 肥後 和香子

雪を見にどうぞの一筆春の指
じゃんけんぽん負けたい夜もあるのです

手触りは手洗いセーターそんな男

理想なら香草系の肉食系

シクラメン素知らぬふりで聞いている

丁寧に今日をたたんで水を飲む

備前市 森 ふみか

老母と乗る夜汽車過去へと走り出す

現世と黄泉と綱引きする齡

九十の母を生かしている葉

絵の中に今も貴女というピース

一つずつ消える二人のシャボン玉

うろこ雲バズルのピース欠けてゆく

岡山市 藤成 操 江

口紅は淡く集いの輪に入る

靴箱で眠り続けるハイヒール

来た道の苦勞が浮かぶ夜の枕

老の字は極力避けて句を作る

雑草も春を待つてる土の下

大寒の中で真夏を恋しがる

三田市 九村 義徳

鎮魂の光届けと二十年

ワンテンボずらせば会話まるくなり

童唄聞いてニッコリ認知母

リボンつけ笑った母の幼な顔

ぴんころりあんたええけどわしゃこまる

大病が心の絆強くする

大阪市 藤田 武人

サクラサク知らせを配る赤バイク

道化師になって無口なプロポーズ

真夜中のトイレ寝間から出たくはない

幾つまで教を読んで不眠症

晩酌のあては対座の妻の声

すれ違う人にもきつとある縁

大阪市 橋本典子

一つの世も母性を越える愛はなし
銀杏の葉西の空にラブコール
そこそこの幸せ子らと掘りごたつ

命日に椿ぼとりと庭石に
寒波耐え梅の蕾は春を待つ
秋が来て果物好きは母笑顔

河内長野市 森田ひろこ

病む母を見つめた日日をいとおしむ
もの忘れ病気がどうか悩む日日
針を持ち母の仕草を追いかける
浴槽に涙を埋めて今の幸
コンビニのおでんにゃ負けぬ腕自慢
隠すほどなくて税務署怖くない

宝塚市 丸山孔一

いつ読むの積んどく本が手で招く
隣から菊一輪のお裾分け
金箔が池に逆立ち鳳凰堂
飲み食いも好きにしなはれ医者も匙
南禅寺並の豆腐も有難く
団体が出雲の神に願かける

米子市 野川宣子

記憶の中の母はいつでも動いてた
忘れてはけません老いて来たのです
手も足も怠けたままで日が暮れる

主婦業も怠ける術も身に付いた
酒とろり女子会だって負けられぬ
歳月がとろり溶かした仲違い

倉吉市 堀かずこ

ケンカしてみなまで言うな言わせない
古希を過ぎ上手に年をとっていく
軽はずみその一言が許せない
花が咲く坂道だけど通ります
悩むまい夜が明けない朝はない
一日がかけ足で過ぎ師走です

神戸市 井上忠貞

叱られて新人キョトン間抜け顔
古女房痒いところに手が届く
打上げは一本締めでお開きに
浮き沈み繰り返し返しての五十年
飾り捨てシンプルライフ古稀の坂
友が逝き老前整理真剣に

大阪市 浅井公平

朝と晩安否チェックが娘から
十度切り布団出るのに勇気いる
皆願う横田夫妻が笑う日を
コンビニと宅配食で秋を食う
幼児みてニコニコしてる爺になり
公園のベンチポカポカ儲けもん

神戸市 山根 弘子

言訳が出来ずたじたじ後ずさり
満月を雲が時々嫉妬する
人生に抜け道もなくマツシグラ
何げないあの一言が身に刺さり
雲掴む甘い話にひよいと乗り

小野市 藤原 泰宏

人生の節目の古稀が来てしまひ
同窓会古稀になつてもあだ名呼び
幸せになつてほしいが複雑だ
日本の一夫一婦は誰がした
久しぶり恋の辛さを思い出す

川西市 大坪 一徳

真剣に生きた証しは求めない
ジグザグの道は出会いも人情も
むくむくと不穏な雲が世を覆う
円安は本当に良いことですか
没句でも僕には僕の主義主張

三田市 多田 雅尚

紅葉と冬將軍が同居する
マスゲーム一糸乱れず交差する
はやぶさ2に生きる目標与えられ
カーナビが日没知らせライト指示
水素水何に効くのか聞いてみる

宝塚市 井上 風花

形見分け公平期せど争奪戦
ボスターのイケメン選ぶ総選挙
負け戦さ知りて絶叫師走風
おいしいね妻の料理の腕上がる
親の脛年々細くかじられず

南あわじ市 萩原 狸月

節は買い賀状は委託暇な暮れ
晴れと褻の境はやけるお正月
駅伝は箱根で明けて京で暮れ
宴席で声が小さいウーロン茶
歳月は平等でないクラス会

奈良市 安福 和夫

瞳見て交わす会話が懐かしい
物知り顔指先でペンくるくると
枯葉でも煌きながら散っていく
肩書はリタイヤ族のアドバイザー
ハヤブサも東京五輪目指してる

和歌山市 磯部 義雄

栄転と割り切つて行く遠隔地
顔も名も思い出せないクラス会
防災の頭巾懐かし戦時中
買う方が安い苦勞の米作り
根性は曲つていないぞと胡瓜

和歌山市 北原昭枝

机上論ばかり実になるものがない
居心地のいいコーナーに置いた椅子
まだ未完満足できぬ花鉢
土壇場でたえて実になる花もある
ふる里へ続く行列去年今年

和歌山市 平田元三

威張らない詔わないが楽でよい
救助する人も気になる大惨事
内助の功外人妻が良い見本
効用で言えばりんごは果実王
雑草が春を先取り芽を出した

岩出市 村中悦男

がんばれと言つて目と目で友見舞う
回れ右できず迎えた十二月
わらすべも離さぬという豆のつる
じじばとそれだけ言えばいいひ孫
気がつけば他人の不幸とくらべてる

紀の川市 楠原富香

生き甲斐を見つけ背筋が伸びている
負けないで雨は降っても晴れるもの
瀬戸際で光る男のど根性
かけ橋になつて我が身も満たされる
死して尚輝く父の一行詩

和歌山県 森下よりこ

袖子しほる一人の朝のはじまりに
花柄の端切れ集めておぼあちゃん
納豆菌におなかの掃除まかせます
ちよつとだけが毎度になつたなまけぐせ
嘘とまことの政治家の演技力

鳥取市 近藤秋星

気が付けば正月がもう目の前に
年寄りに一番嫌な季節冬
大山の初冠雪を寒く聞く
悟りなど開ける訳がない凡夫
父よりも母より我れは長く生き

鳥取市 坂本とも湖

体重計先ずは片足乗せてみる
やがて逝く墓碑に私の名を刻む
川柳でやがて天とる夢が燃え
落ちこぼれて残る男に福が来た
浄土へと続く一本道を掃く

鳥取市 山下凱柳

真面目という仮面鎧をつけて古希
次世代にツケを回す安倍総理
味気ないメールで交わす年賀状
人生の終焉近し賀状減る
喪中ハガキ友の思い出蘇る

倉吉市 中村 毅

脳年齢すでに後期の仲間入り
貧乏神招いてないがやって来る
当たりくじ神の気まぐれだと思ふ
不器用に暮らしてますかあの世でも
七十歳未だに探すバラダイス

米子市 生田 和之

いい夫婦でありたいものと日々想う
冗談も本音も重ね愚痴語る
無い袖を振らせて孫のありがとう
難解句にらんでボケを防止する
まず返事やがてどっこいしょと動く

米子市 永井 三津子

オベを待つ目覚めぬ時も覚悟して
何もかも未完と悔やむオベ前夜
恐怖消す句作り本音ばかり出る
母と言う理性が笑顔保つてる
一行の手紙に心救われる

米子市 見山 温子

菓子箱が山と積まれる新仏
老い安泰馬鹿になる知恵隠し持つ
用済みの案山子秋まで小屋の中
シャボン玉風にまかせて旅に出る
お喋りにテンションあがり訛出す

鳥取県 下田 茂登子

逝ってから気付いた夫の優しさが
仏さま信じて生きる八十路坂
憎しみを込めて喋ってまだ元氣
世渡りも上手だ嘘も旨いこと
振り返ってみれば八十路はあつと過ぎ

鳥取県 橋谷 静江

縁の糸根っ子で結び長つづき
万物に感謝しながら日日暮す
チョットした事で弱気になつてくる
太陽が今日の仕事を手伝つた
平凡な暮しができる世を願う

松江市 山根 邦代

他人から見ればよたよたしてるかも
頑張れの励まし時につらいもの
笑顔から元氣をもらう冬毎
天気図が鍋にしよう誘つてる
調理台立てば庖丁うたいだす

雲南市 菅田 かつ子

ちよつとだけお洒落して来る包装紙
えーあれあれ言葉がさつと出て来ない
両方を聞けばそれぞれ尤も
赤鬼をしょんぼりさせる休肝日
我が家の灯台守のお母さん

安来市 原 煩惱児

老いの財布誓文払い待っている
十数回手術の痕を湯に浮かべ
体中チャックで八十路半ば過ぎ
年の暮れ老爺の影も薄くなる
割り切りも諦めもして儂の影

岡山市 工 藤 千代子

掛声で登る階段吐息でおりる
自由と淋しさは裏表です
指紋だけこの世につけているところ
母からの答が欲しいから仏間
縦糸が切れて横糸も狂う

岡山市 丹 下 凱 夫

朝刊とコーヒー語り合っている
楽天水の流れる方に行く
健さんも文太も逝った星月夜
リハピリの汗がシヨッパイ生きている
悲喜劇があつて登つてゆける坂

岡山市 前 田 恵美子

秋風にベスト羽織つて鍋支度
度胸だけ持っていますと橋渡る
かずら橋向う岸だけ見て渡る
信じてる言つてるその目温かい
沈没をしない程度に信じ合う

瀬戸内市 東 横 ますみ

紫の言葉の裏にあつた罨
道草が好きで尻尾の位置にいる
親指の苦勞は知らぬ薬指
暮れなすむ道で拾っているまさか
出てゆかぬ形状記憶された鬱

岡山県 田 中 恵

極楽と思うポカポカのねぐら
磨き粉でこすつてみたい脳回路
突つ張つてみても根気が続かない
面倒なことは言うまい梅茶漬
一番星幼馴染みの顔をする

尾道市 小 畑 宣 之

永訣の友の恋しき年の暮れ
湯豆腐のたのしみ今日は師走入り
師走入り町も道路もけたたまし
黒帽子白髪頭を隠しけり
交差点歩きスマホに近付かず

竹原市 若 年 幸 子

小春日の優しく包む車椅子
太陽と遊んで柿は洪を抜く
病院をはしごしながら今日も無事
妖怪も神々も棲む森の海
ドレスになった亡母の着物と語り合う

三原市 鴨田昭紀

堅実な歩幅を知っている踵

斜めから覗くと価値観が見える

踏ん張っている人生の急斜面

知っている振りをしている世間体

都会より大きいふるさとの月

山口市 中前幸子

愛不信こころに白い闇を抱く

風花やビーフシチューの湯気かすむ

エンディングノートは薔薇の花で埋め

風の駆わたしの夢を置き去りに

月蝕へゆらり九条傾いた

山口市 増田めだか

記念日を忘れて妻の火を潜る

断捨離でへそ練見つけランチする

農休日夫婦別々好きな事

雨の午後茶飲み話し軽い耳

スローライフラジオもいいね猫と居る

松山市 栗田忠士

いにしえを偲ぶ埴輪の目はうつろ

捏ねられて採まれ踏まれてこそうどん

鶴彬ならどう言うだろう特秘法

冬日射す人待ち顔の吹きだまり

鬱憤を水割りにして呑んでみる

松山市 神野きつこ

銀杏の木はらりはらりと冬が来る

再会の二人の肩に降る落葉

じゃあまたねマフラー空に振っている

砥部焼の大皿に盛る蟹の足

家計簿をひらき聞いている除夜の鐘

北九州市 岡田幸生

七転び八起きで曲る父の背な

ややこしい話は避ける十二月

主夫業に馴らされ今日も米を研ぐ

八十路来てまだまだ登る坂がある

子へ注ぐ母の泉に底がない

北九州市 小松紀子

雑念を一掃してくれた紅葉

十人十色離れて観察おもしろい

甘えると甘えただけのつけが来る

ボランティアアスケジュール埋め今朝も幸

死別した夫はいつも美化される

唐津市 北村松風

紳士用熟女かけ込む観光地

徳俵まだ余裕ありいま米寿

間違いで押してはならぬ核ボタン

蜘蛛の巣に光る宝石朝の雨

忘れても惜しくない傘持たされる

佐賀県 真島 久美子

優しさの数だけ嘘がありました
心には自動消火の機能付き
その言葉サランラップをして保存
サヨウナラ冬には冬の枯れ方で
鍵の音ここから先は異空間

熊本市 杉野 羅天

花切れに柿の紅葉愛でている
円安で海外旅行ままならず
アベノミクス年金までは上げられず
健さんにあやかる僕もさつと行く
ヌーボーが飲みたくてまたフレンチへ

山鹿市 柳田 白沙

まあるい背そんな貴男が愛おしい
アベノミクス方向転換只啞然
ノラちゃんに私の悩み打ち明ける
使えないバイトのお礼は貯金箱
隣との垣根下げたら仲良しに

札幌市 斉藤 宏子

悲しみに耐えてふるえる膝頭
冬銀河母子寄り添う帰り道
寒風に老いの傾斜もきつくなる
剣玉の音に昭和が目覚ます
煮りんごにシナモン香り冬が来た

弘前市 吉川 ひとし

生年月日忘れた母の背が丸い
陽を浴びて弱音を吐いた霜柱
一言を言えずに悔いる喉仏
からたちの棘に弱味を握られる
ぐいぐいと夕陽が背を押してくる

塩竈市 木田 比呂朗

逃げ回る鬼にはきつい豆つぶて
ワントーに続くスリーで踏み出せず
終章もまだ追い風を心待ち
シクラメン春待ち顔のように咲き
白票も権利行使と胸をはり

東京都 川本 真理子

母老いてもお手玉の技あざやかに
今日の身を母のあの日と重ね見る
ふと迷う名残の薔薇を摘むべきか
過不足なく暮らし青空満喫す
思い切つて幸せだなと言ってみる

横浜市 巖田 かず枝

眉カット赤い口紅何処行こう
食いしん坊まめに歯医者に通つて
宮参り大きなことは望まない
義理だよと夫いそいそ飲み会へ
金持ちじゃないが遺言書いとこか

横浜市 川島良子

江南市 脇田雅美

売れ残りわんさと詰めて福袋
これ以上欲を出したら崩れだす
イルミネーション天国からも見えませすか
今のとこひとり暮しが性に合い
目一杯予定を埋める淋しがり

川崎市 成田せいじ

豊橋市 藤田千休

密漁はダメよダメダメ赤珊瑚
唐突に700億の無駄遣い
後付けで大義名分でっちあげ
お酒より薬飲み合う古希の会
ITに辞書も書籍も乗っ取られ

佐渡市 高野不二

沖繩市 森山文切

死亡記事出て思い出す名女優
コンビニのすし外国の味を食う
気づかってくれる味噌汁もの足りぬ
学費ごと都会へくれてやる子供
一月置きの入金毎日払う金

静岡市 渡辺芳子

大阪市 磯島福貴子

あまりにも年月早く行き過ぎる
満月にうさが居ると信じた日
晴天の富士はいばって姿見せ
どっちが自分自分の中に二人居て
女でいい静岡でいい日本でいい

泥臭い手法で相手てこずらす
買わないと当たるはずない宝くじ
逝く時は誰に聞いても分からない
落し穴想定外の場所にある
カタツムリ騒めく世にもマイペース
境内でスキップしてる千歳飴
るんるんの孫にしぶしぶトイザラス
初恋の余韻を壊すクラス会
家計簿をアベノミクスが袖にする
荒波に揉まれた背がチビていく
舌打ちは聞こえないようしたつもり
言葉で溢れている息止め至福
爪削る鱧は几帳面である
深呼吸しても深みを抜け出せぬ
荷を載せる隙間僅かに残る肩

シューを焼くふくらみ待つ間わくわくと
もしかしてその言葉ってプロポーズ
金目当て孤独な老いに毒婦の手
文箱の死亡父の筆跡温かい
金色のいちよう葉ひらり舞扇

大阪市 宇都 満知子

心にも体力欲しい気の弱さ
臓器提供選択させた親の愛
横隔膜鍛えています深呼吸
言葉尻ひとつで言葉生きてくる
口喧嘩ごめんと先に下りて楽

大阪市 太田 としお

待つだけで幸せなんか来ませんよ
賞金額聞いてテニスをやり始め
気にかかる七億ジャンボ宝クジ
右スマホ左スマホで前スマホ
ウメキタは見学をする人ばかり

大阪市 柴本 ばっは

樹の精もジツと耐えてる銀世界
こだまさえ凍りつく日の白い森
どっこいしょこの頃うちの鬼もいう
白酒でチラリ本音をうちの鬼
バレンタインのチョコをほしがるうちの鬼

大阪市 高杉 力

持ちネタのギャグが使える初対面
歌よりも台詞のところで受けている
咳しても大丈夫との声もなし
免許証出せと言われずシニア割
一振りで客の腕前知るキャディー

大阪市 田中 ゆみ子

どきどき感きつとあの角曲がったら
首縦に振らない君に湧く闘志
やってみて分かったことがたとある
正論は要らない丸く住む家族
反省はするが長くは続かない

大阪市 平賀 国和

笑っては心の皺を伸ばしてる
幸せは九条を持つ国に住む
近頃は来るのが早い誕生日
生き延びて戦なき世を見てみたい
教育が世界変えるとマララさん

大阪市 松田 聰

ボチボチという挨拶がなつかしい
消費税じわりじわりと身を攻める
コンビニで一円足りず札くずす
どうにでもとれる回答して平和
過ぎてゆく時の速さが恐ろしい

大阪市 若本 安代

きつい坂声掛け合って登り切る
燃える秋絵の具の赤が足りませぬ
老舗宿湯舟の中は貧富なし
胸なでる友の元気な筆はこび
筆太の文字わくわくと新酒有り

池田市 上山 堅坊

一本のメールに消えてゆく怒り
叱る妻居なくて酒が怖くなる
叱られていても分らぬ呑気者
DNA歳ゆくほどに浮き上がる
亡き妻の悲しむ顔がつい浮かぶ

泉大津市 助川 和美

老眼鏡にルーベ重ねて秋夜長
薪を割る昔の父はたくましく
教わっておけばよかった母の味
寝たふりがばっと目を開け降りる駅
来年の手帳飲み会先に記す

貝塚市 石田 ひろ子

マフラー帽子装備完了ウォーキング
哲学者の顔で刈田に立つ鳥
死ぬ話で盛り上ってる老人会
鉛色の玉葱に見る処世術
葉はたんの鉢正月の顔にする

貝塚市 吉道 あかね

主婦業を本気でこなす十二月
色々あつて今幸せと言いつける
古傷が味方になって愛おしい
ハグをする両手はいつも温めてる
冬籠りみかんと本と毛糸玉

河内長野市 大島 友子

今日という未知との出会い胸弾む
高く青い空に溶かしていく心
唯一の財はマッチョな健康美
愛犬に秘密の遺書を残して
お帰りと迎えてくれるポチ一人

河内長野市 藤塚 克三

また電話暮しを乱す墓地セーブル
身の回り整理しすぎて風邪を引く
酒は駄目背いてカメラ呑む破目に
妻の後ろ今や添え物畏まり
円安で日々の暮らしが綻びる

堺市 羽田野 洋介

潮時を待つてるうちに通り過ぎ
時々手抜きするのも処世術
無理をせずがんばりますよマイベース
興味津々砂地へ水を撒くように
大が小を兼ねるだなんてムリ言うな

堺市 山崎 早苗

二十年同じ手順で化粧する
誰からも忘れ去られたような駅
冷蔵庫開けてのぞいて閉めてくる
紅葉のライトアップもLED
ケーキとは絶交してたはずなのに

高槻市 松岡重子

ナツメロが耳を酔わせて眠れない

大阪が好きたこやきも人情も

スマートな嫁ではないが健康美

両膝を庇い庇って渡る青

心身も一緒に削る歯の治療

豊中市 上出修

選挙カーやつと浮かんだ句が逃げる

サムライもサンバに乗れずピッチ去る

未だ若い押さえる思い顔に出る

懐石の締め玉露で不眠症

逢い引きの言葉の余韻レトロ調

豊中市 源田啓生

この寒波日本を鍛えているらしい

幸せを描いています鍋の湯気

バラ色の一日にする赤ワイン

愛と恋だんだん透けて来るばかり

リニアには乗りたいけれどけれどなあ

寝屋川市 岡本 勲

忘年会どこかで我をおき忘れ

長電話切って用件思い出し

湯ざましのような亭主ともう少し

癒しの湯こみあいすぎて癒されず

年毎に増える心の皺の数

羽曳野市 藤原大子

三年日記去年の今日と比べ見る

ふるさとに帰れば里の顔になり

色々とあつて無言を決めている

勝つ迄が充実してた光つてた

風も吹き雨も降つたと笑う今

八尾市 前田紀雄

突然の癌の告知に正座する

誓約書サインだ癌に立ち向う

じゃじゃ馬に振り回されたこの一年

さあ選挙ダメよダメダメ消費税

羊雲乗って一年闊歩する

大阪府 小栢 こずえ

晴れの日も雨降る日にも感謝する

晴れ続く日和に急ぐ冬支度

診断は加齢と言われそぞろ寒

今年こそ会おうと言うて便りなく

冥土へのみやげ川柳持つていく

大阪府 高木道子

カミソリと言われたお人喪の知らせ

うす氷しばし紅葉を閉じ込める

ワイルドなマグマが探る日本地図

そつけない言葉に欲しい接続詞

時雨去り騙し絵のごと虹の橋

公園で遊ぶ子供の声が好き

神戸市 木村 忠 義

アスリートにパワーをもらうこと数多

寒がりのぼくは猫だが妻は犬

長湯してこころのカドが消えました

神戸市 玄 番 美恵子

反省が今も生きてる師の教え

反省を込めて熱燗そっと出す

足らぬとこ補いあって老いの坂

はやぶさに夢を託して待つ地球

神戸市 輿 水 弘

いつまでも高い目線じゃ嫌われる

この道を曲がれば郷の風が吹く

喜寿の朝いつもの小言受け流す

元気ですその一筆が沁みわたる

神戸市 富 永 恭 子

欲望と言うアクセルを修理中

感情線ブレーキ踏んでおさえ込む

偶然に姉妹に生まれたが大差

一つだけ幸せあった日の平ら

伊丹市 平 井 富 夫

村芝居代官役が板につき

知恵捻る良い句が出ないでも参加

躰いたこの石ころで一句読む

美味しいなゴルフ場での一杯は

立ち話お伴の犬は欠伸する

不便だがわくわく暮す山の里

老妻のつくづくと視る働く手

リニアカーどんどん日本狭くなり

加西市 中 川 修

ひとめぼれアキタコマチにヒノヒカリ

敵に塩贈ったけれど気が付かず

モンゴルに塩まきだけは負けるなよ

親戚がにわかには増える地方選

加東市 黒 崎 美紗子

デイサービス編み物するの久しぶり

座布とんの出来る楽しみ針すすむ

編んだのを六枚重ね座布とんへ

縁側のぬくさ植木もわたくしも

川西市 日野岡 和 之

思い出は柿色ばかり里帰り

みちのくを呑み込み海は知らんふり

ヒロシマナガサキフクシマ核連鎖

九条は平和の要土性骨

篠山市 佐々木 勇

ラッピング相手の心読むりボン

横目から睨んでいます指定席

平凡に生きた証に敵がいた

後期高齢無我の境地だ草むしり

篠山市 藤井 美智子

百ヶ日亡母との暮らし遠ざかる

笑顔だが心配色が隠せない

お開きへ握手握手のクラス会

お向いの灯り一人居慰める

三田市 足立 つな子

食太く何でも食べる人と添う

村祭り諸事万端の宵祝い

ワンコインやつと貯まった旅費用

酒を飲む素面で言えぬ八つ当り

三田市 今西 廣子

虫の良い話はないと蟻の列

人間に干されて終る吊し柿

どんと来い出合いの窓は開けてある

ありがとう友の手を借り交流場

三田市 上田 ひとみ

楽しみにしておりますと書いておく

華やかに舞い終えました秋の詩

かあさんの仕事はずっとこれからも

温かいものならいつもコトコトと

三田市 木村 マユミ

ぬくぬくと生きてはゆけぬ事を知る

真紅のバラ見つめていと血が騒ぐ

従兄弟会なれ親しんだ時が過ぎ

健さんの黄色パワーに火がついた

三田市 辻 開子

応援の党との握手がっちり

夫婦歴史ハビリつきあう余裕でき

恒例の三日坊主の手帳買う

雨の日は休養日だとすぐ決める

三田市 野口 晶子

四世代誰が払うの食事会

健・文太昭和を背負う武士が近く

自惚れた鬼が住み着き騒がしい

腹時計ときどき狂う停年後

西宮市 株元 玲子

手抜きして楽にらくにと知恵まわる

寝惚けたか朝と夜との勘ちがい

忘れ上手になり心しわ伸びる

予想外日々災難の報に会う

三木市 山口 久子

クリスマス子等はたのしみ親悲鳴

せまき庭山茶花紅葉咲き誇る

秋風に誘われ友と紅葉がり

ばあさんは五体不自由口達者

奈良市 尾畑 なを江

今頃になって大きな財布買い

守るものいくつもあって強くなり

人生と四季のうつろい似てて妙

逝く秋や土塀の外に柿二つ

奈良県 谷川 憲

亡母の顔思い浮かべて暮参り
言い訳を伏し目で言うて自己嫌悪
田舎暮らしノンビリでさずネット漬け
勧誘に留守番ですとお断り

田辺市 大峠 可動

妻よ吹雪だ亀になれ猫になれ
うそぶいて二人三脚風を撃つ
絶景に見とれてどんぐりが落ちた
夢の夢追うて追われて無重力

鳥取市 大前 安子

趣味ひとつ螺旋階段登りつつ
成し終えて振り返る部屋あかり消す
文庫本一階二階連れ歩く
冬至南瓜一喝だけでまだ切れず

鳥取市 坂本 とも湖

若作りして古稀も米寿も花咲かす
点滴がぼとりぼとりと虹を生み
母強し太陽のごと照り返す
初恋のページもセピア色となり

鳥取市 高原 かおる

加齢かな几帳面さが遠ざかる
生まれつき陽気なたちで得をする
残された余生でくたく生きてゆく
てくてくと歩いてみてもやせられず

鳥取市 田中天 翔

羊年いい風吹いてくる予感
本腰を入れてみたとて蛙の子
何事も程程なのが性に合う
期限切れた脳細胞が働かぬ

鳥取市 谷口 回春子

不都合なことはいつでも聴かぬふり
一つずつ確かに齢をとってゆく
爺と孫世代を超えた兄弟だ
酷使する脳も時には小休止

鳥取市 津村 律子

薄の穂ふわふわ日和慈しむ
手漉き和紙文化遺産の仲間入り
卒寿の叔母に誕生祝い倍返し
新興住宅燥ぐ子供の声響く

倉吉市 岡崎 美江

目指す山眺めて充電しています
ひよっとして本音かくした笑顔かな
一病と向き合うテーマ無限大
ライバルの枝すくすくと伸びている

倉吉市 田中 紀美恵

一家団欒湯気が結んだチャンコ鍋
大発見だ子の頭にはぎり三つつ
脆い命さよなら言わず旅立った
墓前の酒いつもまにやら空になる

境港市 中井 虎尾

自分から美人と思ひ気取る女
マッサンを見てウイスキー今ブーム
居眠りやヤジのお方も今まじめ
モンゴルに大和魂齒は立たず

米子市 池岡 たけし

春を待つ親子揃って円い背な
寒空はこころ気持を引き締める
仲の良いとろり溶けそな夫婦愛
ふるさとは山を仰いで海眺め

米子市 加藤 正二

老いるほど自炊上手に手抜きする
脳電池八十路ふらふら迷いだす
あれこれで話通ずる老い仲間
なるようになれと決めたら血がたぎる

米子市 田村 周子

健さんは黙っていてもあの人気
孫息子嬉しいデート弾んでる
糖尿病油断大敵旨いもの
カラオケは皆上手で怖じ気づき

鳥取県 飯野 菖子

帳消しにしたい気持ちと言えぬまま
大輪の花を咲かせた花火散る
暑くても育つ野菜に鎌を振る
ミラクルを信じて生きた長い道

鳥取県 田口 清帆

運は天にひいてみますか宝くじ
体操で一番好きな深呼吸
運命は時に厳しく明と暗
二度三度起きては朝を確かめる

松江市 相見 柳歩

一生が大漁続き君の愛
想い出をシャンとさせよう日に晒す
好きと言う代わりに君も黙り込む
齒ブラシをくわえて皆既月食を

松江市 武島 千代枝

山茶花の散り際に見る潔さ
返事してくれた筈よもう一度
自己主張八方美人にはなれぬ
見ただけで読めぬ赤子の名が増えた

出雲市 黒目 英男

いばら道それでも希望失わず
友だちの輪を広げ夢叶えたい
大枚のお金ばらまく総選挙
いつまでもさんくんちゃんのクラス会

雲南市 松本 昌

後期高齢それから末期高齢者
障子張り少しすねてるまま乾き
手のマメはゴルフじゃないよ鎌振う
半額に元の価格は信じない

岡山市 永見心咲

失敗はバネにしましたホッピング

白線を跨ぐ約束してしまふ

抱きしめて抱きしめられてなお寒い

逝く日まで洗い続ける貌である

笠岡市 藤井智史

ミスをして少し賢くなった僕

増税にダメよダメダメ言っておく

恨みでも買ったか酒が辛くなる

やけくその歌が聴こえてくる酒場

玉野市 片岡富子

大吉で明けたまんまで年が暮れ

大凶の夫も平和に年暮れる

亡き父の打った釘たち頑固なり

ピンはけに写る美人に皺は無い

岡山市 池田たか子

野地蔵のふし目優しい草紅葉

通院の時雨ほんわか柿すだれ

皇帝タリア目線に活けて面映ゆい

まだ翔べる夢は八十路の羽繕い

岡山市 紫しめの

合鍵が一つだけとは言っていない

七人のおばちゃん刑事より怖い

隣から旅の土産の塩届く

プーさんの切手で届く挑戦状

尾道市 日谷寛

ままごとの恋に菜の花つくしんぼ

げんまんの恋にれんげの首飾り

情熱の恋にカンナが赤く燃え

禁断の恋を諫めて薔薇の棘

竹原市 土井輝恵

寝たきりに学習させれ帰路につく

寝たきりを誰が不幸と言えるだろ

墓参りきつちりやつて娘は帰る

いつからか哭かない女になって冬

竹原市 六田半徳

鏡見て今の体調考える

退院後妻と二人で花を植え

八朔がやつと黄色こがねの実をつける

ジョウビタキこの冬顔を見せてくれ

福山市 藤後卓也

その昔恋した人の句に出合う

何もかも呑み込んで今山眠る

下り坂なのにペダルを漕いでいる

賞味期限早く早くと言われても

三次市 伊藤寿子

5歳児の孫のピアノに負ける指

エリーゼの為にしか弾けぬまだ生徒

ピアノストの演奏聴いた日の鼓動

今日が一番若いと呪文かけ生きる

宇部市 高山清子

言つてみただけの舌禍の後始末
力にもなるが武器にもなる言葉
言い出せぬ自分を責める帰り道
迷惑な独りよがりの義侠心

防府市 坂本加代

柿の実のバラバラ落ちた里の家
細々と続けた趣味の小さな実
その時代強き心の白蓮よ
紅葉の原理を知ればもの悲し

今治市 渡邊伊津志

俯いているだけだから怖い人
落ちたのは自分で掘った落とし穴
運命に任せてからの気のゆとり
人間を信じることのむずかしさ

大洲市 花岡順子

大掃除ストッキングが役に立ち
自己流のおせちで春を迎えよう
忙しくて嫌なこと忘れませ
騙されて下手な芝居に巻き込まれ

高知市 三谷待太郎

古傷が揺り起こされてふくれ面
戦争は経験してまず映画みて
よく笑うそれは単なる癖だった
賛成と反対の間に神の域

福岡県 本田さくら

手と足に今日もよろしく声かける
朝八時「マッサン」に会う食事時
下積みの長い人程味が出る
雨音に病の友をふと想う

佐賀市 清水園實

夜になり食べすぎたたり反省し
診察日夜はビールでアジさしみ
クリスマス息子に渡すプレゼント
たのしみは孫の成長わが支え

唐津市 岩崎實

一枚も残さず散りし大銀杏
このくらし苦難の歴史あつてこそ
ノウハウはオンリーワンに付加価値を
光かげいいことばかりとはいかず

唐津市 吉富節子

癌判り友は年だと死を覚悟
パスポート見れば思い出走馬灯
仏滅に茶柱二本立っている
介護して姑と嫁との和が出来た

山鹿市 前田幸子

農民を救けてくれる人選ぶ
喜怒哀楽生きてる証がならばニヤ
独居なり庭の小鳥と会話する
都合よく認知症でとごまかして

山鹿市 三谷直男

選挙より大事な投句締切日

家のハト山に帰らずペランダに

野良猫と野鳩もオレも太り気味

今月も生きてゐるぞと投句する

シドニー 坂上 のり子

月下美人パッと一夜を生き切った

寝静まる闇にひっそり冴える花

リーダーが二人いて輪がゆがみ出す

ふくろうの模型にカラス騒ぎ出す

札幌市 富永恵子

メモ帳のメモを見つめる待ち時間

未完の絵右脳左脳に鳴るピアノ

久し振り音符が走る指踊る

亡き夫の手帳に謎の頭文字

弘前市 高森一吞

嫁姑微妙に違う塩加減

胃カメラをハラハラ顔で待つ焦り

自衛権次のラッパは消費税

疼く足うっかり薬のみ忘れ

つくば市 嶋本 喬

白寿母突然の死を凜として

母世代すべて終って次オレか

寂しさは声に涙にならぬ暮
師走です賀状喪中に早変り

東京都 井上 つよし

古女房の手料理腹に沁みわたる

大噴火数分前のツーショット

野仏の行水でした通り雨

油断するな美味い話だ眼を擦れ

東京都 高岡 弥生

ふなっしー走る姿も人気者

諦めない気持ちに次につながって

ピーチクとおばさん達がやってくる

試してる努力は決して裏切らない

横浜市 長島 亜希子

気のせいか木々が品良く色づいて(乾門通り抜け2句)

紅葉愛でる行列陛下喜ばれ

燃えるもの失せたか寒がりの夫

ファールブルになつて蜘蛛の巣見入ってる

伊勢原市 小田 幸子

同じこと重ね重ねる人生さ

耳の奥声なき声を聞く母よ

夕日燃え心静めて今落ちる

モズ鳴いて空家の庭に柿がなる

愛知県 樺 嶺志

癌ありとやつと賀状に書く悟り

一人では寂しかろうと妻の友

親友の妻への手紙読み聞かす
また来ると寂しさ抱えホーム去る

大阪市 内田 志津子

クラス会話合わせておくとする
自分史に自由きままな花添える
晩年に残る時間で夢を追う
美人にも神は平等老いはくる

大阪市 大治 重信

双六をあがってしまつた八十路春
漢字では惚れる惚けるはなぜ同じ
どちら良い犬と猫にも問う選挙
さよならと手を振って散る鈴紅葉

大阪市 寺本 実

やんわりと書いてはいるが金返せ
くれないの衣をまとい逝く紅葉
あといくつ夫婦でいどむ二百歳
いつまでも挑戦ですとそつがない

大阪市 梅里 南天

逆行の暴走族に入ります
臆病な子は信号を引き返し
また今日もやくざな冬にしばかれて
ご近所に葬儀屋さんが増えていく

大阪市 前川 善之

フィギュアの百花繚乱覇を競う
もみじ狩三色競う嵐山
あの人なら支配されてもいとわな
悪口を隠すことなく言える仲

大阪市 宮村 満寿恵

全快の友わくわくと電話口
遊ぶにはパワーも金も必要だ
運命の人と暮した半世紀
納得はしてない時も流しとく

大阪市 吉田 知之

仏壇に通知簿供え手を合わす
入選句何れを見ても為になる
水煙抄何んとかまとめほつとする
不味くてもどれも旨いと言うテレビ

堺市 梅木 澄空

拍手浴び笑顔でゴールベべたの子
耕せば自ずと抱負湧いて来た
勿体無いの精神無くしすぐに捨て
わたくしを乙女チックにするケーキ

堺市 近藤 治子

雨上がり双葉出揃うプランター
来客の靴を揃えた孫をほめ
しぶとさもいとおしくなる孫の乱
道具みな揃えた趣味が進まない

堺市 増田 わこう

言訳は秘書が秘書がいつもの手
カジノとは訳せば高級バクチ場か
地下資源やがて底つくときがくる
税金におまけはないね取るばかり

堺市 大和峯 二

ひたむきに生きたノウハウ今生きる
逃げ道を少し空けてる年の功
ほろ酔いで大風呂敷をたためない
無我夢中生きた時代で今がある

河内長野市 穂口 正子

いつまでも足踏みしてた出番待ち
家の中約三割は塵だらう
聞いてどうする他人の年金額
幸せの振り懸命に生き急ぎ

河内長野市 渡邊 修

新年もポチとミケとの差し向い
金持ちは一円までもよく値切る
おせちよりマクドを好む現代子
老婚で財産聞かれ即辞退

高槻市 三谷 白黒

このごろは今だけ金だけ自分だけ
あのギャグで何故笑うのか解らない
何も無く今日も一日過ぎてゆく
古希のひと老人会で若手です

豊中市 荒巻 夢

菊の花歳とるほどに好きになり
病葉にわれを重ねて摘み残す
整形美人お婆さんにはなり切れず
狭庭にも紅葉散り敷き生き返る

豊中市 南 正代

まけといて大阪人の合言葉
熱爛の相手が欲しい外は雪
御馳走も歳と相談胃と相談
黒豆の甘さ加減は母ゆずり

富田林市 小出 修三

この人にならば自分を曝け出す
ストープの葉缶の蓋が踊り出す
習つて筆に加齢が付き纏う
頂上の見えない趣味に無我夢中

羽曳野市 磯本 洋一

はやぶさ2小惑星へ旅に出る
年の瀬にCO₂吐く選挙カー
ポーナスがなくて納豆で晩酌す
土瓶蒸松茸底に隠れてる

東大阪市 織田 登子

体調不良知らせてくれる酒の味
カレンダー重ね新年待つている
週三日働き後は趣味一途
ウイスキー朝ドラ見つつ味見する

枚方市 河田 洋子

町内のポストはいつもくじ引きに
絵手紙で季節の野菜届けます
メール便増えてポストが遠くなり
嫌な事好物食べて気力持つ

枚方市 坂本 ミヨノ

大阪府 畑中 節子

足術後ゼロから一步血が騒ぐ

根野菜栄養あるか皆元氣

人生の運四捨五入する楽道家

海老で鯛幸せ過ぎる猿芝居

枚方市 松原 保

京都市 櫻崎 篤子

円安が進み広がる貧富の差

日本丸ギャンブル好きが舵を取る

無関心投票放棄無責任

矢が足りず四本目放つ解散か

藤井寺市 田付 絹枝

長岡京市 日置 みどり

靈感に乗るか反るかと宝くじ

往年に執着してぬれ落葉

のんびりと旅情満喫ローカル線

名瀑に時を預けてパワ―受け

箕面市 寺井 柳童

(前月分) 三次市 伊藤 寿子

ノーベル賞三者三様LED

冥福を昭和のスター健・文太

微積分すらすら解けて自信もつ

すらすらと絵手紙描いて一句添え

大阪府 西川 冷子

(前月分) 宝塚市 井上 風花

高い柵越える獣と知恵くらべ

場所相撲棧敷あでやか芸者衆

起き抜けのリビング十度切る寒さ

吹きだまり近所の木の葉留めてる

柚子浮かべ夜寒を癒す冬至風呂

心地よく秋冷の空雁渡る

藍きダム紅葉筏に昼の月

連山の雪見てはずむバスの旅

京都市 櫻崎 篤子

稲荷寿司七個八〇歳の昼

転んでも昔習った護身術

輪ゴム飛ばして年少者と遊ぶ

五〇年前の歯科医をほめて抜き

長岡京市 日置 みどり

吟行会空と紅葉に支えられ

思い出と遊ぶ時間をいとおしむ

悲しみは記憶の外に置きました

山ひとつ越えたら見えたサンライズ

(前月分) 三次市 伊藤 寿子

チャランポランと自己紹介の責任者

絶景のみみじ堪能声を上げ

無休店の我へ半日バスの旅

一期一会今日の良き人忘れまい

(前月分) 宝塚市 井上 風花

政治家の政治の為の総選挙

すき焼を囲みほっこり家族の輪

うどんすきつついて佯し独り酒

コスモスの咲いて心は乙女色

(高森一吞さん、西川冷子さんの句は47頁にあります)

新川柳鑑賞 (36)

麻生 路郎

經木書よくも落武者揃えたり

(薺花)

お彼岸に天王寺へ参詣すると、石の鳥居の近くに經木書がズラリとならんでいり、何れも風采のあがらぬ世の中から取り残されたような人物ばかりである。そこを作者は「よくも落武者揃えたり」と詠んだのである。

風采こそあがらぬが、なかなか達筆なのもある。そうかと思うと当て字ばかり書いているものもある。それでもいくらか稼げるのであるから世の中と言うものは不思議なものだ。この句の面白味は、別に貧弱な風采をした落伍者を狩り集めて来たのでもないのに、「落ち武者揃えたり」と強く言い放った表現技巧にあるのである。

老人を車掌苦もなくつまみ上げ

(夜潮)

街頭風景のスケッチである。電車かバスか、それは判らないが、老人を「苦もなくつまみ上げ」と言うところを見ると男の車掌らしい

ので電車なのであろう。この場合の車掌の行動は親切というよりも、早く発車させるためと解する方が妥当であらう。

老人のヨボヨボとした動作と、くつきょうな車掌の動作とが眼に迫ってくる。

眼に注射誰れか医学を信ぜざる

(日満)

今でも不治の病のあることを認めない訳にはいかないし、新しい病気が次々に発見されて手のつけようのないこともいえないが、それにしても医学の進歩したことを疑う余地はないだろう。眼に注射と聞いただけでも、ドキッとするが、医者立場から言えば、今では何んでもないことかも知れない。たしかにこの句は一つの発見である。

往診のお医者の方がたんと咳き

(牛歩)

医者の不養生という言葉がある。少々咳が出る位は意にも解さないで、宅診もするし往診もする。必ずしも病気を軽く見ている訳ではないが寝込んでいない限りは往診をする。風邪をひいた位で医師を呼んだ人の経験に違いない。一寸面白い発見である。

部分品取替えますと整形科

(花村)

女ぐらい、顔の造作をかえたがるものはな

い。隆鼻術へ行つて低い鼻を高くして来る。整形外科へ行つて一ト皮目を二ト皮にして来る。耳にはイヤリングをブラ下げる。鼻の穴に鼻輪を通したらミス何とかにしてやると言えば通しかねない。整形外科が儲かるのもうべなるかなである。この句なかなかユーモラスである。

少しなら飲んででもという医者に替え

(清生)

人間というものは誰でも、自分の都合のいい方へ解釈したがるものである。その弱点を衝いたのがこの句だ。飲酒家の患者にとつては病が峠を越したとなると少しぐらいなら飲んででもよろしいと言われることは最大の福音なのである。

人間性の弱さをつまみ出して見せてくれるところ、ここにこの句の面白さがある。

病院の横でも医院食つてゆけ

(清生)

大きな病院がある。患者がゲン／＼吸いこまれてゆく。その横に小さな医院がある。患者がいつこうに來そうにもない。それでいて、その医院は消えてなくなるところを見ると、小さな医院は小さな医院で食つてゆけるものらしいとは作者の発見である。対照の面白さをつかんだ句である。

西尾 葉句抄

(定本「西尾葉句集」平成八年発刊)

のお話になって見舞もほっとする

のろけてるうちに氷菓子はとけ

竹原川柳会二十周年

情熱は未来へのびる竹の青

いななきも中位なり古稀の春

月光に抱けば濡れているまつ毛

流人史に島は椿の花盛り

花の下河内言葉を丸出しに

单身赴任味付海苔が味方する

喫茶店の隅で小さな儲け口

二代目を継ぐ産声をしかときく

こけしにもあったこけしの好きな柄

借りに来た人情論の得手勝手

随筆の才女和服の似合う人

祭り客碁客になってしまいきり

辛抱を船場でしました紺のれん

ボーナスは妻の入歯にもってかれ

髭が泣きまっせという値切りよう

物心母の泪を見てしまひ

和顔愛語元旦の心しる

駅裏の十歩余りの歳の市

損得をいうから男見くびられ

水取りがすんでからという法事

誹風柳多留一二篇研究 20

山田昭夫・石川道子

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男

清博美

蒸籠のあくる日所作のけつたるさ

明七贊3

なこりおしくもせいろうのふたをする

安九礼5

せいろうハ幾クにしまつのい、道具

天三1

清贊。

155 嶋田より金谷の方ウへうけ出され

石川 請け出されたのは三浦屋の高尾太夫。

高尾の情夫嶋田重三郎は請け出すことが出来ず、お金のある仙台藩主伊達綱宗によつて身請けされた。金谷が分からないが、情夫の嶋田と大井川の対岸の嶋田、これに対して、金のある意も込めて金谷としたのであろう。

しまだよりかなやか先キへ請ケいだし

三二40

めがたきと思へど嶋田菌がた、ず

六6

なんの因果に大名に請ケ出され

二四22

細井 贊。東海道の宿名を使つてみただけ。

山田 贊。そして高尾は、

むこい事嶋田金谷の間で死

傍一5

152 ねぎをはさんで花嫁をおつかける

山田 今の葱はそれほど思われぬが、江戸時代は、葱を食うと口が臭くなるとか、精が付くとか言われて敬遠された。

花簪は口がいやさにねぎもく

新婚の花嫁は、葱は口に臭いが残るから、

食べたくないのだが、食べないと「花嫁に嫌われるから食べない」などと「悪口がいやさに葱も食ひ」。しかし主題句の方は、ワル共が、「葱を（箸か何かで挟んで）花嫁を追つかける」。臭いとも考えられるが、むしろ次の句のように、葱を食つて精を付けろと巫山戯ている場面と見た方が面白いと思うが如何であろうか。

なふられて嫌になんじんを喰残し

六四16

清贊。

153 薬箱素人の持つは急病氣

山田 いつもなら、黒鴨などに薬箱を持たせて往診するのだが、素人つまり迎えに来た人が持つ薬箱は、急病の場合だといふのだらう。

いしやむかい少シシんで先キへたち

四31

清贊。

154 なこりおしげにせいろうへふたをする

石川 絵島・生島の逢瀬は、蒸籠に入った生島が絵島の元を訪れるというスリリングなものである。帰るときもまた蒸籠入り。名残をおしんで蓋をしたことであらう。

156 むこい事うきが友には猫ばかり

石川 労働には黒猫をそばに置くことよといわれた。友といったら猫だけという気の毒さ。

くろねこのそばでけふりか四筋立チ

安九松 1

わる白イむすめのそはにくろいねこ

天二信 2

小栗 賛。あやふやな主とりをする黒イ猫 二二ス 2
賛。憂きが友に憂き目をみている者にとつて慰めとなる相手（日）。

細井 賛。親たる者、早く気付いてやればいいのに……。

清 賛。らうがいの娘かならずとなり有 二〇三〇
清 賛。黒い猫がわかればそれまでの句。

157 時鳥下女居ねむつたのがしれる

石川 ホトトギスの初音は珍重されたものである。みんなが、初音を聞いたと話しているとき下女だけが知らない。居眠りをしていたのがばれてしまった。

ほと、きすふくろの中で下女ハき、

天四礼 2

ばちをおさへるかすうかな時鳥 天二礼 1

ほと、きす聞かぬといへば恥のやう 二四〇
清 賛。江戸っ子の時鳥の初音に対する感覚は異常。

158 油見世折ふし居てハはやらせる

石川 油見世は髪油や化粧品を売る店。女性相手の商売のため若衆や女形等の役者が経営する店が多かった（新編川柳大辞典）。役者が時々店に顔を出すと流行するというものである。

油みせ是も同じくやくしやにて 拾九 2

悪方ハ油見世など思ひきり 三 2

素人の出シて淋しいあぶら見世 明八核 2

伊吹 賛。現代のタレントショップ。
清 賛。

159 ころぶハ上手く、おどるハお下手

石川 芸を売るのは表向きで、実は売色、芸は付けたりという踊り子が多かったとか。ころびとハ中ぶらりんのばいた也 一九一七
ころぶからそれではやるとけい子いひ

五 39

おとり子におどれと留守居むりをい、

一七 41

小栗 賛。遊ばせ歌「あんよはじょうず、ころぶはおへた」を踏まえたもの（NPO 法人 日本子守唄協会）。

伊吹 賛。小栗氏捕説にも。
清 なるほど、子守唄の文句ですか。

160 しろむくでしほれた草をみてあるき

石川 白無垢というと、婚礼、葬式、吉原の八朔、吉良上野介を思い浮かべるが、吉原ではないか。八朔、秋とはいえまだ暑く、道端の草もぐったりしているなか、遊女たちが白無垢姿で一見涼しげに歩いている。

寒そうな形りで一日汗になり 舊一八

小栗 「萎れた草を見て歩き」となると、どうしても草市の句としたいのだが、「白無垢」の説明がつかない。山谷の葬式帰りで初盆用の草を見て歩くではストリーに過ぎようか。

細井 「婚礼」で萎れたはず。「葬式」で白無垢（？）、草など目に入らない。「草市」は七月十三日早朝で日が合わない。「上野介」は夜中のこと。草など「見て歩き」はあり得ない。と消却して行くと「八朔」が残るが、「見て歩」く草は何処にあるのか。困りました。
清 わかりません。

『麻生路郎読本』余滴 (26)

「矢車」と路郎作品 ⑧

葉原道夫

「矢車」二八号（明治44年8月）に、「三太はこんな時に泣く」を発表した川上三太郎は、8月に日本を離れた。二八号の「編輯より」に、（川上君は八月から當分清國天津に在住する事になった。あまり作家の多からぬ東都から君の去られるのは私の惜む處だ。君は八月五日に神戸を立たたから本號發行の頃は玄海灘沖で愛書* Tonka John 氏の新著を読み耽つて居るであらう、健在を祈る）とある。

* 「Tonka John (トンカジョン)」は、福岡県柳川の方言で、大きい坊や・長男の意味で、北原白秋のこと。「新著」とは、前回の「余滴」で触れた「思ひ出」を指す。

川上三太郎は、大倉喜八郎が創立した大

倉商業学校（現・東京経済大学）を卒業後、大倉組に就職。天津には、大倉組の支店があった。（「矢車」三〇号「印象の断片」川上眉愁、による）

「矢車」二八号で、筆者がチェックした句を挙げておく。

いたましきまで白壁に陽のにしむ 一

友達へ手紙を書いてまだ出さず 五葉

可笑しくも思ひし父の長靴よ 龍郎

繻帯の白きをみつめ悲しかり とよ子

欠伸と欠伸、笑ふさびしさ 一由三

人妻の文よ古きバナ、の舌さはり 荷十

路郎の作品「梅雨の日」を挙げておく。

梅雨の日

沈みゆくころの底の聲くるし

まつしるな敷布にいたき病むころ

壁のしみ贖めてありき梅雨の室

倒けそうな簾笥のしたにひとり寝る

帳消しの其の日その日よ人生よ

しよさいなさ合本などを思ひみる

弱き身よ梅雨霽れし日の眼にいたき

寝そべつて唄つてゐれば午砲がなる

誰れも待たず家といふ名にかへりくる

歸りを急ぐ人の心のうらやまし

日曜が来てもしんじき友は病む
愚にかへりゆくを想ふて酒を断つ
酒たちて幽かに心ぞるる夜氣
新しき物干の香よ梅雨晴よ
五月雨二階にひとり聲もなし
ひととぎにめぐりし曆風にころがる

また、矢車社選の「雜」に、次の八句が入選している。

雜 矢車社選

いつの程か符箋とまでになりし友

歸り来てたのし思ふがまゝにねる

夏蜜柑の香を嗅ぐ暗き街の宵

朝にのこる疲勞よ肉ようとましき

みづからを罵りながら生きてゆく

醒めてゆく時の心をさびしみぬ

痺びれゆく心に酒のうとましく

缺勤のころよく夜をふかしけり

筆者のチェックした句は、「新しき」「五月雨」「いつの程か」の三句。「矢車」二九

号で浅井林之助（五葉）が、「矢車第貳拾

八號を評す（荷十兄へ）」で、五葉が採つ

た路郎の句は、「倒けそうな」帳消しの「寝

そべつて」「歸り来て」の四句である。

さて、川上三太郎が天津に行ったのと入

れ替わりのように、路郎は東上する。「矢車」

二九号(明治44年9月20日)の「EDITORIAL NOTE」(荷十)に、(△麻生路郎氏は先月中旬に出京されて区内(筆者註一下谷区)坂町十一高野方(筆者註一高野京雨)に居を卜された)とある。「矢車」二九号に、路郎は東京行きの旅を詠んだ「雨と、旅と」と題した作品を発表している。

雨と、旅と

濃尾平原を過ぐ

暁よ、雨の平原遠く見し

名古屋

詩もならずミューヘンに夜の襲ひ來ぬ

岡崎驛

雨に顫ふ赤き小さき花ざくろ

御殿場

富士遂に見えずして雨を淋しみぬ

國府津

雨晴れて山近しなど思ひ居ぬ

箱根湯本

蟬鳴くが悲し湯本の宿くれぬ

一人淋しく寝轉ぶ宿の暈夏よ

口笛に山つみの音消さんかな

氣儘な旅に暫しは君を忘れたき

心鈍く卓に凭れば灯が點る

放浪と机に指で書いては消しぬ

早けれど夜着を被りぬ想ふべく

* 尺八もあらばと思ひ寝たりけり

葉の茂りかつと射す陽の心地よし

朝の温泉に黄な膚の色悲しみぬ

茶を啜る心の淋し朝の日よ

宮の下

こころ寂し黒い蝶々に秋の花

赤き蟹の泡吹く暑さ小涌谷

四四 八一五、一六、一七

* 路郎は学生時代、尺八を習っていた。

作品の最後に記された日付により、8月

15日から17日の旅であったことがわかる。

「濃尾平原を過ぐ」の前書の句に「暁」と

あるので、路郎は15日の夜、大阪を発つた

と思われる。16日は箱根湯本で一泊した。

「新川柳」10月号の「各地通信」に、(昨夜

は大變に騒がして誠にお氣の毒でした、殊

に御厄介になりましたして厚く御禮申します、

東京へおこしのせつはよつて下さい。荷十

氏の案内で表記へ落つきました 八月十八

日夜)とあり、17日夜に、「新川柳」発行

人であった横浜在住の塩川喜与志宅に世話

になったことがうかがえる。

水府の「一日逢わねば……」(昭和32年

7月「川柳雑誌」No.362、「麻生路郎読本」

にも収録)に、(大阪を去る時路郎君から

私への留別の句はいつまでも若かれ長髪

刈らであれこの短冊は今も持っている。

私から路郎君へ送った送別の句は控えがな

い。大阪駅へ見送りに行ったが逢わずに空

しく帰ったと日記に残っている)とある。

水府は、路郎を見送りに行ったが逢えな

かった。さて、「矢車」30号「狂態」と題

した木村半文銭作品中の、「路郎兄へ(三

句)」の中の次の一句。

逢ひに來も、見送りに行きもせぬ二人

この句は、日ごろは路郎によく逢いに來

るのに、東京へ旅立つ路郎を見送りにも行

かない二人であるよ、という意味だろう。

当時「轍」を発刊した短詩社の同人で頻繁

に顔を合わせていたのは、青明・路郎・水

府・五葉・半文銭の五人だった。したがっ

て「二人」とは、水府と青明、あるいは水

府と五葉を指すことになる。半文銭は、水

府らが見送りに行つて路郎に会えなかった

ことを知らなかったのだろう。しかし、た

とえ会えなかった事情を知らなかったとし

ても、こんな句を詠む半文銭に意地の悪さ

を感じるのである。(次回に続く)

英語 de Senryu ③⑧

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

父・植木・小鳥・娘はうちにいず

*father, green plants, and little birds
my daughter is not
in the house*

ただ歩くだけの恋にも 春が来る

*love,
only walking with her
spring is near*

～リバーウィローのため息～ (R.H.ブライスによる古川柳の英訳②)

ブライスは著書 *SENRYU* (北星堂書店 1949) で、俳句と川柳のそれぞれの特徴を際立たせました。それは俳句と川柳をできるだけ並列に並べて、その違いを示すことでした。特に英語圏や英語でブライスの著書を読む読者に理解してもらおうと努力しました。彼は(俳句は柔らかいが、川柳はたいてい固くて強靱である)と、まるでステーキの噛み具合のような表現をしています。例えば、「ほろほろと山吹散るか瀧の音」(芭蕉)は、*Trembling, fluttering,—/Are the petals of the mountain rose falling./In the sound of the waterfall?* と英訳しました。ブライスは吉野山の川に落ちる滝の音と、それに呼応するかのように舞い落ちる山吹の光景が、詩人芭蕉の心を揺り動かせたと説明しています。これをブライスは、俳句の柔らかさであると云います。一方、川柳の固さの例として、「花見から帰れば家は焼けている」(剣花坊)を取り上げ、*Back from the flower-viewing,—/Their house/Is burnt to the ground!* と、英訳しました。

そして「この川柳には温かい心情は感じられないが、ここには詩がある。人生はこんなものだ。春の陽光が桜を咲かせもするが、温かさゆえに家は乾き、ぱちぱちと燃え上がる。花の中に、微かに匂うピンクの香りと、火事で燃え落ちた大黒柱とに暴力的な違いはあれ、春の陽光が起こさせたことだ。」と述べます。このような読み方にブライス自身、楽しんでいたのでしょうね。

参考文献：R.H.Blyth *SENRYU* (北星堂書店 1949)

民族の詩歌 (32)

いのち 生命のうた ①

三好 専平

梨の實の青き野道に遊びてしその翌の日を
別れきにけり
監房に狂いのしる人の声夜深く覚めて聞
くその人のこゑ 明石海人

奈良時代から知られ、多くの人たちが苦
しんできた。昔は不治の病といわれて、隔
離されたりしてきた癩。このほかにも、結
核、癌、神経や脳の障害。いまでは、治療
が進み、薬も開発されてきた（プロミンな
ど）。ここに挙げたのは、二十代でハンセ
ン病にかかり、長島愛生園に隔離されて壮
絶な生涯を送った歌人のうたである。

私が初めて、ハンセン病文学を知ったの
は「命の初夜」（北条民雄）である。十歳
ころで、太平洋戦争も末期であった。その
島に来た患者はかならず一度は自殺を試み
るといふくだりにシヨックを受けたのを今
も鮮やかに覚えてゐる。

讃岐に疎開していた私は、瀬戸内海の澄
んだ海で育ったが、若い結核患者が近くの
サナトリウムで治療していた。透き通る
ような白い肌をした若い女性が日がな一日
日光浴をしていた。「近づいたらうつるで」
と母に言われた。後になって私は、結核を
患いながら詩や小説を書いた人たち、堀辰
雄や中原中など親しむことになる。

2014年5月19日の天声人語は、ハ
ンセン病の隔離の島で83年の生涯を閉じた
塔和子さんを取り上げ「塔さんは、作品を
発表するにあたって、24歳からその名を名
乗ってきた。家族が差別されないように本
名を隠したという。（中略）墓石に刻まれ
た本名『井上ツヤ子』の文字に、弟さんた
ちは『姉さん、やっと帰ってきたね』と語
りかけた。」

つづけて「名前を捨てることは自分を捨
てることだ。」と結ぶ。多くの患者の怒り
と悲しみ、もう味あわせたくない。

2014年3月1日に亡くなった村越化
石(91)は、16歳で発病し、以後草津の栗島楽
泉園に入った。「癩を乗り越えた魂の俳人」
と言われる。

闘うて鷹のえぐりし深雪なり
生きねばならぬ鳥とて雪を蹴りて立つ
除夜の湯に肌触れ合へり」生くるべし
啓蟄の地を激震の奔りたり

『ハンセン病文学全集』（皓星社）が大岡

信らの手によって発行されている。その中
から、中山秋夫の川柳

泥舟に乗ってそれから聞かされる
断種への過去ええずさせる葱坊主

さてもとにもどって、塔さんの詩

青い炎
私の中に炎があります

青深い瞳孔の底に
静かに燃え続けている炎です
ああそれは
鮮明に意識づけられるとき
私からどんどん遠ざかります

月と地球が
きびしい物体の存在を主張し合い
強大な時間の推移が
宇宙の秩序に委ねられているとき
私はほの白い夕陽の中で
遠い言葉を聞きます

けれど
軌道をそれて結びつく偶然と
神の悪戯を期待しながら
悪の楽しさに
燃え上がる炎です

やや難解な苦渋に満ちたりズムが心を
打つ。

愛染帖

新家 完司選

(投句 275名)

西予市 黒田 茂代

祭り笛静かな村の非日常

(評)映画館もコンサートホールもない過疎の村も一年に一度だけ華やぐ秋祭り。笛や太鼓が鳴り止むと長く厳しい冬に入るのだ。

和食和紙移ろう四季という宝

(評)世界無形文化遺産として脚光を浴びて「日本の良さ」に気付かされた。春夏秋冬の美しい風景も守り抜きたいものである。

両替機あるといいのに社寺の前

(評)確かに、小銭がないときは困る。両替機があれば便利だが、無粋で「利益がなさそう」。たまには万札を奮発してみるか……。

木炭で走らすことも考える

(評)間伐材を利用すれば荒れ放題の里山も息を吹き返すだろう。スピードなんて出なくてもスローライフで行けばいいのだ。

青森市 守田 啓子
キャリアバッグ引いて夕陽になってゆく

(評)すっかり定着したキャリアバッグ。案外いいが何となく冴えないのはなぜ? 健さんがトロトロ引いている姿は想像できない。

油脂分これから役に立つてくる

(評)こつこつ貯めた預金が老後の味方であるように、体脂肪は思いがけない闘病や手術に備えての貴重な備蓄エネルギーである。

ストレスを半分にする隅の席

(評)野生動物は他の動物が近づくと攻撃するが逃走する。隅の席を選ぶのは、そのような「防衛本能」が働いているのだろう。

大河ドラマみんな死ぬまで歯がきれい

(評)喋るのに苦労しない精巧な入れ歯が出来たのは近代。しかし、演出がリアル過ぎて「汚い!」と酷評されたドラマもある。

ストープの給油はじゃんけん決めて

(評)簡単に勝負がつくじゃんけん。公平でいいと思うのだが、必ず「あつ、また負け!」という人がいる。癖を覚えられているのだ。

あの世への準備万端できてます

(評)戒名も位牌もお墓もOK。遺産相続の

手配も遺書もすべてOK。あとは「死ぬ覚悟」だけ。それが出来るまで長生きしよう。

弘前市 稲見 則彦
鍋ひとつあれば機嫌のいいお猪口

香南市 桑名 孝雄
お銚子は七勺だからあと二本

茨木市 藤井 正雄
身の上がそっくり仲のよいお酒

大阪市 井丸 昌紀
発車するまでは開けない缶ビール

三田市 堀 正和
飲み過ぎに注意缶には書いてない

広島市 岸本 清
酒臭い息を殺してエレベーター

堺市 増田わこう
八十路過ぎ飲み友達減るばかり

倉吉市 岡崎美知江
こげついた鍋捨てられず年を越す

ひとりでも埃たんまり溜まってる

富田林市 肥山 一文
病院はバーゲンもせず大はやり

診察を待って二十句できました

大阪市 大川 桃花
幾つまで白髪染めよか思案する

動物と話す人間いい笑顔

大阪市 奥村 五月
小心の僕に力を与える酒

世話されて口癖になるありがと

和歌山市 喜田 准一
孫よりも隣の犬がよくなつく

西宮市 牧淵富喜子
爪切りながらわたし一人の誕生日

豊中市 水野 黒兎
限りなくシンプルライフ寝正月

岡山市 永見 心咲
こじらせた風邪も移せば治るらしい

大阪市 伏見 雅明
相続人だけで行く家族葬

米子市 後藤美恵子
遺産絡む告別式はぎこちない

飲み放題トイレに近い席狙う
札幌市 三浦 強一

妻の供5%の割引
大阪府 谷口 義

一儲けしはった時のお仏壇
弘前市 高瀬 霜石

A型で困ったことはありません
おしほりがスツと出るのはいい飲み屋

礼束でだったら殴られてみたい
岡山県 田中 恵

寒い日は何かにつけて腹が立つ
安住の里ではそぼそ拝む月

亡き父母にあげたかったな貼るカイロ
堺市 奥 時雄

熱い目にすれば焼酎うすくなり

大阪府 平井美智子
相槌の合間に探す妥協点

和歌山市 平田 元三
日捲りを剥ぐに併せて着眼れる

大阪府 古今堂蕉子
辛み大根胃袋すつとさせて冬

鳥取市 岸本 宏章
通帳が深呼吸する年金日

長岡京市 日置みどり
脳トレにアドリブ發揮老い途上

岡山市 丹下 凱夫
頻繁にネジを巻かねばすく止まる

真夜中に起きてかならず水を飲む
藤井寺市 太田扶美代

この道の延長線にある冥土
ほめるとこ無いらし耳を褒められる

松江府 三島 淞丘
焼酎と薬で今日も跳んでいる

蟹づくし女子会だつて黙らせる
崩れない女系三人目もおんな

老斑の二つ三つは誇りとしょ
永らえて明日の予定もまた昼寝

夢に見た筋書き逸れて行く余生
高槻市 富田 美義

胃薬と一緒に食べる期限切れ
堺市 矢倉 五月

眼鏡また失くし悔いてる二日酔い

八尾市 宮崎シマ子
寒さ厳しく候喪中がき来る

神戸市 富水 恭子
鬼も仏も黙ってみてる眠れぬのを

死に支度しつつ妻とろたんとか食べ
自我通しみかん酸っぱい冬の夜

倉吉市 牧野 芳光
すすめられた座椅子が妙に湿っぽい

奈良市 尾畑なを江
ありがたい水にありがとうと言わぬ

モタモタと盗られたサンゴ追いかける
秋夜長はやぶさは今どのあたり

鳥取市 夏目 一粹
はやぶさ2生きてる内に帰還して

電飾の嘘ってこんなにも奇麗
橿原市 居谷真理子

寒いからどんな台詞も受け入れる
佐賀県 真島久美子

見せしめであろうか赤いチャンチャンコ
松江府 石橋 芳山

凍として勤務中です盲導犬
東大阪市 北村 賢子

還暦が老いのスタートボタンとは
明石市 糀谷 和郎

寒くても今日は句会で明日は医者
三田市 尾崎 一子

真冬になる前に土鍋を掃除する
弘前市 吉川ひとし

目醒めればただの小石へ戻る朝
八王子市 川名 洋子

ライバルのアキレス腱をポケットに
沖繩市 森山 文切

独りでは何も出来ない乾電池
三田市 上田ひとみ

性格をなおそうなんて諦めた
大阪府 江島谷勝弘

つつちりを所望している誕生日
岡山市 工藤千代子

あれ程に止めた煙草を供えてる
米子市 竹村紀の治

要らぬもの捨てると自分だけになる
和歌山市 福井 菜摘

甘いもの控えなさいと立鏡
大阪市 太田としお

正月も日曜もないお坊さん
鳥取市 前田 楓花

チャンづけで呼ばれて距離が近くなる
豊橋市 藤田 千休

戦争の影を引きずる九段坂
長岡京市 山田 葉子

体調が悪く一日謙虚です
吹田市 太田 昭

煽てられブレーキ利かぬ顔になる
大阪府 初山 隆盛

一献をわが足跡に差し上げる

出しゃばりのオバチャンが嫁連れて来た
鳥取市 福西 茶子

一日が退屈なのに直ぐ過ぎる
堺市 村上 玄也

長男の嫁だと聞いて味方する
貝塚市 吉道あかね

信じないけれども引いてみる神籤
枚方市 海老池 洋

燃える恋なお全没も湧く意欲
大阪市 吉内タカ子

男前だけでは恋は実らない
西宮市 片山 忠

それならばと居直つてみる七十歳
宝塚市 田中 章子

荒波に揉まれ印鑑丸くなる
弘前市 福士 慕情

とびきりの笑顔を提げて兄見舞う
海南市 小谷 小雪

人間を試す追い風向かい風
富田林市 山野 寿之

ライバルは自分自身だ霜の朝
尼崎市 春城 年代

老眼鏡をかけると顔がひきしまる
枚方市 寺川 弘一

みんなだと思えば気楽物忘れ
鳥取市 岸本 孝子

地方版の隅にととき顔を出す
堺市 澤井 敏治

表現の魔法を秘めている楽器
今治市 渡邊伊津志

BGMのジャズにワインを急かされる
海南市 堂上 泰女

酒ちびり川柳メモを埋める夜半
米子市 生田 和之

久し振り雨の日なので作句する
大阪市 松尾柳石子

子と孫と帰つてほつと息をする
瀬戸内市 東横ますみ

死にたくない死にたくない年惜しむ
鳥取市 土橋 螢

この数も私の一部愛おしい
高槻市 島田千鶴子

徳利に正月休みなどは無い
大阪市 藤田 武人

賞味期限切れております非常食
寝屋川市 籠島 恵子

冷や奴月日の早さ湯豆腐へ
三田市 北野 哲男

猫二匹 老母と遊んでいてくれる
岡山県 紫 しめの

足湯して雪と闘う意地が湧き
弘前市 岡本 花匠

月末の財布へ逆転のモヤシ
大阪市 栃尾 奏子

農業は孤独なものよ麦を踏む
横浜市 菊地 政勝

老人と言わずなスツと背を伸ばそう
シドニー 坂上のり子

雪国が一番似合う高倉健
奈良市 米田 恭昌

北風に負けぬ闘志の湧くベタル
香芝市 大内 朝子

朝ドラにつられ今夜はウイスキー
岩出市 村中 悦男

レオタード見たくないのに見せられる
松山市 神野きっこ

年の暮れ眩くように鍋煮える
尼崎市 市坪 武臣

観劇の妻のみやげで飲みなおす
塩竈市 木田比呂朗

ウォーキングだろう鱈が群れている
京都市 榎本 宏子

ゲームでは嫁が十人でできました
笠岡市 藤井 智史

クレインがいつでも視野にある街だ
京都市 高島 啓子

大津波のニュース画面がまだ消えず
池田市 上山 堅坊

午の絵馬の処分気になる未絵馬
神戸市 松井 文香

安い散髪と隔靴搔痒相似たり
河内長野市 坂上 淳司

現住所不定ペン辞書めがね鍵
羽曳野市 徳山みつこ

年男気が付きやすでに七回り
奈良市 岩本 浩二

プチ不調びたつときますこの言葉
大阪市 笠嶋 惠美

好き嫌いなくし病を通せんぼ
富田林市 小出 修三

検針で見つけてくれた水道もれ
京都市 櫻崎 篤子

薄雲をまとい恥じらう二上山
奈良県 安福 和夫

食品がブランド化して遠くなる
箕面市 広島 巴子

うちだつて回る寿司なら食べられる
河内長野市 松岡 篤

ぐらぐらの心励ますほめ言葉
河内長野市 木見谷孝代

歩く影老いた姿が写っている
枚方市 松原 保

孫二人巣立ち腑抜けになっていた
鳥取市 有沢せつ子

四歳児集めた落ち葉撒き散らす
河内長野市 藤塚 克三

CMの掃除我が家ですて欲しい
岡山県 池田たか子

一階で柱時計が呼んでいる
神戸市 奥澤洋次郎

食べずとも死にはしません黒マグロ
唐津市 山口 高明

木枯らしにひと味旨くなるおでん
和歌山市 土屋起世子

コンビニのおでんの味に負けられぬ
岡山市 藤成 操江

めでたくもないが書いてる年賀状
和歌山市 磯部 義雄

金持ちの気配は見せぬお金持ち
神戸市 能勢 利子

皇后さまと同じ病名気も楽に
鳥取市 吉田 弘子

カーテンが降りて台詞を思い出す
高槻市 原 洋志

気付かずになっていたが三度の食美味い
弘前市 今 愁女

胡坐でも痺れる孫の長い足
羽曳野市 吉村久仁雄

プリ大根鍋底孫がたいらげる
米子市 見山 温子

目の前を発車していく終電車
河内長野市 黒岩 靖博

冷凍にして送ってくれた里の鮎
和歌山市 松尾 和香

べつたりと大阪人になった妻
河内長野市 辻村 ヒロ

投票へ行くか行かぬか大雪だ
鳥取市 池澤 大鯨

リラックスしてると爪もよく伸びる
和歌山市 玉置 当代

共選欄

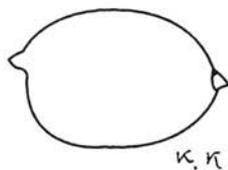
檸檬

椽

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 375名)



「平凡」 牧野芳光 選

人混みに以下同文の貌ならぶ
 黄昏れて平凡くつと嘯みしめる
 認知症驚くほどのことじやない
 平凡な男と同じ夢を見る
 喰べて寝て好きなこととして何時までの
 薄い味濃い愛情に包まれる
 平凡な一日でしたメザシ焼く
 ありふれた言葉で綴る日記帳
 ゲルニカで平凡の大切さ知る
 人並な児も年頃が光らせる
 賄賂には強いが美人には弱い
 平凡と生きたひっそり逝けそうだ
 平凡の定義がちがう妻と僕
 居たのですか空気の様なお人柄
 妻の顔平凡だけドオンリーワン

豊橋市 藤田 千休
 倉吉市 山中 康子
 奈良市 大久保真澄
 松江市 藤井 寿代
 八尾市 高杉 千歩
 唐津市 坂本 蜂朗
 松江市 三島 淑丘
 藤井寺市 高田美代子
 富田林市 肥山 一文
 札幌市 三浦 強一
 弘前市 高瀬 霜石
 西宮市 秋元 てる
 豊中市 水野 黒兎
 鳥取市 吉田 弘子
 鳥取市 谷口回春子

「平凡」 古久保和子 選

平凡という幸せに愚痴がでる
 平凡な顔に非凡なつけまつ毛
 平凡なメールだけれど情熱家
 自分史に賞罰なしで恙無い
 平凡でストレスたまる自由席
 平凡を喜ぶ境地ヨッコラシヨ
 平凡な男にだつて夢がある
 何回も同じニュースをするテレビ
 同じこと毎日出来るありがたさ
 平凡な女の演技ほど怖い
 影までも存在感のない夫
 凡人の俺にスマホという味方
 歯科内科年齢相応と言うカルテ
 平凡な暮らしを変えた当りクジ
 洗濯物が乾いて平凡がいいな

鳥取県 石谷美恵子
 大阪府 高木 道子
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 川西市 西内 朋月
 紀の川市 楠原 富香
 大阪市 津守 柳伸
 枚方市 寺川 弘一
 鳥取市 岸本 宏章
 和歌山市 北原 昭枝
 米子市 生田 和之
 寝屋川市 岡本 勲
 河内長野市 村上 直樹
 狭山市 矢野 梓
 大阪市 奥村 五月
 大阪市 谷口 義

影までも存在感のない夫	寝屋川市	岡本	勲
「ただいま」に安堵いつもの夕ご飯	西宮市	福島	弘子
平凡でいいのにジャンボくじを買う	豊中市	江見	見清
平凡に疲れて平凡に眠る	沖繩市	森山	文切
平凡な器で肩がこりません	瀬戸内市	東横ますみ	
妻や子を泣かさなかつただけの僕	南あわじ市	萩原	狸月
平凡へスパイスたまに読むリルケ	海南市	堂上	泰女
お金ない今が一番静かです	大阪市	榎本日の出	
平凡に老いて痴呆が見え隠れ	箕面市	広島	巴子
戦争をこのまま知らず終わりたい	河内長野市	穂口	正子
言うことは平凡やることは突飛	可見市	板山まみ子	
乗り越えて平凡の良さに染みる	河内長野市	辻村	ヒロ
選別をされ無印の棚にいる	大阪市	若本	安代
ぬるま湯を飛び出す勇氣ないのです	長岡京市	山田	葉子
平凡だ金に頭を下けている	大阪市	太田としお	
平凡に暮らせと無理なことを言う	宝塚市	丸山	孔一
平凡と言いつつ妻は爪を研ぐ	山口市	増田めだか	
平凡な私に風は斜めから	神戸市	白川	淑子
つつましく生きつつましく死んでゆく	寝屋川市	籠島	恵子
平凡に生きて鼻毛がよく伸びる	堺市	加島	由一
平凡な男が好きなら煮ころがし	貝塚市	吉道あかね	
平凡と言うべき形トマトなり	西宮市	山本	義子
豹柄は平凡なんよ大阪じゃ	堺市	矢倉	五月

四捨五入して平凡の仲間入り	富田林市	山野	寿之
平凡に格差があつて面白い	熊本県	岩切	康子
平凡が平和だなんて気づけない	鳥取市	前田	楓花
居たのですか空気の様なお人柄	鳥取市	吉田	弘子
平凡な暮しにバラの花届く	豊中市	松尾美智代	
平凡な暮しを襲う冬の底	三田市	上垣キヨミ	
平凡に生きてたくさん恥もある	大阪市	川端	一步
人混みに以下同文の貌ならば	豊橋市	藤田	千休
平凡かどうか時おり悪ふざけ	米子市	白根	ふみ
平凡なタイプが犯人かも知れぬ	枚方市	丹後屋	肇
足して2で割ったご意見しか言わず	榎原市	居谷真理子	
平凡な姿形で目くらし	京都市	清水	英旺
平凡に生きていくのに波が立つ	紀の川市	北山	絹子
昨日今日明日も三食たべて寝る	東かがわ市	川崎ひかり	
昨日まで確かにあつたお饅頭	弘前市	福士	慕情
換気扇となりもうちも目刺し焼く	三田市	今西	廣子
平凡に過ごして時に風邪を引く	奈良市	米田	恭昌
平凡な暮らしに税がへばりつき	京都市	高島	啓子
安心は3の並んだ通知表	大和郡山田市	坊農	柳弘
平凡はちよつと変つた人が好き	大洲市	花岡	順子
平凡でいいドラマなどなくていい	神戸市	能勢	利子
誕生日カレーで祝う家だつた	岡山市	丹下	凱夫
	河内長野市	松岡	篤

平凡を破いて突然のキッス

大阪市 栃尾 奏子

平凡からちよつと脱走株を買う

羽曳野市 藤原 大子

平凡のその真ん中で欠伸する

高槻市 杉本 義昭

平凡に暮らせぬ熊が里に出る

倉吉市 中村 毅

五欲みな持つてすつきり生きている

大阪市 古今堂蕉子

ありがとうが生きている平凡な家族

大和郡山市 坊農 柳弘

平凡な暮し力も金も要る

大阪市 田中ゆみ子

ああ今日も生きている朝の鼓動聞く

三田市 久保田千代

無になつてやつと平凡見えてきた

米子市 後藤美恵子

平凡な暮しに変える総選挙

八尾市 宮崎シマ子

わたくしの子に限つては皆平凡

岡山県 紫 しめの

取り得ないがあなたの彩に染まります

尼崎市 長浜 美籠

平凡な顔に非凡なつけまつ毛

大阪府 高木 道子

誕生日何事もなく日が暮れる

調布市 伊勢田 毅

米をとぐリズムで生きて老いてゆく

弘前市 肥後和香子

オール3の背中で弾むランドセル

田辺市 岡本 昇

コチコチの日本人です横ならび

三田市 野口 晶子

平凡から少し抜きたい赤い靴

和歌山市 坂部紀久子

平凡を非凡に変える薬指

黒石市 相馬 一花

秀 句

平凡でいいとほんとは思わない

八王子市 川名 洋子

過ぎ去ればすべてが並の顔になる

芦屋市 竹山千賀子

頑張つて頑張つて平凡でいる

鳥取県 斉尾くにこ

平凡に暮れる日米をまるく研ぐ

東京都 川本真理子

何度見ても覚えられない顔がある

伊予市 黒田 茂代

もう昼だもう夕飯かもう寝よう

川崎市 成田せいじ

平凡な器だけれど乙な味

大阪府 米澤 俣子

平凡に生きても税はのしかかる

堺市 澤井 敏治

平凡でいいのにジャンボくじを買う

豊中市 江見 見清

百均のレジで凡人背くらべ

和歌山市 土屋起世子

消去法非凡なものは何もない

塩竈市 木田比呂朗

花が咲き散る平凡な人生図

倉吉市 岡崎美知江

平凡に生きた人間の限界

青森県 松山 芳生

平凡に生きて人間臭がない

鳥取市 倉益 一瑤

てらうことなく真面目な素焼鉢

札幌市 小沢 淳

五欲みな持つてすつきり生きている

大阪市 古今堂蕉子

わたくし之都合で明日も日曜日

大阪市 土橋 螢

平凡だ金に頭を下げている

鳥取市 太田としお

ありふれた言葉で綴る日記帳

藤井寺市 高田美代子

凡庸に生きてリングの皮を剥く

調布市 伊勢田 毅

平凡な唄だが聞くと泣けて来る

大阪市 板東 倫子

平凡に生きた証の写真帖

シドニー 坂上のり子

秀 句

平凡な暮らしに戻りたい仮設

貝塚市 石田ひろ子

平凡な暮しに厭きた掛時計

藤井寺市 太田扶美代

朝起きて玄関だけは掃いておく

弘前市 今 愁女

「布」

久保田 千代選
(投句 198名)



素うどんを逸品にするところ昆布
赤座布団座りニッコリ母白寿
座布団の下は寸志の仮置き場
聞き役の位置で座布団喋り出す
草木染め布は命の色を出す
しゃかりきに生きたネクタイ草臥れる 紀の川市
三角巾きりりと締めて台所
軽いのが一番になる布カバン
一針づつ秘めた想いを知る刺し子
荒海の香りも染みる頬被り
当て布をしても肩の荷きつ過ぎる
敗戦の国を興した布と糸
白い布で包まれ帰還遭難者
パッチワーク怒りと折り縫い合わす 河内長野市
支援の輪パッチワークで繋ぐ夢
ブルカから聞こえる平和への祈り
母さんの晴着家族の飢え救う
何とかなるさ布で包んでる命
ところどころ縦糸のみで生きている
心にも日々を織りなす布を持ち

堺市 遠山 唯教
鳥取市 山下 凱柳
高槻市 富田 美義
大和郡山田市 坊農 柳弘
大阪市 笠嶋 惠美
防府市 宇野 幹子
貝塚市 坂本 加代
河内長野市 大島 友子
弘前市 福士 慕情
和歌山市 武本 碧
堺市 奥 時雄
堺市 村上 玄也
河内長野市 穂口 正子
横浜市 川島 良子
明石市 糞谷 和郎
大阪市 坂 裕之
松江市 松本 文子
東京都 川本真理子
米子市 吉田 陽子

シヨールから亡母の香りがする昭和
風呂敷の思い出母にたどり着く
嫁ぐ娘と布を広げて夢紡ぐ
新しい命を守る岩田帯
子の画布に描く無限の可能性
立志伝雑巾掛けが一番地
再生も果ては雑巾までのこと
染め抜きの暖簾師走の風に舞う
一枚の布に戻れぬまま私
絹の手ざわり安心をしてみましょう
使い込んで味出た綿とわたくしと
疑いを知らない母の割烹着

富田林市 山野 寿之
塩竈市 木田比呂朗
奈良県 渡辺 富子
香芝市 大内 朝子
東大阪市 北村 賢子
河内長野市 梶原 弘光
札幌市 小沢 淳
大阪府 米澤 俣子
佐賀県 真島久美子
海南市 小谷 小雪
大阪市 原田すみ子
藤井寺市 太田扶美代

佳句
ほころびを防いだ母は力布
ハンカチが見てる女の裏表
絹よりも木綿がほくの肌に合う
ナプキンも長い祝辞に欠伸する
腕を吊る三角巾が戒める

人
嬉しい日黄色いハンカチ買いました
生前贈与戦火くぐった帯という
天
込みあげる感謝喪章に語らせる
軸
雑巾を絞ると愛はまろやかに

枚方市 寺川 弘一
西宮市 緒方美津子
羽曳野市 徳山みつこ

「納豆」

加島由一選

(投句 201名)



発酵中私の愛も納豆も
薬だと思ひ納豆食べている
豆の名を甘納豆で五つ知り
人生のねばり納豆から学び
贅沢の極み納豆卵かけ
ねばねばが血をさらさらにする不思議
納豆に東京帰りの箸捌き
好き嫌い言わせぬ母の納豆汁
納豆と妻の愚痴には手もやける
一つ屋根納豆のよう暮らして
納豆に毎朝発破かけられる
恙なく朝の納豆練る家族
淡白な俺に納豆食べさせる
納豆の糸でつながる君とほく
納豆に食わず嫌いを教えられ
黙々と混ぜる納豆かけごはん
納豆の糸にからます家族愛
納豆を毎日元気で私
外遊の鞆納豆つめてある
長生きをせよと納豆子の歳暮

富田林市 山野 寿之
貝塚市 吉道あかね
唐津市 仁部 四郎
三田市 久保田千代
河内長野市 谷 久美子
海都市 小谷 小雪
堺市 奥 時雄
藤井寺市 若松 雅枝
紀の川市 宇野 幹子
鳥取県 西谷 悦子
弘前市 高瀬 霜石
高槻市 松岡 重子
小野市 藤原 泰宏
和歌山市 武本 碧
奈良市 安福 和夫
米子市 中原 章子
和歌山市 福井 菜摘
大洲市 花岡 順子
佐渡市 高野 不二
三田市 上垣キヨミ

納豆をやっと納得して食べる
ばあちゃんが居る頃食べた納豆汁
納豆の絆が欲しい核家族
納豆に味噌汁文句ありますか
納豆のように貴男にまといつく
納豆が好き豆が好き君が好き
納豆が渾名の人に見染められ
甘納豆つまんで母と日向ぼこ
嫁が来た納豆が来た我が家にも
納豆を肴にしてもまだ飲める
納豆をまぜまぜ想うスケジュール
納豆に感謝家計も健康も

和歌山市 磯部 義雄
高槻市 島田千鶴子
札幌市 小沢 淳
横浜市 川島 良子
大阪市 古今堂蕉子
鳥取市 土橋 螢
堺市 矢倉 五月
奈良県 渡辺 富子
大阪市 高杉 力
三原市 鴨田 昭紀
池田市 上山 堅坊
大山市 金子美千代
鳥取市 岸本 宏章
佐賀県 真島久美子
大阪市 藤原千恵子
和歌山市 北原 昭枝
大阪市 柴本ばつは
人
方言が消えて匂いのない納豆
地
小気味よく納豆を練る父の笑み
天
でっかい夢抱いて納豆混ぜている
軸
納豆の糸切る仕草さえおんな

「ちよつと」

(投句 204名)

大川 桃 花 選



暇つぶしちよつとマカオカラスベガス 堺市 奥 時雄
 貸し借りがちよつぴりあっていい夫婦 大和郡山田 坊農 柳弘
 ちよつと寄って一晩泊るお姑さん 八尾市 高杉 千歩
 ちよつとしたミスも咎める改札機 池田市 上山 堅坊
 大いなる努力で五百グラム減 奈良市 大久保眞澄
 ちよつとだけ明日を覗く好奇心 香芝市 大内 朝子
 辛党のちよつと一杯底がない 大阪市 津村志華子
 ちよつと変だぞ秘密法・自衛権 藤井寺市 鈴木いさお
 はやぶさうちよつとやそつとの汗じやない 羽曳野市 徳山みつこ
 自分史にちよつとおしゃれな花の章 藤井寺市 太田扶美代
 下戸やのにちよつと飲みたい時がある 河内長野市 梶原 弘光
 見送って少し肩の荷楽になる 東大阪市 佐々木満作
 ちよつと気を抜くと空気が読めてきた 和歌山市 土屋起世子
 「ちよつと火を」借りて返した事がない 奈良市 米田 恭昌
 シラサギが不漁かちよつと首傾げ 奈良県 安福 和夫
 ひとつまみの塩で甘味がぐんと増す 弘前市 今 愁女
 ちよつとだけ離れてわかる人の情 三田市 九村 義徳
 お時間は取らせませんとアンケート 大阪市 古今堂蕉子
 ちよつとそこ迄言ってお隣りハワイ迄 豊中市 松尾美智代
 儉約にちよつと疲れている蛇口 明石市 糍谷 和郎

歳の話ちよつととぼけてみたくなる
 ちよつとした優しさ知音奏でます
 ちよつとしたアイデア夢を膨らます
 ちよつと目を離すとすぐに空を飛ぶ
 8パーがちよつとこの頃こたえてる
 ワイナリー試飲のちよつと後をひく
 甘い蜜ちよつと舐めると癖になる
 ちよつとだけ飲もかと言うて三時間
 元旦の分だけですと言う御節
 ひとときの舞台へちよつと紅を足す
 ちよつとずつ並べてひとり膳飾る
 さい銭のようにコトトリと募金箱

佳 句

夫にはちよつと派手目をプレゼント
 玉虫色ちよつと羽織っている会議
 母のいる間けんかはお預けよ
 ちよつとそこ迄奥さん糸の切れた風
 落葉踏む少し郷愁めいたもの

人

豊作も困るが不作なお困る

地

母ちゃんはちよつと太目で頼り甲斐

天

少しだけ汚れやさしくなった白

軸

ちよつと耳貸してと孫の内緒ごと

和泉市 横山 捷也
 神戸市 松井 文香
 鳥取市 谷口回春子
 大阪市 坂 裕之
 大阪市 原田すみ子
 米子市 吉田 陽子
 米子市 後藤美恵子
 大阪市 江島谷勝弘
 三田市 堀 正和
 紀の川市 宇野 幹子
 和歌山市 松尾 和香
 三田市 上垣キヨミ

貝塚市 吉道あかね
 堺市 矢倉 五月
 大阪府 榎本日の出
 東大阪市 北村 賢子
 三田市 北野 哲男

弘前市 高瀬 霜石

大阪市 柴本ばつは

豊原市 居谷真理子

こんにちは 新同人です

篠山市 北澤 稠民

富田林市 関 よしみ

平成二十年の正月、定年退職後第2の職場を勤めながら、これからの人生に、スポーツとともに、長く楽しめる趣味を持ちたいと考えていたところ「川柳ささやま」の句会は楽しいよと、友人が奨めてくれました。同年五月の句会に初参加致しました。何を材料にどの様にすればよいのか不安いっぱいでしたが、一句が入選し歓喜しました。その後平成二十二年度には、当句会の年間最優秀賞に当る「丹波柳壇賞」を戴き舞いあがりました。受賞作品は次の一句です。

生涯を土にまみれた父想う

稠民

この賞を励みとして試行錯誤をくり返ししながら今日に至っております。川柳を通じて多くの出会いがあり、交流の場が広がりました。私の人生にとって大きな収穫です。現在は父同様土にまみれながら日々を楽しく過しております。そんな中から農業の苦楽の生活を詠んだ句を発信してゆきたいと思っております。皆様のご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

好きな句

もう一杯飲んで師走の風へ向き

可住

手を合わす時間の長さ子は知らず

哲男

句

森の音素足の指が確かめる

よしみ

「川柳は素晴らしくて面白いよ」と先輩に奨められて、始めました。四十年前に夫が殉職……。二人の子供が社会に出た頃で、川柳は「子離れと人生」を教えてくださいました。十二年前地域の勉強会で、池森子先生に教わり富柳会川柳塔へと息切れしながらも奥深さを楽しんでいきます。虚と実とわたしの野外コンサート 池 森子

先生には制約のない自由さの中に心を入れるようまた言葉の省略や置き換えを教えてくださいました。

初参加の市民大会で森中恵美子先生に頂いた大切な天の

川柳塔での自分に課している事は、句が拙くても例会に必ず出席する事（四年間クリア）です。

それは十七音で響き合う新しい作品、言の葉を紡いだ沢山の感動句に出逢えるからです。

同人に推薦して頂き勉強不足に大変さを痛感しています。御指導頂きながら、川柳を楽しみ余裕また生きると言う事を作句出来ればと思っています。

皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

河内長野市 辻 村 ヒロ

大阪市 枡 尾 奏 子

退職後何をして遊ぼうかと、公民館を巡り自分に合うものはないかと見て回りました。ヨガと川柳が気になり、川柳はサラリーマン川柳を読んだ事があり、身近なことで、クスクス一人で笑った事を思い出して、見学させてもらいました。長柳会の人達が生き生きと楽しそうな笑顔で迎えて下さり、すぐ入会させてもらいたかったのですが満席で、一年間待つて翌年、入会できました。

半年くらいはルンルンで見たもの聞いたもので作句していましたが、すぐにスランプに陥り、もがけども出口を見つけれず、辛く苦しい日々が続きました。「趣味なのにもっと気楽に」と言われても落ち込んでいました。定例会は楽しく、皆んなの顔を見て元気を貰いに休まず出席して、なぜ皆んな上手なのか不思議でした。結局続ける事が大切と居直り今があります。今回怖同人の仲間に入れてもらいましたが、おこがましくて一歩も二歩も後退りしてしまう自分に叱咤激励する為にも、好奇心を持ち続け明らかに過ぎたいと思っております。どうか今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。

私の大好きな句

なわとびに入っておいで出てお行き

時実 新子

私に川柳の種を植えたのは、祖母のカズコです。あれから二十年。今回同人に推薦して頂いて、やっと一本の木になれたような気がします。

たくさんの方々が愛情を持って育ててくれました。

もう風になられた方もいます。会うこと叶わぬ今、一句詠む度に胸に感謝を忘れずに。

温かく、厳しく、見守ってくださる方がいます。一言一言を真摯に受け止めて初心のままです。

そして何より、家族という応援団がいます。泣いて笑って、怒って、時には一緒に苦しんでくれる大切な私の宝物。近過ぎて見失わないように。

もらったご縁のひとつひとつに小さな白い花を咲かせ、育ててくれた方々に赤い実でおかえしができる日の為に、毎日を丁寧生きて、川柳と向き合っています。

一本の芯を通して森になる

師と仰ぐとても高くて深い森 (共に 池 森子)

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

こんにちは 新同人です

富田林市 中村 恵

神戸市 能勢 利子

このたびは、川柳塔同人の端に加えて頂きまして、誠に有難うございます。

八年前のある日、美容院ではったり川柳（中井アキさん）にお会いしました。お誘い頂いて、富田林の小さな勉強会で、初めて作った句らしきものを「これは川柳になつていて、初めて作った句らしきものを」とお聞きしたのが私の川柳スタートでした。以来、池森子先生に師事し、何も知らない私を手取り足取り根気よく教えて頂き、現在に至っております。先輩諸氏にも恵まれ多くを学ばせて頂きました。

趣味の一つとしてゆっくり楽しめれば、というスタンスでいましたが、ある時川柳に対しても欲深くなっている自分自身を発見しました。いつの間にか生活の軸ともいえる存在に川柳がなっていたのです。

これぞ私の一句と言えるものを目指しますます食欲に邁進努力致します。今後ともよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

平成二十一年二月、夫の四十九日を終えた頃「そろそろ外に出ないと」と友人がめだかの学校に誘ってくれました。六甲川柳会めだかの学校（世話人山口光久、伊勢田毅、黒田能子、山口美穂、両川無限）のネーミングが気に入る句会に参加。初めて詠んだ「涙目を花粉症のせいにする」は中六で没。句会后、添削通信が届くのが楽しみで今もめだかの会員です。

めだかも大海に、と言われ、二十三年九月川柳塔の誌友になり、二十四年西宮北口川柳会に参加、二十六年九月に同人の仲間に入れていただきました。

二十六年の川柳塔まつりは新人同人として紹介されたにもかかわらず前年の大会に続いて全没でしたが、大会で沢山の秀句を聞いたのは幸せでした。

十二月の本社句会に初めて参加した時も、全没と思った瞬間一句抜けました。これだから川柳止められない。

川柳を勧めてくれた友達、指導して下さった先生方、句会の仲間日々感謝です。

川柳を夫亡き後の杖として

利子

こんにちは 新同人です

富田林市 肥山 一文

私が川柳を始めたのはちょうど四年前、藤井寺市の「松水苑」で囲碁を楽しんでいましたが、その受付に「川柳みささぎ」の川柳が掲載されていました。その句を拜見し、面白そうだなあといい見学をしました。その時に、高田美代子先生と出会い、以来ご指導を頂きました。

この川柳会は藤井寺市民のみの会でしたが十数人の会員で、みなさん本当に親しく親切にお付き合いを頂き富田林に移住後もお目にかかったり、電話などで近況を連絡し合ったりしています。そして、長柳会や富柳会でも先生や諸先輩の皆さんも親切にお付き合ひ頂いています。川柳を始めて本当によかったと思っています。

川柳は多読多作と言われますが、もう一つ心がけているのは、多聴です。句会等で秀句を聴くと勉強になる。まして川柳塔本社の句会は、先生方や諸先輩の秀句を直接聴けて本当に勉強になる。まして川柳塔本社の句会は、先生方や諸先輩の秀句を直接聴けて本当に勉強になる。皆さんもぜひご出席下さい。

川柳は奥が深くてまだまだ未熟ですが、生涯の目標をしっかりと見据えて、これからも精進努力をして参りますので、よろしくお願い致します。

西宮市 福島 弘子

友人に誘われ、伯母である秋元てるに、川柳の手ほどきを受ける事になりましたが、熱心な生徒ではありませんでした。その後平成二十三年二月に、西宮北口川柳会に入会させていただきました。

初句会では大勢の人に気後れし、余り覚えていません。その時の席題が「窓」だったのでありますが、何んと私の句が抜けたのです。回りの人達に、誉めていただいた事だけは、今も忘れられません。

私でも出来るかとも思い、前向きに取り組むようになりました。とは言いますが、週に三日の卓球も楽しく、中々楽しく作句する、と言う所までは行かず今も、四苦八苦しながら作っています。

この度思いがけず同人にさせていただき、身の引き締まる思いです。実力は伴いませんが、継続は力なり、を信じて頑張ろうと思います。

御指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

私の好きな句

とんがって見ても卒寿の金平糖 秋元てる

私の句

大家族笑い声さえ五重奏

こんにちは 新同人です

松江市 藤井 寿代

地域のボランティア活動で、川柳の恩師と出逢い気がつければ十年が経っていました。ソフトテニスを十年して来て、勝負の世界に少しうんざりしていた頃でした。

全くの素人が先生に導かれ、大会のワクワク感に嵌まっ
てしまいました。西へ東へ参加して、先輩達のまったり、
ほっこりに魅了されてしまいました。大会の結果より、柳
人との出逢いが今では一番の楽しみです。とは言え…。幸
いなことに、出逢いにはとても恵まれていて。

ライバルは私の大事な宝物（中八） 寿代
一緒に誘われた友人には感謝、感謝です。恩師の上手な
手綱さばきもあって、二人が競い合って上達出来たような
気がします。

日向ぼこ誰れのものでもない自由 寿代
川柳塔まつえの宿題「自由」で作句した句です。これを
抜いて頂いたお陰で、各地柳壇賞を受賞出来ました。川柳
塔まつりの受賞式では恩師自らがプレゼンターになって花
束を受け取りました。一生の思い出です。

あるがまま水に心があるように 原章峰
私の原点である「えんや川柳会」の重鎮章峰先生の句で
す。あるがままに私らしい句を作っていきたいです。

神戸市 松井 文香

思いがけない、ご推薦により、同人にしていたただく事が
出来ました。

推薦のお電話がありました時、第一声で「早すぎると思
うのですが、私でもよろしいのですか？ ありがとうござ
います！」と、即答してしまいました。ふと頭をよぎった
のが「高野山で永遠の眠りにつける！」と、直感したから
です。

一昨年、病をかかえた身で、命がけて、四国八十八ヶ寺と、
次に、別格二十の合せて百八ヶ寺、煩惱の数の遍路を終え、
結願のお礼の高野山へ、二度参る事が出来ました。高野山
にある川柳塔碑を、まほろしの碑と思っておりましたが、
同人にしていただいて、川柳塔碑が、現実の碑となりまし
た。

同人には少し早いと思いつつ、前進あるのみと、覚悟を
決めました。推薦していただいた諸先生方に御迷惑をかけ
ないようにと、種々の勉強と努力を積み重ねております。
「追いついて追い越したいと早生児」の心境です。

誠に未熟ですが、一生懸命に頑張る所存ですので、仲間
入りさせてください。

よろしく願いたします。

全日本川柳鳥取大会記念

第15回 春はくろぼこ川柳大会

日時 4月5日(日) 午前10時開場
場所 さざんか会館(JR鳥取駅下車南口徒歩3分)

◎事前投句の部(各題2句)

投句締切 3月2日(月) 消印有効

◎当日の部 各題2句

締切 11時

- 「炎」 やすみ 選
- 「力」 天根 夢草 選
- 「宴」 河内 天笑 選
- 「嵐」 平山 繁夫 選
- 「卯」 鈴木 公弘 選

欠席投句 3月30日(月) 消印有効
当日会費 2000円(昼食・発表誌呈)
欠席投句 投句方法 指定の用紙使用または任意の用紙に
それぞれ5題10句連記

事前投句及び欠席投句/問合せ先
〒689-10343 鳥取市気高町飯里84-4

鈴木 公弘 宛

電話 0857-84-2886

主催 川柳同友会みらい

朝日なにわ柳壇 今年の十秀

— 26年12月20日 朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

最優秀句

梅干しと吊し柿ねと笑う老い

秀句

人間の浅知恵笑う大自然

いつの間に妻の浅漬母に似て

子の世話を受けぬ覚悟の道を行く

井を掻きこみスマホ手放さず

いそいそと出掛けるところある平和

代々の土地を田分けな子孫たち

水を遣り過ぎて枯らした胡蝶蘭

信号の青を鶴呑みにした不覚

縮まりて寝て一畳も広し今

番傘川柳本社主幹 田中

最優秀句

突然の闇にもきつと術はある

秀句

福引の欲を笑うてス力が出る

年金の範囲で生きるゲームする

考えて考えてする生返事

何もかも断てば生きてる意味がない

叱られたように叱っているわたし

嬉しさを噛み殺してる父の咳

納得をさせて心が辛くなる

冗談を連発してる寂しがり

ひと言で和むおおきにすんまへん

川柳塔社相談役 西出 楓楽 選

坂上 淳司

平尾 定昭

綾田 清

森田 博

伏見 雅明

合田瑠美子

正信寺尚邦

松尾美智代

澤井 敏治

原 勝利

新一 選

井本 健治

大内 朝子

中川 正子

吉田 篤信

土井 智子

山本 淑子

柿花 和夫

柿花 順子

弓山 アヤ

越智 宰

初しよ教室

題一豆

山口光久

五七・五の例

羊羹の少しかたいも旧家らし

自分すら救えぬ人の立候補

二句一章も心掛けてみましょう。

〔添削〕

原 ぬばたまの黒豆そうつと味見する (高) 道子

「ぬばたまの」の枕詞は川柳では不要です。中八になっています。

添 おせち料理の黒豆そつと味見する

開子

原 古里のしょうゆ豆とうどん食べ 登子

中六になっています。

添 古里の食はうどんと醬油豆

山久子

原 歳の数食べきません鬼打豆 心咲

上、中、下がぶつんぶつんと切れた感じ

添 豆まいて心機一転改める

元三

です。下六になっています。順序を入替えてみるのもよいでしょう。

添 赤飯で祝う娘は大人びる

富貴子

原 鬼打豆歳の数ほど食べられぬ

「や」という切字は川柳ではほとんど使

添 赤飯で祝う娘は大人びる

絹枝

いません。気をつけましょう。

添 老夫婦歩み続けて足に豆

晶子

原 湯豆腐へ紅葉おろしが花を添え

添 赤鬼も戯れて付き合っ節分夜

珠玲子

原 ゆつくりと豆と遊んでいる日向 (畑) 節子

添 赤鬼もおどけています節分夜

原 豆知識書きとめて無事生きのびる (株) 玲子

添 豆餅作る元気がいる印に 恭子

添 豆餅作る元気が今もつて

添 豆知識拾い集めて生きのびる (株) 玲子

ワンマンカーやもめ暮らしの似ておかし子を死なし学校に子の多いこと

【少しの修正でよくなる句】

原 今日日は豆飯何かい事あつたつけ 紀美恵

添 今日日は豆飯何かい事ある予感

原 納豆のお蔭かどこも悪くない

添 納豆のお蔭かどこも悪くない

原 雑談をリードしている豆知識

添 雑談を愉快にしてる豆知識

原 湯豆腐に語りかけつつ酒を飲む

添 湯豆腐へ話しかけては酒を飲む

原 黒豆のふつくら味は大好きだ

添 黒豆のふつくら味がたまらない

原 福豆をかむ歯があつて老いも良い

添 福豆をかむ歯があつて老い達者

原 福は内齡の数だけ食べたはず

添 福は内齡の数だけ食べきれず

原 寒に耐えエンドウ春に実を付ける

添 寒に耐えエンドウ春に実を結ぶ

原 豆知識少しづつでも増やして

添 豆知識少しづつでも増やそうか

原 こたつ船豆炭入れてぬくぬくと

添 こたつ船豆炭入れて和を結ぶ

原 一粒の豆拾うのもリハビリ

添 一粒の豆拾うのもリハビリだ

原 豆球が寄つて集つてクリスマス

添 豆球が寄つてたかつてクリスマス

原 恙なく黒豆煮てる歳の暮

添 恙なく黒豆煮てる年の暮

〔入選句〕

鬼は外だけど家には福ばかり

豆粒を掴みりハビリする日課

豆絞りさあさあ出番まつり笛

納豆のねばりが口にこちよい

五色豆かんで今年の骨密度

黒豆がふつくら煮えて福が来る

惜しげなく母お手玉に小豆詰め

豆まきで鬼と一緒に福も逃げ

手の豆が努力の証結果未だ

豆まきに心の鬼もうろたえる

豆記者の問いが鋭くうろたえる

二人なら楽しみ倍の豆畑

七厘で煮豆コトコト母の音

ばあちゃんの御手玉優し小豆入り

とりあえずビールとくれれば枝豆も

豆ごはんにはパワーを貰い闊歩する

熱燗をちびり豆腐でひとり鍋

手の血豆素振り千回夢を追う

節分の結婚式に鬼は出ず

熱燗に湯豆腐有れば事足りる

豆まいて心の鬼も追い払う

豆撒きの声も跡絶えた老いる町

孫の服捜しまわつて足に豆

豆撒きをした子も今は二児のパバ

かっこなど気にしてられぬ足の豆

コトコトと豆煮るように生きている

これ幸い豆を背に受けババ街に

〔佳句〕

炒豆に花が咲いたと孫を誉め

両の手の豆が支えた尻上がり

赤飯を炊いてふたりの金婚日

手間かけて主菜にならぬ豆を煮る

湯豆腐ではっこり和む小宇宙

〔今月の推せん句〕

値上げした豆腐の角が欠けている

腐の角が欠けているとは。

くすくすと笑いだしそうな句に出合いま

した。値上げは値段を上げるか量を減らし

て値段を据え置きかもどちらかですが、豆

黒豆が上手に炊けて嫁の顔

黒豆を上手に炊くのは至難です。お嫁さ

んの誇らしげな顔が目には浮かびます。

手の豆が満足してる農仕事

農の手はごっこつとして角張っています。

手に豆ができるのもしよっちゅうです。手

に出来た豆の立場での表現がいいですね。

〔私の句〕

黒豆のふつくら幸を醸しだす

川柳塔鑑賞

同人吟 中居善信

— 1月号から

楢山へ行く日は花の種持つて

木本朱夏

この句は発想の勝利だと思ふ、姥捨山と言われる楢山へ捨てられるという暗いイメージを明るくしたものにした発想、何時も朱夏さんにはやられてしまう。蓮華の花もコスモスもヒマワリも年中花が絶えないように、そしてお酒も持つて行くといいだろう。

勝てないとわかっていても四つに組む

高島啓子

この句を相撲に例えよう、偉大なる横綱白鵬へ挑むのに大方の力士は四つに組む。右でも左でも上手取られたら見事に投げられる。分かつてはいるんだらうが四つになってしまふ。動きが早いから変化しても通じないのだらう。ならば、横綱さえ下位力士に張手を使うのだから誰か張って見ないか等と思ひながら相撲見ている。だが日本人は誰も張らない。

Uターン出来ない訳も無くは無い

高田美代子

今、中山間と言われる農村は限界集落と呼ばれている。跡継ぎが居ないので。むかしは軸足を田舎に置いて出稼ぎなどして生計を立てていたものだが、現在はそれすら出来ない。都会がどんなに冷えて込んで若者は田舎へは帰らない。飯が食えない、嫁が来ない、早晚田舎は潰される。

ニユースで見られただらう、雪でやられた徳島の農村、若者が居ましたか。

米の値も知らず増税考える

津守なぎさ

米の値は値段ではなく値打ちを指している、終戦後暫くは米一升を買うのどんなに苦勞された事か、思い出してほしい。

一日働いてやっと米一升が買えた時代を、現在は一日働けば米一俵が買える。一俵とは4斗である、こんなに米の値打ちは

下がってしまった。政治の不作ではある。

わたくしの漢字一字は句である

川端一歩

今年の漢字一字は「税」に決まった。僕を得ている。一歩さんは句である、僕もそうしたいと思う。出来るなら恋もしよう。まだまだ欲も持てる、草刈り機も使える。まだまだ句である。

ど忘れか惚けてきたのか恐くなる

齋藤さくら

まだまだ句だと言ったのだが、そうで無いところもある。外出をする際に何時も決まったように、忘れ物を取りに帰る。妻に笑われている、それ始まったと。

どっちみち死ぬってことに変わりに

吉岡修

これは悟りなのか、諦めなのか？僕も、この六月に胃の三分の二を切除した。「死ぬること恐くなかった手術台」の句を作った。「取り留めた命百まで生きてやる」も作った。腹決めてオペをした。

玉音もダンス覚えたのも二十歳

松村里江

玉音を聞いたのは僕は小二の時であった。それから計算すると大凡の歳は分かる。何時までも元気で作句をして欲しい。

後継ぎがない下町が瘦せていく

山野 寿之

先に、農村を書いた。下町も同じように瘦せている。僕の住んでいる大洲市の町中も同じである。出掛ける度に更地が増えている。それと比例したように街はどんどんと郊外へ延びている。資金力の違いか？旧町は取り残されてしまった。呉服屋も陶器屋もタンス屋も潰れた。

正直で女を褒めたことがない

柏原 夕胡

正直で無いのとは違うのだが、女を褒めるって事は、背筋が痒くなる。下心があるように思われるのが嫌なのです。ならばくさす方がよっぽどいいと、男は思っているのです。

冗談がとても明るい車椅子

楠見 章子

冗談が言えるのは、先が読めたからだろう。僕も術後主治医と良くやり取りをした。「執刀医神でなければ救われん」の句も「執刀医少し笑った顔がいい」の句も先が見えたから言えることだ。

もう元に戻れぬ車椅子も前向きに捉えると、冗談の一つも言えるようになる。

未だ何も言っていないのに返事する

北山 絹子

笑ってしまった、我が夫婦を詠まれたかと思うように。加齢とはそんなものだろう。耳が遠くなるとテレビの声に返事する。戸を叩く風の音に返事する。

泣きたい日笑いたい日にベンがある

倉益 一瑤

五句どれを取ってもいいのだがこの句にした。ペテランらしい無理のない表現。泣きたい時も笑いたいことも五七五にしておけばいい。生きていた証に。

御嶽も激しさに秘めていた

山下 節子

日本という土地柄はある意味で怖い、かも知れない。地震の頻繁に起きる地盤、台風の通り道、活火山は何時噴き上げるのかも分からない。だが、四季のある土地柄、生水は何処の水を飲もうと結構。いい国ではある。

老眼鏡かけて恋の句作ってる

岸 桂子

ユーモアの句を取りたいと思っていた、もう後そう長くは生きておれないかも知れない命、せめて恋の句でも作ろう。

握力は減ったが盃は握れ

平田 実男

羨ましく思う、僕の血筋は皆酒豪であったのに僕は殆ど飲めない、すぐダウンをしてしまふ。反吐吐くほど飲んで嘔みついて見たいと、どんなに思った事か。

欲しいのは安全よりも交付金

山口 高明

人間という動物は悲しいものだ。三年もすれば痛みを忘れる。東日本大震災の折りには、原発はもうこりこりと皆が言った。だが自民党も財界も、そう頻繁に事は起こらないと思っている。

ならばと、佐賀も愛媛も交付金を狙う。

青春謳歌すぐ年とるよアーメン

(故)永田 俊子

茶化しているようにも見える。いや違う俊子さんの年に達したら。こんな表現が出るのかも知れない。僕は今まで自分の年を思った事はなかった。胃に癌が見つかり手術をして、ふと気づいた、そうか喜寿だったのかと。平均寿命はそこに来っていた事に。転移が無く、リンパ節にも届いていない、術後薬一服飲んでない事に感謝している。みんな御身大切に願いたい。

水煙抄鑑賞

—1月号から

丹後屋

肇

保証ない命に今日も欲の皮

下田 茂登子

五欲は人間の宿命。だから元気で生きて行ける。命のある限り、欲の皮を突っ張って行きましょう。但し、犯罪だけは、ダメ！

おいしくついつい油断してしまおう

柴本 ばつは

ダイエツトのため、朝晩ウォーキングを欠かさないのに、忘年会で盛り上がってしまいます。それがつちり鍋なら最終のおじやまで、すっかり平らげてしまおう。気がついた時はもう遅い。

婿からの手紙うれしい誕生日

小松 紀子

娘からでなく、婿から丁寧な誕生日の手紙が届く。幸せ感に溢れた母親

の顔を想像して、つい微笑んでしまおう。

この痛み知ってる人と話したい

山根 邦代

痛みの程は自分にしか解らない。しかし同病者とはきつと解り合える筈。痛みを分かち合った二人が退院後も、繰り返す長電話。

除夜の鐘反省せいと聞こえます

貝塚 正子

国民的行事紅白が終つて、やがて除夜の鐘が響いて参ります。正子さんだけでなく日本人のこころを鎮め、この一年を振り返つて反省させる一時でありましょう。

ひと言が一日付いて離れない

太田 としお

ひと言のインパクト。生真面目なお人柄なので、いい加減で済まされない。一日中悶々として過ごす。でも太陽はまた昇る。新しい気分になって、自分を押し上げてくれるでしょう。

妻通帳俺は株価を覗んでる

藤塚 克三

妻はリアリスト。俺はロマン派？宝

くじのような夢のまた夢にはとても馴染めないが、株価の乱高下に一喜一憂している。男は所詮単純なものだ。

ティファニーでこのペンダント目が

合った

山崎 早苗

ツアー旅行でニューヨークに寄つた。豪華な宝石のオンパレード。自分にとつて似合いそうなペンダントが目にとつた。懐工合から買えそうもないが二度と出会えまい。親戚縁者の土産物のことは、すっかり忘れて清水の舞台から飛び下りた気分で、これを手に入れたのだ。

あきらめず置かれた場所で咲いている

大和 峯二

どの環境に置かれても、そこで辛抱強く花を咲かせるのは立派であり、尊敬の念を禁じ得ない。私のようなアキ性には、いきなり警策が飛んでくる。

軽い口たたいて空気重くする

岡本 勲

言うことを聞かない僕の影法師

丹下 凱夫



雨に想う

雨を詠った歌謡曲もたくさんありますが、懐かしいところでは「あんときやどしゃ降り」「有楽町で逢いましょう」「長崎は今日も雨だった」「アカシアの雨がやむとき」「雨の御堂筋」。中でも私が好きなのは「六・八コンビ」と言われた永六輔（作詞）中村八大（作曲）の「黄昏のピギン」。その歌い出し、「♪雨に濡れてたゞ たそがれの街」と口ずさむだけで、郷愁に似た甘く切ない想いに満たされます。

このように歌謡曲の「雨」は、ほとんどロマンチックなムードを演出していますが、現実の雨はそのような甘いものばかりではなく、気分を沈ませることも多いようです。

曇りのち雨のち欠伸窓のうち

吉井菜々子

良い事は長く続かず今日は雨

田中 みね

約束が微妙にずれてからの雨

藤成 操江

雨になる匂い 待合室あふれ

牛尾 緑良

人恋しくなります夜のこぬか雨

松尾美智代

雨の窓辺での欠伸、もやもややしている日の雨、人で溢れた病院の待合室、そして、人恋しくさせる静かな雨など、右はそれぞれ少しメランコリーな気分を表現しています。

しかし、「沈める」はマイナスですが、「鎮める」はプラスです。雨の音は人の心を鎮める効果もあって、睡眠導入のためのCDも出ています。なぜ雨音を聴くと落ち着くのか、科学的には証明されてはいませんが「不規則な揺らぎが重なった静かな音」は、人の心を安らげる作用があるようです。

旅まくら雨にしあれば雨の詩
雨降って幸せそうな芋畑

西尾 菜
室屋 正子

土佐の雨どこか陽気でおしゃべりで
街中を楽器に変えるにわか雨

小澤 幸泉
熊谷 純

雨だから今日は映画にしておこう
雨の日は錆びた刀を研いでいる

高杉 力
牧野 芳光

右の句はそれぞれ、雨を肯定的に捉えています。雨を嫌うか歓迎するかは、そのときの体調や精神状態によって左右されます。旅空の雨に逆らわず「雨の句」を作ったり、芋畑を「幸せそう」と思ったりできるのは心の余裕です。また、雨の音を「陽気でおしゃべり」とか「楽器」と感じるのには雨を嫌っていない証し。そして、「映画鑑賞」とか「刀を研ぐ」自己研鑽」の絶好の機会だと受け止めるのも、体調が良くて精神的にも前向きになつていたのでしょう。

お日さまと雨は夕夕だが我儘だ

福西 茶子

夕立に野心忘れて走りだす

森本 吉則

大雨の予報は容赦なく当たる

野村 希

降り止まぬ雨に裏山動きそう

花岡 順子

濡れてまいろう言うてられないゲリラ雨

北村 賢子

静かに畑を潤す恵みの雨であつたり、人の心を慰めてくれる雨ばかりならいいのですが、自然は「我儘」で、人の思惑通りには降ってくれません。最近では「ゲリラ雨」などという極めて激しい雨によって各地に大きな被害を及ぼしています。治山・治水は国家の基本であり防災対策は行政の責任ですが、私たちもまた、毎日の暮らしにおいて、地球温暖化を防ぐことを意識した対策を講じたいものです。



追悼

熱い人 蛙城さんありがとう

あじょう

岸和田川柳会会長 岩佐 ダン吉

山本蛙城（本名・吉蔵）さんは情熱の人でした。あの無謀な戦争時代のことや宗匠制が残っていると言う俳句界への意見、そして「川柳界には先生はいりません」と。

岸和田川柳会（岸川会）の新米会長の私には「ダン吉さんは大きい組織を運営されていた人だから、役員さんがそれぞれ係を持って生きいき動いている、大丈夫ですよ」と笑いながら言ってくれました。

平成26年8月28日に岸川会顧問の蛙城さんが、94歳で旅立たれました。埼玉県の出身で日頃は寡黙な人でしたが、戦争への批判は強烈で「戦地でも上官らの部下への残酷な暴力や中国の人らへの不埒な行爲を見ていて、この戦争はきつと負ける」と思っていた。「きな臭い時代になりましたなあ：僕は反戦平和の語り部として生きていきたい」。岸川会の多くの仲間もたびたび聞い

た話でした。

「私ができることはこれくらいですわ」と毎年のこと、市民川柳大会の受賞者への楯の提供。さらには南海・岸和田駅構内に「川柳しませんか」のポスター掲示やローカル誌への広告：「とにかくひとりでも句会を見に来てくれたらええんですよ」。

川柳の普及や教室にも熱心で土橋房枝さん宅での「おたまじゃくしの会」では、川柳のイ・ロ・ハを。お隣の佐野川柳会では「新人教室」それらからは岸川会にも多くの仲間が入会してくれ会の原動力になっています。蛙城さんは一方で俳人・金子兜太主宰の「海程」の同人としても活躍、俳句会の宗匠制や高額と言う参加費などに批判を持ちながらも、柳俳一如、川柳の大衆性を大切にしたいの弁は熱いものがありました。

蛙城さんの話でさらに印象に残っていることは岸川会とは泉州地域、とりわけ「川柳塔さかい」と「堺番傘」との共存共栄の歴史でした。昭和26年（1951年）に堺番傘に飛び入り参加をしたと言う蛙城さんは「水府さんによく可愛がられたんや」と話していました。そして高橋操子さん時代は「岸川の大会には堺の二柳社がどつと来てくれ堺にも岸川会から」。会員の高齢化もあり堺と疎遠になっている現状を大いに反省しました。

さて蛙城さん、いい話があるんですよ。この秋に川柳阪南の愿さん、佐野川柳界の向井清さんと話し、ぜひ近く三社合同の「大会」をやろうと。

南海と阪和線の沿線・賑やか好きのこの地域で、やがては堺や和歌山にも呼びかけて蛙城さんの夢をきつと実現したいと思っています。

洒脱の人、蛙城さんは「惚けたらあかんと掃除や洗濯から食事まで、一切やってくれたんです」と次女の博子さん。

博子さんの便りの最後には「手足も麻痺、声も出ない中で最後にこの句を」と

人生は何も無いのは最高だバイバイ



追悼

かみがそみちこ

神夏磯典子さんを偲んで

伊達郁夫

の句を味わって見たいと思います。

愛猫と長生きごっこしています

治る治る暗示をかけて生きている

思い出がどっさりあって動けない

子を睨む目玉をいつも拭いている

笑い袋沢山持つて世を渡る

角のない大根わたし戒める

うつらうつら竜宮城に着きました

上品にしようとすればけつまづく

日の流れ水の流れを見えています

長電話やつと元気になりました

三月の桜は夢を食べている

痛み止め神様からの子守唄

どん底を見たからすみれ美しい

平成26年11月末、神夏磯典子さんの突

然の訃報に驚きました。数週間前に川柳

塔本社まつりの大会で、晴れやかに「各

地柳壇賞」の榮譽を受けられたばかりで

した。ご本人も病院で、大層お喜びでし

た。その晴れやかさを惜しむ様に、他界

されたことに、悲しみと無念さが残りま

す。典子さんは城北川柳会の最古参であ

り最重鎮でした。城北川柳会の顔でした。

二代目会長川口弘生氏の時代に城北川

柳会に川柳の門を叩かれ、それ以来凡そ

50年の柳歴をもち川柳一筋の人生を歩ま

れて来られました。典子さんの様に川柳

が命と決めて来られた人には私など若輩

の者には只々頭の下がる思いです。

典子さんの名声の下に、今でも毎月投

句者の方が10名はいらっしゃいます。体

調がすぐれない中で、ご無理を言って、

投句窓口の労をお願いしてまいりました。

城北川柳会の大きな砦が音を立てて崩

れる思いです。

生前はご主人様の介護に専念され、約

8年の間、介護の時間を割いて句会に出

席されておりました。典子さんは取り分

け猫を可愛がられ愛猫のベルシャ猫の後、

ミーちゃんと名付けた猫の可愛がりよう

は、半端ではありませんでした。その愛

猫ミーちゃんが亡くなり、典子さんの落

胆は見るに忍びないものがありました。

川柳を、猫を、愛する優しい心の持ち主

でした。近藤正さんが弔辞で披露された

典子さんの句を含めて、今一度典子さん

典子さんの奥深い珠玉の句に、いまさ

らながら感動させられます。どうか、名

誉ある「各地柳壇賞」を手土産に御浄土

でも素晴らしい句をお作りください。

城北川柳会一同を代表して、ご冥福を

お祈り申し上げます。

合掌



インスパイレーション
ナバ
印象吟
大西泰世選

(投句130名)

二回目のイメージイラストもなかなか手強かったようですが、皆様の自由な発想には大いに刺激を受けました。

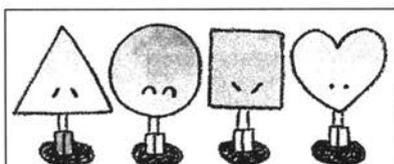
青森市 守田 啓子

哭くときの顔が

もどつてこないのよ

(評) ということは、

笑顔でいるのが多くなりそう。解き放たれた感情の操作も、その時の気分が反映されるようです。



手探りでハート掴みに行く少女

(評) これはまた可愛らしい一句。瑞々しい初恋の様子がうかがわれ、ハートのカタチが一段と輝きを増して見えました。

堺市 村上 玄也

和歌山市 楠見 章子

青空も見なはれその若い人

(評) せつかくの青空も、下を向いてスマホなぞに夢中なのでしょう。空の青さも風の流れも、若者にこそ感じて欲しいもの。

枚方市 小林 わこ

べっこう飴紙めてなめての形ぬく

(評) 飴を舐め続けた子供の無邪気さの結果が、大人の意図的な所作の結果が、どちらにしても努力のたまものでしょう。

弘前市 高瀬 霜石

おしゃべりと無口どちらかがスバイ

(評) おしゃべりがスバイだろうと言われればそんな気がするし、無口がそうだと言われればなるほどと思う。さあ、どちら。

大阪市 石橋 直子

チャップリンいつも私をゆさぶって

(評) 見かけの滑稽さと裏腹に、常に深い人間愛を貫いたチャップリン。笑わされて、そして泣かされます。

宝塚市 田中 章子

国民の皆さまおわびいたします

(評) 政治家の不用意な発言や、有名ホテルの食品偽造など、お詫びの光景を何度テレビで見たことか、懲りていませんよ。

佐賀県 真島久美子

影踏み影がおんなじ顔をする

(評) 嬉しい時は嬉しいように、悲しい時は影も悲しみの表情を見せる。影だから当然と思いがちだけど、この従順さは尊い。

倉吉市 山中 康子

真夜中のひらめき神の救いかも

(評) 平凡な人間の想像力の範囲などしている、そんなアキラメの最中のひらめきは、まさに天啓と言えるのかも。

大阪市 井丸 昌紀

親指がどこかに逃げてしまったぞ

(評) 四枚のカードは四本の指、逃げてしまった親指のかたちは如何に、想像があれこれ広がっていきます。

大阪府 米澤 俣子

ストレスを形にすればどの形

日向ほこ みんな一緒に淋しがり
全員でお話しします西遊記

堺市 澤井 敏治

地蔵さんが転んだ動いちやダメよ

こみあげる思いは面の下に伏せ
名優が消えて昭和は遠くなる

東京都 川本真理子
明石市 糀谷 和郎

鳥取市 岸本 宏章

口いっぱいキャンディー物が言えません

香芝市 大内 朝子

わたくしの心に棲んでいる小人

篠山市 酒井 真由

人生の岐路標識に立ち止まる

和歌山市 武本 碧

百面相試してみても笑わない

鳥取市 岸本 孝子

このかかしならば雀が寄ってくる

横浜市 菊地 政勝

面接の顔こんなんでどうかしら

堺市 矢倉 五月

足が地に着いてりやどんな生き方も

札幌市 三浦 強一

地方創世ゆるキャラがまた増える

弘前市 吉川ひとし

LED世界へ顔を売る日本

和歌山市 古久保和子

饅頭が一つ足りないお茶の席

大阪市 柴本ばつは

喜怒哀楽いつもこれです子のメール

藤井寺市 太田扶美代

トランプの兵隊さんにガードされ

高槻市 片山かずお

本命にだけは手作りチョココレート

芦屋市 黒田 能子

どنگりよ言いたいことがあるんだね

寝屋川市 籠島 恵子

ゆずり合う最後のチャンスだとしても

大山市 金子美千代

来し方が顔に出ているクラス会

神戸市 山田婦美子

野仏の顔さまざまに秋の暮

八幡市 今井万紗子

お互いの距離を保つていい笑顔

高槻市 富田 美義

成田着タグも色々旅カバン

河内長野市 山岡富美子

無印の僕は今がお買い得

三田市 久保田千代

葱坊主特に出世の友も居ず

弘前市 肥後和香子

出番待つじゃが芋の芽の緊張度

神戸市 富永 恭子

生き方の形それぞれゆえ楽し

芦屋市 竹山千賀子

お互いに名前はお互いが握手する

大阪市 坂 裕之

良いところ出し合ってこそ伸びていく

羽曳野市 徳山みつこ

イケメンの口にとけたいチョココレート

東大阪市 佐々木満作

それぞれの個性生かしたお家芸

三田市 多田 雅尚

大儀なく代り映えせぬ総選挙

西宮市 足立 茂

人類がいつかは出会う宇宙人

富田林市 古田 千華

もう何も言わない君の意のままに

西宮市 山本 義子

百歳を過ぎた笑顔が並びます

大阪市 栃尾 奏子

本命に友達そしてキープ君

大阪市 佐藤 忠昭

目は恐い心の秘密隠せない

豊中市 藤井 則彦

抽選をそわそわと待つ宝くじ

大阪市 宇都満知子

初対面名刺の裏に似顔書く

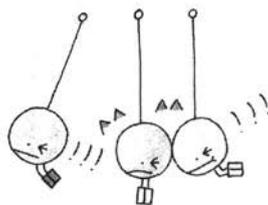
富田林市 山野 寿之

三兄弟やんわり論す母の愛

和歌山市 北原 昭枝

お互いの目で足元を確かめる

4月号発表
(2月15日締切)



句箋に2句

本社一月句会

◇一月七日(水)午後一時
アウイーナ大阪

穏やかな日和の七草の日、新年句会は百二十一名(投句七名)の参加で開催。初出席は、弘津秋の子さん(茨木市)

平成二十六年年度最優秀年間賞は、木本朱夏さん、初歩教室年間賞は、楠原富香さん、内田志津子さん、石田ひろこさんが表彰された。句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、近藤佳子さん(鳥取市)永田俊子さん(熊本市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は、小島蘭幸主幹。題は「私の句の背景にあるもの」。

初めての結婚記念日が、竹原市一斉溝掃除の日と重なり披露されたのが、

結婚記念日溝浚いから始まりぬ
いろいろと家族のエピソードを交え、その時々句を披露されたが、会場はずんずん主幹の話に引き込まれ、温かい空気に包まれた。

月間賞は、安土理恵さん(橿原市)
(司会)蕉子・真理子 (協取)扶美代・真

理子)(受付)裕之・奏子 (清記)勝弘)

席題「卵」 木本 朱夏 選

卵かけごはんかけ込み朝を出る

七草が頼りないので卵かけ

お見舞いは卵バナナであった頃

弁当を早く開けたい卵焼き

チョコエッグ子供と夢を分かちあう

おでんならまずは卵ときめている

火の鳥の卵を飼って震災忌

東京五輪メダルの卵仕込み中

大胆に転ぶ卵の向う見ず

怪我せぬよう抗議している生卵

不甲斐ない奴だと卵ぶつけられ

台所に相棒と呼ぶ卵です

八十路でもちゃんと卵巣元気で

荒くれを束ねています卵綴じ

決心をすると卵も立つらしい

玉子焼崩れそろそろ倦怠期

男世帯困った時の卵焼

卵焼さくらいと言ったことはない

好奇心の一步手前の卵です

卵さえあればと思う単細胞

スクランブルエッグに春の風まぜる

題名のない朝を始める目玉焼

卵ポン 故郷も老母も捨てました

妻が卵産んだら俺が温める

嬉しくて一つ余計に割る玉子

蟻螂の孵化少子化を嘆かれる

孵卵器より抱かれてみたい羽根の下

産卵を終えて石狩川に死す

かすの子のコリコリ来年また会おう

キャビアフォアグラ口に合わないフルコース

休肝日風邪を担保に卵酒

いっぱいしの振りする半熟の卵

青空も海も見たいな無精卵

冷蔵庫に自分の部屋がある卵

男ひとりそぼろ卵と海苔の昼

ノーベル賞の卵を割った割烹着

悪口の卵孵化せぬうちに潰す

住

恐竜の卵の上で暮らしてた

初夢はゴジラの卵鷹が抱く

生涯を啜啄だけで終りそう

ときどきは幸せ芝居する卵

半熟がいいね 卵も恋愛も

人

飢えている子等にあげたいゆでたまご

地

長女二女卵と檸檬ほどの差の

天

金の卵だった都会に潰された

軸

母と子に約束があるオムライス

扶美代

蕉子

淳司

いさお

葉子

賢子

誠一

恵

とーな

まつお

見清

弘之

完司

天笑

黒兎

楓楽

富美子

敏子

完司

蘭幸

真理子

兼題「祝」 安土 理恵 選

今年また持てる幸せ祝い箸
 川柳塔卒寿祝は語りぐさ
 生きてます今年も拝む初日の出
 祝箸はつ孫の名を書き加え
 健やかに祝いの膳にいる卒寿
 今日こそは立派に書こう祝一字
 祝日本参賀に寄せる人の波
 元旦を祝う国旗はまれになり
 胴上げて手荒く祝う新記録
 お言葉どおりお元氣だけの祝儀袋
 打ちあげて未来を祝う「はやぶさ」
 祝と書くたびに財布が痩せてくる
 また祝いですかと愚痴ている財布
 白寿まで生きてお祝いまでされて
 女子会の数だけ祝杯をあげる
 甘口のお屠蘇で老妻と祝う初春
 祝い酒ダウンしたのはお父ちゃん
 祝箸殺し文句を書いておく
 元旦祝う生命線を描き足して
 嬉しいな朝から飲めるお正月
 祝当選握手を札に握り代え
 胡蝶蘭香りタルマに目を入れる
 お祝いに行けば吞ましてくれる筈
 祝辞にもゴーストライター代読者

落選をお祝いしたい人がいる
 祝え祝え恋の一つをいけにえに
 少子化の村中祝う呱呱の声
 後世に継ぐ収穫の祝歌
 新築祝い裏にローンの匂いする
 許されよ年酒の酔いのひとときを
 ご両家が祝言急ぐ裏事情
 金盃で祝おう人生ど真ん中
 スピーチは短くご祝儀はたんと
 お祝いをいただく両手はすぐに出る
 お七夜の命名嬉嬉と祝い膳
 悪友の祝はハグでこと足りる
 喜寿祝い孫のぬくうい肩叩き

おめでとーういい響きです頑張れる
 入学はするし卒業しやはるし
 寿ぐを書く字が燥く風は春
 七十年戦争なしを祝わんか
 祝い膳鯛は白眼をむいている
 おめでとーうあれば十分名祝辞
 旅立ちを祝う一輪梅の咲く
 新成人の扉勢いよく開く
 成人式母は笑顔で泣いていた

としお
 真理子
 黒兎
 隆彦
 徹子
 哲夫
 好
 扶美代
 六点
 瑞美子
 徹子
 楓
 恭昌
 加お里
 とーな
 寿之
 一歩
 真理子
 敏治
 朝子
 寿子

冬の雨恋しいひとを連れてくる
 手のひらの小さな恋を温める
 ふる里を恋いつ仮設の四度の雪
 恋しい人思い出させるさくら貝
 白浪は恋しい男を追う姿
 恋しくて昔話は止めました
 恋しさがメール打つ手を休ませぬ
 いとんもこいさんも好き道修町
 盆栽の人恋うかたち枝の先
 思慕の影みな幻に走馬灯
 みぞれ降る父の影追う波の音
 会いにゆくシヨールは彼の好きな藍
 日だまりが恋し化石の日向はこ
 川柳に恋して友が出来ました
 初詣恋みくじとあり引く八十路
 缶蹴りの音が昔を連れてくる
 約束の小指は恋になる予感
 ふるさとへ続く雲あり母を恋う
 セコムしてますか恋人はいますか
 もつれ糸解けて恋しくなるあなた
 殻破る恋しい人ができたから
 結んで開いてそんな時から好きだった
 頬杖をついて思案の恋薊
 断捨離にブレーキかける古手紙

幸泉
 能子
 ひろ子
 美智代
 弥生
 信子
 かずお
 とーな
 敏子
 洋
 ヨシエ
 美津子
 徹子
 一歩
 世津
 千代
 千代
 寿之
 千代
 義
 わこ
 堅坊
 ばつは
 正春
 和夫

兼題「恋しい」 伊達 郁夫 選

亡夫への恋しさつゝのる雑煮餅
古里を遠くに置いて恋しがり

あや子
見清

兼題 「クリーム」 黒田 能子 選

クリームの世界に酔えば恋がある
職場ではクリームパンの位置に居る
母のクリームを塗っていた少年期
クリームでピリオド妻の水仕事
何が言いたいリップクリーム光らせて
仲直りにソフトクリームとろけてく
クリーム状になるまで生きるつもりです
クリームの威力昨日のしわが伸び
霧閉気に酔ってクリーム溶けている
震災忌クリームパンは甘かった
カサカサのところに保湿クリームを
ハンドクリームたっぷり塗って今日閉じる (矢)五月
吹雪く夜はクリームシチューなどが

初恋がふつと顔だす年賀状
味噌汁と恋しい人が側にいる
からっぽになって一つの恋終る
恋しいと夜更けのスマホから悲鳴
逢いたいなサチコとミヨコあやめちゃん
亡夫似の背中に会った夜の長さ
浅漬けが恋しい妻の三回忌
恋したひとをどんと忘れて行く帽子
雪道に昔の恋が落ちてている

哲夫
日の出
直樹
唯教
能子
朱夏
勝弘
宏子
六点
瑠美子
葉子

類つべたでケーキを食べる三歳児
若返るクリーム買って古稀も揺れ
嫁が来てクリームシチューに慣らされる
すべすべの肌を守っている秘訣
ソフトクリームのような男で頼りない
ちよつと待ってリップクリーム塗ってから
青い恋クリームソーダの味に似て
クリームを塗って女は戦いに
煮え切らぬクリーム状の生返事
君をハグする手だクリームで手入れ
傷口に甘いクリーム効くらしい
風景画クリーム色で味がある
どろどろとクリーム状になった恋
クリームパン優柔不断な半分こ
クリーム煮鬼の心を丸くする
靴墨に元気をもらう朝の靴
チョコレートパフェで口説いた妻である
いと

弥生
真理子
保州
寿之
敏子
大子
千代
アキ
哲夫
完司
富美子

恋しさにこだわりがある鬢気楼
ラブレター羊に食べてしまわれた
近松の舞台は恋しい雪と会う
まなうらに恋しい人を住まわせる
七草や賀状一枚待つている

柳弘
章子
弥生
賢子
秋の子

武臣
六点
瑠美子
幹子
洋

クリームシチューに煮込む絆の三世代
生かされてクリーム状の介護食
クリームをたっぷり罪を消すように
告白を溶けたアイスと待っている (楠)和夫
ソフトクリームのでっぺんに居るキュービッド

恋しい人眠らせておく火消し壺
恋しさは秘めて賀状は軽く書き
天

完次
世津
楓楽

耕治
としお
完次
たもつ
ヨシエ
哲夫
朝子

真つ白になれずクリーム色の僕
クリームが溶けて二人はそれっきり
天
ハンドクリーム使い切ったら春です
クリームシチューことこと煮込む寒の入り

合鍵の鈴は恋しい音がする
軸

楓楽

朝子

朱夏

恋しい人眠らせておく火消し壺
恋しさは秘めて賀状は軽く書き
天

楓楽

朝子

朱夏

兼題「仰ぐ」 柿花 和夫 選

来し方を感謝のうちに振り仰ぐ
 決断を迫られ妻に指示仰ぐ
 甘酒をすすって仰ぐ神の山
 古天井仰ぐと昭和匂い立つ
 やつとやつと決心ついた冬の天
 師と仰ぐ人の背中にあるオーラ
 生き残る術を仰いだ父の背
 謝っても還らぬ言葉月仰ぐ
 空白のページで仰ぐ無位無冠
 師と仰ぐ友を連れ去る寒の朝
 峰仰ぐおまえもマグマ溜めてるな
 割り勘の分母を仰ぐ下戸のウツ
 冬の空仰ぎ逢いたい人の星
 説教をするにも仰ぐ孫の丈
 バッカスに助力仰いでプロポーズ
 石段を仰ぎ参拝やめておく
 延命を拒否し神への道仰ぐ
 句集の重み路郎薫風師と仰ぐ
 月仰ぎ元気でいると父母に
 太陽を仰ぎ充電する枯木
 一字違い天を仰いだジャンボくじ
 指示仰ぐだけの気楽さ雑魚でいい
 師の恩を返せぬ通夜の月仰ぐ
 上ばかり見る癖がつき蹴躓く

幸泉 雅明 キヨミ あや子 能子 満作 富香 大子 柳弘 敏治 敏子 あや子 理恵 黒兎 好 楓 楽 哲夫 希久子 忠子 ひろ子 修 誠一 千代

ため息を吸ってほしくて空仰ぐ
 ああでもないこうでもない天仰ぐ
 まん丸い月を仰げば母の顔
 天仰ぐ目ぐすりを差すだけなのに
 上を向いて歩いたけれど濡れる類
 悶もんと天を仰げば昼の月
 元氣だよ今宵も亡妻の星仰ぐ
 迷路から抜け出て仰ぐ初日の出
 スマホ閉じ仰いでごらん日本晴れ
 仰ぐ師を檸檬を見ると思い出す
 師と仰ぐ方も普通の恐妻家
 師と仰ぐ人の背中の広いこと
 手をつなぐ勇気をくれた冬銀河

楓 楽 義 一歩 義 とーな 正春 耕治 恭昌 五月 朝子 篤 昭 奏子 セツ子 大輪 玄也 富美子 千枝子 理恵 アキ ヨシエ

髪頭慮のおでこをなでてる句会
 ピカピカの顔触れ揃う初句会
 ピカピカの新同人のいい呼名
 お元氣そうおでこピカピカ光ってる
 すり足が磨きをかける能舞台
 よいことがあるようトイレ光らせる
 ピカピカのランドセルもう弾んでる
 ランドセル磨いています母の汗
 コンサート一丸となるペンライト
 ピカピカと光る落葉になってやる
 ピカピカの力でピッカピカ
 成人式親の力が駅伝盛り上げる
 九条をピカピカのまま子と孫に
 信念を貫き光るマララが目
 ピカピカに磨いた鍋で大火傷
 たましいはまだピカピカでございます
 スクワット五回ピカピカでいるために
 ピカピカの新車にもみじマーク貼る
 ピカピカの新しい米のピッカピカ
 ピカピカの餅は仏さま
 ピカピカに磨いて嫁に出す林檎
 妻が怒るとピカピカになる台所
 よく笑いよく動く母LED
 空き店舗にアグネスラムの日焼け顔
 ピカピカに磨いたトイレ使わせぬ

兼題「ピカピカ」 新家 完司 選
 宏子 アキ いさお たもつ 好 洋 武臣 郁夫 セツ子 和夫 シマ子 信子 和夫 日の出 義 扶美代 誠一 たもつ 求芽 朱夏 かずお 美津子 篤 郁夫

嫁が来た椅子のカバーも光ってる
 ピカピカに磨いて姑を待っている
 お隣のツリーうちまで光らせる
 新婚時代はピカピカでした靴
 ピカピカになるまで飲んだ眠ります
 百均とわかつてしまいう光りよう
 ピカピカの鍋だが料理今一つ
 釣銭がピカピカ粋なおもてなし
 ピカピカ廊下今日は何人こけるやら
 渋滞の始まりハザードが光る
 ピカピカのボルシェ渋滞には勝てず
 金メッキ猫も僕も騙される
 ピカピカと輝いてる子私の子

佳
 ノブはピカピカ恋人が来る予感
 ピカピカに磨いて捨てる鍋ヤカン
 おやすみなさいピカピカ光る消防署
 家中を掃除してから旅に出る
 柵を解いて独楽は光り出す

人
 ピカピカに掃除したのに誰も来ぬ
 夜空飛行機無事に行きなさい

天
 鍋の底ピカピカにしてまだ泣いて
 軸
 酔っている間はピッカピカハート

ばっは
 月子
 求芽
 善純
 蘭幸
 といな
 光久
 勝弘
 理恵
 かずお
 和夫
 真理子
 良子
 寿之
 朱夏
 秋の子
 加お里
 哲夫
 大輪
 はこべ
 安土 理恵

句会 燦 燦

12月句会を読む 岩崎 眞里子

気が付けば師走。あたふたと忙しい下界に大寒波の襲来。

地球から悲鳴聞こえる聴診器

来る年の賀状を食べているひつじ

気象も地殻も異変を発し、人間界もSOSを出し続けている。

そんな諸々を「ウンメエ」と食べてくれないだろうか…羊達。

スタートラインみんな勝者の顔をして

勝ったのは女 負けないのも女

言い勝った帽子目深に冬の章

いろんな意味で振り返る師走だから思うスタート時点。人生

勝ち負けじゃない…と思っはいるが、敗者は受け入れ難い。

しかし言い勝った心は、負けたはずの空よりも暗くて寒い。

雨かないや雪やなど炬燵から

のんき者と言われるほどに熟れてきた

作者と読者が思わず掌パッチン出来そうな作品。心の凝りが

解れて、しみじみと川柳に助けられているなあと思う。

大器すぎて窯から出られない息子

のんびりですがしつかり花芽つけている

瞬間、恩息を思い出し吹き出してしまった。でも、健気な子

ども達の明日を応援したくて、今もお話し会を続けている。

仏壇の中にあなたという気配

気分よし天気良好医者へ行く

小さな器に盛ってある平和

私達は巨きな力に守られ死者と共に生きている。三・一一の後

後そう思うようになった。仏壇は入口で受話器でもある。天気

と元氣は繋がっていて、気分のパロメーター。一人で病院に行

ける元氣さを幸せだと思ふ。そんな健気な平和こそ美しい。

宣子

淳司

好

六

アキ

五月

楓

菜

眞澄

美智代

あきこ

哲子

千代

おぼろ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

とほとほと歩くことと煮えてくる
お日様がことと山の秋を織る
ことこととポトフが昔話する
ことことと静かに議案煮詰った
ことこととネズミ親父の一人酒
ことことがぶつぶつになる倦怠期
ことこととあの足音だ今日居留守
七輪の煮豆の蓋は母の声
静けさにことこと響く置時計
新妻のまな板の音四拍子
雨風がことことと終夜眠らせぬ
寒鮒つりふるえながらに待つ釣果
ストーブに居場所を譲る扇風機
寒くとも恋の為ならよいしよする
暑い寒い文句言い言い長寿なり
お喋りな風が風車を回して

久江 玲坊 滋 公惠 重忠 和子 久芽代 義人 野蒜 悦子 美美子 幹啓 たけ代 紀の治 芳光 くにこ

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

国の未来総理信じて良いですか
未来には亡夫が待つていてくれる
願いから祈りになった未来像
九条を変えて未来が焦げ臭い
未来図へ生きる道すじ書いておく
スマホ繰る君の未来は見えてるか
ダンゴ虫未来も丸いままですか
煙ひとすじやがて私も風になる
琴の音と尺八響く古典の日
深夜まで槌音響く町工場
ズシーンと響いて心に残る女でした
秋の夜の盃蟋蟀と響き合う
路地行けば声かけられる声かける
町並の路地に旅人やって来る

半汎 蘭幸 千代美 昭紀 淑子 静風 笑子 白狐 鬼焼 栄恵 房子 慶子 節子 重利 紀美恵 清 龍枝 貴恵 三津子 石花菜 美ツ千 美チ子 道子 美知江

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

緑の下の支えで通す土踏ます
纜は冥土の旅の舌下錠
見栄捨てて以下同文の列にいる
たまゆらの命カルテの下に抱く
途中下車そこで女を置いてくる
下味の付いた話に乗せられる
靴下の穴から独り者の風
口下手が功を奏して出世する
一代で築き社長の遊び下手
生き方に鉄則は無い橋の下
下積みが長くて強い馬の足
下流まで儲け話は伝わらぬ
下町に住みおせっかいにも馴れた
引き算のない私のエンマ帳
一線を引いて話の中に居る

美羽 昇子 久 起世子 次根 智三 よしこ 宏夫 和子 富香 幹子 当代 豊 碧 史子 栄香 比呂子 あゆみ 厚子 歩美 輝恵 敬子 幸子 規代

引き潮がきれいな白にしてくれる
強がりを言いつつ腰が引けている
どこからも引き抜きがない並みの位置
引くことも覚えて波が風いでいる
引き際を逃し未だにピエロ役

千鶴
八重子
孝子
寛

天国を目指して手繰る蜘蛛の糸
欲一つ残り余生の糧にする

人間の五欲を流す結跏趺坐
亡母の歳越えても五欲まだ消えず
欲望の船に乗つては座礁する

屈きそうな所に欲がぶらさがり
ストレスが適度にあつて生きる欲
欲捨てた日から地下足袋軽くなる

欲言えば今の体力卒寿まで
憧れの舞台に立つもセリフ出ず
憧れてみたが所詮は遠花火

誰が何と言おうと僕はサユリスト

南大阪川柳会

津守 柳柳報

国会へ挑戦やめた知事市長
九条を大阪弁に書き直す
反骨の挑戦記す壁の傷

母の味になるまでやってみるレシビ
くたくたで雑巾として浴衣生き
くたくたになつて戻つた旅靴

歌留多
庸多
郁夫

走り終え市民ランナー倒れ込む
浴びる程飲んで騒いで以下余白
今日句会昨日も句会酒続く
くたくたのアベノミクスのくれ選挙
くたくたになるまで聞いた長話
くたくたを集めて走る終電車
美人やつたのに苦労したんやなあ
山頂へ胸突き八丁息あがる
四十年一心不乱働いた
苦汁苦吟鉛筆を折る日のあせり
やるときは七難八苦受けて立つ
食べ残り飢餓に苦しむ人がいる
マラソンの息はずませる向い風
苦も楽も心一つの裏表
真の友苦しい時に来てくれる
被災地の苦しさ思い募金箱
遅れてもいいことあるさ残り福
残業と古い言い訳酒匂う
遅いけど遺産分けには同席で
タサイ服時代おくれと言われてる
遅れても喝采あびてゴールする
沖縄で時間厳守は嫌に釘
一秒も遅れぬ人で肩が凝る
いい恩師遅れた訳を聞いてくれ
母親譲りコンビニでさえ値切る癖
コンビニの明かりが街の道しるべ
コンビニだな息子の声と孫の声
コピーでも持つ人次第光ります

准一
みね
昭枝
千鶴
八重子
孝子
寛

菜摘
ひろ子
倅子
絹子
章子
義泰
イセ
弘子
正治
義雄
純子
保州

和雄
一歩
歌留多
庸多
郁夫

克己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

柳己
柳弘
忠昭
タカ子
柳右子
篤
東風
いさお
勝弘
恭昌
直子
なきさ
実博
ルイ子
正春
シマ子
弘泰
あさ子
更紗
柳伸
昌紀
たもつ
とーな
弘子
志華子
ばっは

高瀬 霜石 選

古書店でイスラム国へ誘われる
じゃんけんで親の介護を回される
国境線引いて夫婦の布団敷き
長生きのおまけにもろた物忘れ
呼び寄せた親が新居になしまない
花婿は八十路資産家子無しとか
あつさり死にたいけれど今日はいや
使つのが大好きな金貯めている
普段着のモラルと余所行きのモラル
退職金持つてはあさん逃げました(奥)五月

正和
蟹郎
あさ子
誠一
葉子
美春日
廣子
久子
義

鴨谷 瑠美子 選

竹割つた性格だつた好きだつた
握手して隙をちよつびり見せておく
溶け合つて春夏秋冬匂の味
どうしたらいいのか竜巻に注意
あの笑顔作り笑いと思えない
いつぱしの詩人気分で踏む落葉
七十年の平和のベース守らねば
玉砂利を踏んだら神の音がする
丸腰で生きて来たから暮られる
引退でやつとわかつた処世術

重利
笑子
森子
勝弘
玄也
朝子
一歩
朋月
一清

佳句地十選 (1月号から)

見清

見清

見清

見清

見清

見清

見清

見清

見清

富柳会(大阪) 吉田 千華報

母ちゃんが夜中にコップ酒ゴクン
 人生の半分うかうか寝てました
 美か醜か情け容赦のない鏡
 秋の天きのうの闇を真つ二つ
 半分は泣く子にあげる猿の夢
 半開きの心へひと押しが欲しい
 遣伝子の半分敵にも味方にも
 振舞が大胆になる試着室
 嘘半分混ぜて介護を丸くする
 ありがとう哀しい事も半分こ
 半分は馬鹿をまじめに演技する
 半分は味方と思う読み違い
 今は昔飢えをしのいだ半分こ
 富田林の美女を根こそぎかつ攫う
 競うても同じ根つ子の俺お前
 盗み読み出来ないカルテ置かれてる
 盗み聞きしている私盗み取り
 すれ違いざま心臓の毛をむしる
 御馳走は無いが振舞う無農薬
 振舞酒はじめ特急あと二級
 端つこの舌が人間裏返す
 貧しさを噛みしめているパンの耳
 切れ端のひとつ真つ赤に自己主張
 端つこで愛を貫く曼殊沙華
 まん中の腐敗端からよく見える
 憎でいい中途半端な愛よりは

月子 希久子 美子 かこ 廣子 朝子 加央里 壽峰 睦子 美代子 暢夫 和子 よりこ 天笑 恵子 登子 千恵 一筒 佳子 はな 寿之 慶子 武人 澄子 日木 喜八郎

目の鱗ストーンと父の平手打ち
 浄土まで歩く仏の掌
 てのひらの慕情ふつつ秋の空
 握手したてのひら遺恨さらり消え
 てのひらの闇をあやしに来る指輪
 てのひらの鶴が命の風を待つ
 てのひらで掏いきれないのはあなた
 てのひらでやんちゃなジジイ泳がせる
 透明なそんな迎りを半分こ
 川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

清 欣之 アキ 高鷺 奏子 よしみ 未知 富子 森子 とも子 雪代 千里 禮子 幸子 青帆 弘充 たけし 左余 輝山 柳歩 芳山 紗季 哲子 孝亮 涼子

霊葉の君の笑顔に癒される
 プロポーズ待っていますと薬指
 薬局と仲良くなつた医者嫌い
 百薬の長が時どき謀反する
 よろよろと歩む人生七曲り
 よろよろとアライドだけは持っている
 心までよろよろすまい好奇心
 よろよろと精神内科ハシゴする
 小数点以下をよろよろ泳いでる
 雪がふるクラゲになって踊りだす
 遠来の友を迎えて雪見酒
 正直に生きて真白き雪の華
 北風が突つ張り雪が来る予感
 川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

草庵 久絵 昌枝 浜丘 幸 ちえこ 澄子 寿代 美智子 博子 あきら ゆき 知恵子 井蛙 則彦 ひとし 京子 きよし 一呑 つとむ 花匠 一湖 隆樹 重虎 美鈴 芳生

紆余曲折平均寿命越えました

詩人にしてくれるヒマワリの迷路

煮え切らぬ男を叱る土用波

痛いところつかれつついつい弱気出る

弱虫の私どなたも疑わず

弱腰の私どらくらりと筋通す

空元氣そこが私の現住所

一番の弱気は僕の中のほく

ちぎれ雲泣きたい姿せぬように

赤い糸染め直したい時もある

喜寿の坂越えて米寿の原迷う

二つ三つ義理欠いたまま除夜の鐘

木枯らしに湯豆腐が笑って主役

明日また渡りいるかや青信号

たくあんにフェロモンもどき樽の味

雑巾になって成仏するタオル

今朝もまた散歩で拝む津軽富士

血圧計高めで焦る脈の音

ふわりふわり着地できない女です

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

それも良し今さら仮面外せない

ふる里の風がこころの棘を抜く

ダントツの美貌人生狂わせた

急な雨迎えに行けば赤のれん

ごぼう抜きダントツよりもかっこよい

いろいろの行き違い見た駅の椅子

行き違い俺は川柳君短歌

吞舟

慕情

小人

小とみ

洋子

柳子

規子

龍馬

初枝

龍人

ふさゑ

花峯

氏加子

一花

霜石

雅城

五楽庵

和香子

一粹報

洋々

無限

凱柳

文香

真理

美恵子

妻子

賞金がダントツツテニス習わせる

真ん丸い地球の中でする戦さ

ダントツの富士も弱みを持つている

逆流をしてみるもよし回遊魚

ダントツの友に二番でくらくいつく

わたしから会釈をすると和む風

ダントツと言うな一周遅れてる

正論を吐いてはねこのひとり酒

それもよし仲間で競う趣味の道

人生の最終章に立っている

独り居て趣味にどっぷり嵌ってる

病んでいる地球リハビリ待っている

それもよし片道だけで行ける旅

それもよし幸せ過ぎて呆けそうだ

焼酎で間に合わせとくそれもよし

失敗も結果良ければそれもよし

のんびりとときみと行きたい紅葉狩り

行き違いあれは別れた僕の子だ

行き違いで途方に暮れる初デート

歴史観隣りの国と行き違う

政治家と庶民の願ひ行き違い

ダントツの酒豪会費の元を取り

ダントツの料理が待つ老母が待つ

ダントツの故郷税が話題まく

行き違い女房が消えたキノコ狩り

それもよしこれもよしかな冬支度

みゆき

天翔

金祥

一瑤

清信

麗

振作

隆浩

地佳平

美佐枝

節子

雅女

行男

とも湖

蟹郎

回春子

圭一郎

茂登子

由美子

毅

昌鼓

秋月

茶人

孝二

重忠

善平

※方言「ねこ」は仲間外れのこと

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

酒癖を知って注ぐなど目で合図

羹に懲りて九条にしがみつく

ひかえめに自慢の孫が口に出る

機密費の遣い道なら秘密です

冗談が失言になる新名刺

腕白の曾孫変身千歳飴

高知川柳社(高知) 小川てるみ報

アベノミクス第三の矢へ向かい風

フウフウの粥がおいしい快復期

法螺少し吹いて話が面白い

アベノミクス風力計が弱くなる

吹く風へ竹のしなりを母はもつ

努力家に廻り道した風が吹く

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒免報

この場から抜けてよいやら悪いやら

家庭的雰囲気かもす人である

陰悪なムード食べてるチワワ犬

ポツナリを毎晩祈り床に就く

信仰心ないが思わず手を合わす

日日祈る明日の目覚めの健やかさ

ハイポーズ美人に写りますように

子に孫に戦無き世をただ祈る

先生もすらすら読めぬ出席簿

久子

信男

美佐子

郁子

順子

桂子

春代

黒兎

正代

圭二

てるみ

三郎

暖

美香

千恵子

すらすらとどこまで生きた訳じやない
自販機がすらすら喋りビール出す
冷凍庫パズルのように詰め込まれ
鍋囲み忘年会の窓曇る
カランカラン特等賞の鐘が鳴る
ポケットに「手を入れるな」と叱られる

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

神様のマリオネットで生きている
花嫁人形ホロホロ泣いたのは昔
受け継いだ母の人形孫に継ぐ
人形と言われた社長役に立つ
子の宝手あかのついたお人形
人形の真似して妻はもの言わぬ
パティシエの夢をこねてる紙粘土
人形もきつとあるのよ好奇心
座蒲団の隅に作法探してる
太古から軌道をまわるほうき星
無作法はごめん笑いでくくり抜け
お節介無用でござる吾が作法
集団の魔力マナーを忘れさす
小笠原流の男くどき方
領海の作法無視するサンゴ漁
茶の作法一つの無駄も無いと知る
フルコースマナー戸惑う君が好き
細やかな作法重ねて来た袱紗
手料理に真心添えておもてなし
辛口の人にケーキは笑が消え
誕生日ケーキが早く嫁けという

美智代 長一 純子 守啓 正子 柳童 桃花 シマ子 廣子 公平 賢子 昭 芳香 篤子 靖子 一步 重信 安代 和代 志津子 典子 萌 美籠 日の出 満寿恵 克己

入刀のケーキへ夢の無限大
チヨコケーキ紛争の地の子を思う
スイーツの魔力お受験パスしたよ
ケーキ切る角度をじつと見張ってる
万札に紐を付けたい年の暮れ
被曝地を去った人達何時戻る
親離れ一人暮らしの夢かなう
子は去るが幼き臓器生きて行く
幸せをいっばい置いて母は去る
男でしようじうじうじと済んだこと
一年は超特急で走り去る
あの人があつてくれたらスツとする
あの人があつた後はいい香
忘却の台詞置き去りにしておんな

川柳塔なら

坊農 柳弘報

朝子 哲矢 ばっは 昌紀 福貴子 隆昭 美世子 満知子 舞夢 直しお 勝弘 舞蹴 柳弘

ノックされ愛の扉は半開き
まっすくに向き合う心開くまで
紅葉から地酒へ脚も上機嫌
水際のトリック素潜りのアヒル
水鳥のように浮かんでサンゴ盗る
よく実る米の値段が気にかかる
夫婦して鴛鴦を見る倦怠期
城の堀栄華の頃の白い鳥
結局は心開いたありがとう
水鳥の悲鳴聞こえる羽根ぶとん
時価は辛い摘む女を持って余し
大根のラインダンスは軒下で
ミニスカよ綺麗な脚よ楽しいよ
閉ざされた心に愛の開けごま
あみだくじ神が脚本書き変える
たとう紙を開くと母が匂い出す
時価と言う料理に酔いがまわらない
寒風に飛ぶ水鳥という定め
時価と言うだけで怯えている財布
握り拳ひらいてごらん楽になる

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

久子 美紗子 美緒子 純子 哲男 稠民 寿之 ふりこ 征子 柳弘 勝弘 惠美子 恭昌 修 ダン吉 美智子 克己 怜依子 完次 堅坊 朝子 成子 洋子 辰雄 真理子 良一 弥生

晩年の趣味で余白を埋めている
花まるをもらうと年も忘れまます
句作りの生きてる証し惚け防止
臘月眺めていつか気もおぼろ
不機嫌を直す頓服薬の孫
この次と言っている間にもう師走

そこそこにしておく火傷せぬように
負うた子に抱かれてくぐる診療所
接種後に待合室の風邪もらう
一冊の手帳師と生き友と生き

菜園は四季折々の味くれる
王地山心も紅葉食事宴
漬物を娘子や孫持ち帰り
心にも節玉欲しい時がある

最後にはどたんばと言う武器がある
今無事に生かされている明日も又

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

出稼ぎの父ちゃん帰る日が近い
破れても地の一滴の塩になる
又来いと手を振る父の顔うかぶ

鼻歌のリユックと歩く冬日和
別れ方が実にスマートなれてはる
ちぎれる程手を振ってきたのは二歳

うきうきは笠置しず子が似合ってる
廻るすしうきうきとする新メニュー
靴音で夫のうきうきわかる妻

麦を踏む男ミレーの絵を飾る
生きていれば別れもあるが出会いある
うきうきが顔に出ている眼が笑う

解散だ〇〇党より電話来る
オキナワが変わり日本も変わります
年甲斐もなく嵐五人に胸はずむ

卒業で皆それぞれの別れ道
うきうきと乗った話が畏だった

父さんがうきうきしてるクラス会
お互いの為と納得して別れ
踏みこんだ話になると逃げを打つ

祝鯛背鰭に光る化粧塩
故国の土踏ませるまでと拉致家族
少しでもポーンナス出たらお買い物

サンタから予約受付票届く
蟻んこを踏んだりしない象の脚
別れ道どちらとも言わぬさようなら

ロース川柳会(兵庫) 亀岡 哲子報

仕込み唄酒蔵の窓もれてくる
又逢える希望を抱いてごきげんよう
はやぶさ2あなたの帰りの鳴る時計

待ち合わせすみれの花の鳴る時計
ため息をついてプライド呼び起こす
希望の星などと言われて今がある

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

外人も驚くほどの和の文化
おかげさま自然に口に出る齡
ちよつと待てあれは息子の声じゃない

平凡な手では勝てないアマ棋戦
スピードを上げて一年あつと過ぎ
川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

お賽銭ゴール近いとついはずむ
持て余す千羽鶴だが捨て切れず
天国へ閻魔の留守に駆け込もう

もう会えぬ背筋通ったスターたち
人生のゴールは神のさじ加減
耕した穴に昨日を全部埋め

百歳へ整骨院がすしづめだ
もてなくてせつせと責ぎ捨てられた
逃げ水のようにゴールが見え隠れ

赤い糸引つ張り合つてゴールイン
専攻は蓄財料ですあの議員
ゴールインこんな小さな箱の中

学校へ通つてました寝てました
ゴールには美味しいテキが待っている
ゴールまで自分の足で歩きたい

もう今や世界をリードする和食
失敗を自分耕す鉄とする
耕せば刈入れに来る消費税

耕した土地も泣いてる原発禍
農耕の苦勞も知つた疎開先
耕されて土地が大きく息を吐く

文句なく世界で通るすしうどん
問題は正義を主張する戦
飲ませるとハットトリックする夫

我が家でのゴールキーパー私です
回転木馬ゴール地点は見えぬまま
寝たきりまで耕しに来る選挙戦

金婚式二人元気で迎えられ
もう二度と戦争せずに住みたいな
ありがとういっばい言つて幕引く気

学校のうまい給食休まない
少子化で母校が消えてゆく悲哀

憲 光

篤子

みつこ

舞夢

時雄

好

誠一

としお

ばっは

月子

日の出

憲彦

和夫

敏治

ひろ子

清晋

かりん

健吾

ゆみ子

愿

八千代

俣子

清

世紀子

唯教

五月

さくら

玄也

主婦のくちこみで販路が耕され 天笑

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

湯豆腐がポックリ浮いてはしゃぎだす
一寸だけ塩をプラスで味冴える
運勢の判断すべてプラスプラスどり
燥ぐまい心理学者が傍にいる
陽の射さぬデバ地下で古里を買う
デバトだからブランドバック手に持てる
線香の煙がゆらく気のながれ
プラス思考あきれるほどの脳天気
再生紙きつぱり過去は語らない
新しい暦に無事を祈ってる
素晴らしい朝だはしゃいで旅に出る
そっくりと譲り受けたが負の遺産
くじ引きで鐘がおまけの大当り
六年後生きる楽しみ一つ増え
わがままに生きよう空が青いから
少しならプラスになると言うお酒
かがめてた腰そっくり返る当選後
健さんを真似て寡黙の一時
菊薫る秋にノール物理賞
雑踏で確かに聞いた亡母の声
年賀状犬の名前も足して書く
年末は第九聞きます演歌好き
二枚目の物まねをする三枚目
一日をプラス思考でのはのと
へべれけに酔うて嫌いだ孤独感
ミニ菜園そっくり虫の餌となり

奮水 千代子 美浪 咲貴 廣子 晶子 初音 洋子 野鶴 雪菜 幸香 つな子 よしひさ 修平 和子 五月 りこ 健二 野薫 ひとみ キヨミ 正和 茂 ヨシエ 靖鬼 純

デバートの包み両手に母むすめ
デバートの四季は一足先に来る
角とれて個性無くした花の芯
ホステスが妻とそっくり酔いが醒め
いい話とろりと溶けて夢の中
利子つけてそっくり返す口喧嘩
路地裏にはしゃぎまわった跡がある
呱呱の声パバパそっくりと渡される

長柳 会(大阪) 坂上 淳司報

破鍋に綴蓋添えて金婚譜
風呂掃除パバ出張で誰がする
忘れられルンバが埃かぶってる
四十の命と言われ古希も過ぎ
好きな孫一筆添えてアイラブユー
風見鶏当落読んでお引越し
もみじの葉添えた料理を目で食べる
一行の元氣ですかに句も添える
再婚の相手が遺産まき上げる
りハビりに心添わせて手は貸さず
添え書きとあなどってると大目玉
追伸に食事気遣う母の文
ロボットが残した隅を掃除する
熱弁後雁首揃え一票を
窓を拭く心の曇り取れるまで
一品を添えて和解のサイン出す

耕治 歌留多 美龍 祐康 見清 哲男 宏造 かずお 淳司 もこ 正子 靖博 マサ 修 幸子 弘光 正美 孝代 篤彦 隆博 克三 久美子 友子 純宏

川柳同友会みらい(鳥取) 吉田 陽子報

平和呆けイスラム国へ往くという
バイキング品良く食べるものと知る
追い込まれ真面目に寒い芸をする
芸事を義母に習って溝埋まり
ピカソの絵よくわからぬが惹きつける
仕事ひとすじ芸に無縁の父に似る
年老いて口やかましい芸をする
芸の道極める顔の輝けり
かくし芸意外な顔を晒しだす
母さんはこと指された席高い
部下だつて上司戴りたい時もある
おにぎりが固くふわつと結べない
じいちゃん和将棋を指して機嫌とる
秋の空スポーツせよと背をたたたく
やつと庭の花思い出せお茶うまい
ホームラン夢見て陰で努力する
同情を思いやりだと勘違い
蛇口いっぱい開けて流した今日のウツ
ブランコを漕ぐ嫌なこと振り落とす
元氣げんきゲートボールは口で打つ
団体の中では諾としか言えぬ
深呼吸したいと猫が出てしまふ
猿よりも少し上手な芸をする

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

頭金初任給から積立てる
身支度を整えヨッシャと気合いれ
揺れて居る黄色いハンカチ健さん!
誉められた事が一度もない毛虫

和之 陽子 真帆 真理 あゆみ 信子 勢津子 和代 安子 菜美 由里 みどり 美恵子 章子 惠美代 嘉子 華蓮 敦子 一眸 遊子 公弘 英旺 郁子 幹治 肇

優柔不断だからゆつくり待つとする
誉められて咲かせましたよ青いバラ
わざと誉めていると子供はお見通し
支度する前に季節が来てしまふ
靖国へ戦犯誉めに行く総理

転ぶまいところに襷かけておく
五大堂力自慢の晴舞台
風になる準備すっかり整える

隣国の中韓国は速きさま
今日のことオリオンにだけ誉められる
たつぷりと冬に備えて体脂肪

両隣りマドンナが居る古稀の宴
失投は得意の球のときに出る
信号を誰も誉めないけどまもる

冬支度出窓にシクラメンを置く
お元氣と誉められ年寄りと氣付く
ひと言が多くていつも浮いている

夫婦喧嘩だからだからと暴かれる
パチパチと木の実を踏んで図書館へ
再びのユズルの舞に酔いしれる

十二月自分の歩幅忘れそう
用意万端終えてゆつたり除夜の鐘
ローカル線目もくつろいでいる車窓

マララさん命懸けての平和賞
誉められた記憶辿れば母恋し
お元氣と氣づく安堵の隣家の灯

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

長すぎる話に何か裏がある 泰子

志忘れずるする生きている
忘れたい古傷だけは忘れたい
忘れたはならぬ九条守り抜く
おぼちゃんの長い話に立ちくらみ
忘年会どこかで我をおき忘れ

物忘れ歳に罪着せ笑い合う
物忘れ在庫のすべてひねり出す
飽きもせずけんかしながらい道
だんまりの長さにもノが見えてきた

反抗期矛盾の口が吠えている
禁酒をすすめる酒飲みのだクター
まだ妻にすべて晒せぬ理由がある
大掃除アヘアヘアへと終い酒

年の瀬にうろたえてやる総選挙
晴天を無駄にはしない布団干す
やんわりと急所はずさぬ鬼コーチ
高島田今日はお前が主役です

一足す二三にはならない時もある
吊し柿渋なめにくる夜の霧
どんぐりがやんわり冠るベレー帽
袋さげポイント稼ぐ主婦の知恵

脳の嬉し記憶だけ詰める
突き詰すちよつとはかすも生きる知恵
落ち着いて早やれなとできぬこと
我妻に理屈詰めても勝ち目なし

客の尻四十年も押ししてきた
開くまで夢と期待の袋とじ

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

みちる 勇太朗 一幸 あや乃 薫 克衛 やすの 敬子

情報をつっぱい詰めて物忘れ
年二回妹から来るお小遣い
やんわりとプラス思考で生きている
どんぐりころり明日のいのちは風まかせ

テロどもが笑い袋に穴あける
ストレスを酒で薄めて数値上げ
金持にお金集まる世の習い
未来まで生きるつもり水を飲む

みとどけたい五輪はやぶさ帰還まで
欲捨てたとたんに余生日本晴
針のない時計男の座標軸
やんわりと論す言葉に誠意込め

餓別に手作り袋くれた友
九回の裏を残してある余生
誉め乍らやんわり叱る親ごころ
はやぶさの軌道投入に涙する

少子化になって虐待増えている
あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

激論を避けてしばらく猫になる
猫みたいヒラリヒラリと身をかわす
人間で良かった笑うこと出来て
ドラえもんと呼ばれています家の猫

一本の道ふり返る蟻でいる
まだ蟻が己が力を知らぬまま
猫の恋今夜もひよいと出かけます
人間に利用される神仏

投票所一票持った蟻の列
学歴とローン返済共にあり

和夫 ルイ子 志華子 直樹 修 縣 笹 たもつ 洋志 榮子 義昭 柳弘 千恵子 集一 高志 倫子 堅坊

実 一歩 公平 かずお 朝子 賢子 野鶴 弘委智 満作 五月 弘風 美智子 正 弘泰 克己 いさお あさ子

人間へしつべ返しの温暖化
ドラッグは一度使うと蟻地獄

万物が人間用と思うエゴ

子どもには銃より本をマララさん

塰の上孤高な猫の無表情

働いて働いて働いてきた

孔孟の国と争いごと多し

野党負ければ増税の蟻地獄

妹とケンカをしたいひとりっ子

総選挙経済だけで勝ちに行く

九条が活きて争い無き平和

人間の叡智で地球再生を

人間に成れず尻尾が付いている

誰が指示人間魚雷許せない

竜宮で赤い珊瑚が泣いている

究極の人間性をみる介護

一番うまいとこ食べるのは子猫

身の内で鬼と仏がよくもめる

人間は油断ならぬと薔薇の棘

力あわせる蟻が教えてくれました

論争に勝てぬ輩が武器を持つ

たましいを持つ人間よしやんとせい

猫舌が土鍋の底を拗つてる

少しずつ老いの匂いをさせる猫

夫婦喧嘩猫のとり合いして終る

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

信じよう私に残る力こぶ

簡単に過酷な答出す鏡

花笑

康信

篤

敏子

秀夫

勝弘

哲男

祥昭

とーな

一文

壽峰

克己

廣子

大輔

一志

穩夫

シマ子

朝子

堅坊

美花

信二

たもつ

信子

瑠美子

扶美代

ひとみ

いわゑ

黒の足袋着物姿の亡父思う
金髪が白足袋はいて晴姿

眩くと孤独の淵が深くなる

大夕日今日の眩き持ち越さず

ジグザグもトラック野郎突つ走る

何もかも銚子付いてるあの笑顔

ジグザグの国境線に血の系譜

ジグザグでよろし苦労もしてみたい

陰日なたなく働いた足袋のシワ

眩いて女は角を丸くする

あちてコンこちいてコン酔っちゃった

寿命ある限り次のこと次の年

地下足袋で大地踏みしめ農作業

小包みの隙間にちよつと親心

休刊日朝から調子くずされる

ジグザグに歩いた跡のある日記

ジグザグになつても切れぬ家族愛

いい風だ踏み出しても決めてみる

何事も体の調子みて決めてみる

向上をまだ追い求め誕生日

安反反対ジグザグデモを思い出す

まだ若いと張り切りすぎて肉離れ

ジグザグに縫い繕つて春を待つ

ジグザグを許してやれぬ通学路

今に見る反骨心が眩いた

都合いい事だけ聴いて和む老母

ジグザグな小道へ挑むどっこいしよ

行く年を労る人肌の爛で
縛られて候男の葉指

光子

みよし

キヨミ

淑子

紀華

直子

忠

恭子

美籠

勝弘

求芽

りこ

わこ

宏造

武彦

洋次郎

千賀子

利子

文香

盛夫

茂

千代

美津子

一徳

弘子

光久

秋果

迪

誰も居ぬ眩きやめて怒鳴つてる
三年日記残り一年まだ書ける

その調子その調子だとおだてられ

前に前あともどりせず前に前

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

友は後50年間生きますと

組分けが嫌いで宙に浮いている

私の立場があつて口つむる

渋滞で会議に遅刻それは無い

ひと波乱ありそう境界の杭打ち

スカイツリー晴れのち雨で霧の中

雨漏りを直した夜につむじ風

吹き出した汗で焦りが隠せない

はじかれてコネの仕組を知る人事

焦るなよ雪が消えたら春がくる

雨が降る残り時間が減つてゆく

あの世まで企画してくれバスツアー

焦るほど算盤の指もつれだす

太陽の波乱津波が押し寄せる

組を分け競いあうのも美しい

無心なり取り組んでいる柳のうた

ふいの客焦る心でおもてなし

さすが敵急所狙われ焦ります

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

門松のない正月か災害地

マツクイに耐えて老松そびえてる

世代越え貧相になる松飾り

邦男

豊子

美香

伯備

茶子報

咲和

孔美子

和子

弘子

実満

すみれ

恒

鈴

いさお

螢

完司

照彦

蟹郎

小鹿

富久江

かおる

みさ子

満

照彦報

由紀子

鬼一

康子

陽が沈む明日の始まり告げるため
此の一枚日めくりはがし除夜の鐘
酒を飲みながらコトリと終りたい
免許更新終えた米寿の誕生日
おせち終え紅白終えて除夜の鐘
どっしりと農業祭の土手かぼちゃ
どっしりと七億抱いた夢をかう
血税の上にとっしり永田町

どっしりと尻落ちて着けて長電話
どっしりと腰の重たい嫁に鞭
ハイハイもイエスとノーがあるようだ
ハイハイそこまで喧嘩両成敗
ハイハイと明るい返事妻ご機嫌
ハイハイをしないですぐに立つ子供
ハイハイで目指すゴールは母の膝
連れは留守きつくり腰の四つん這い
来客にハイハイいよいよ手間を掛け
もう終えてもいいあの女に会えた
どっしりと構えて山の如し妻

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

大仏も辞書手のひらに中国語
外人に道を問われて助けよぶ
日本列島外人さんのお通りだ
いただきますごちそうさまは基本です
余りにも礼儀正しいのが不安
蟹せせる時に礼儀は無視をする
礼で始まり礼儀で終わるおもてなし
一日一度妻に言いましょありがとう

次男 照子
日出子 照二
完司 舞夢
重忠 満作
醉芙蓉 千歩
石花菜 希久子
風露 理恵
英江 捷也
萩江 集一
紀美恵 善之
瑞子 すみ子
龍枝 げんえい
智恵子 日の出
けいこ 志華子
玲坊 雅尚
雄大 好文
祐子 美籠
野蒜 靖鬼
照彦 晶子
照彦 淑子

ライバルの目の鋭さよ試合の日
友達すべてライバルだった青春讃
ライバルが転けた私も転けている
ライバルの背中に書いてある不屈
恋はもう過ぎたライバル好きになる
友情で埋めるライバルとの溝だ
マイペースだからライバルと
ライバルの笑みに負けん気炎えあがる
老いたれば男が生きてきた証
刃こぼれは男が差してきた証
日本の空赤い光が差して来た
もうちょっとと戦う冬の朝の床
妻モミジ僕はグルメで同じ場所
誰とでも仲良くなれる赤いバラ
沈黙は金なり耳は立てておく

川柳さんだ(兵庫)

田中

童子報

車には保険のための下戸を乗せ
遠慮すりゃまじで酒出ぬ下戸の家
酔えそんで酔えない下戸のするお酌
離れずに添うてくれる影法師
妻も子も俺の味方と早がてん
母だけが最後に味方してくれる
ヒーローが正義の味方だった頃
敵味方分けた時から軋みだす
ふれあえば同じ傷持つ冬薔薇
命一つずつと味方でいて欲しい
味方まで欺いていた内蔵助
引き潮に残った味方ほんまもん

照子 障害も味方を友にピアニスト
浩二 少子化でサンタが二人やってきた
舞夢 こういうのほしかったのと少しウソ
満作 正直な鏡に本音握られる
千歩 握られてプラトニックに火をつける
希久子 この憲法ありてきばきものが言え
理恵 老人会テキパキしてはいけません
捷也 てきばきとし過ぎで敵も多々持つ
集一 返事だけてきばきしてらうちの人
善之 てきばきと振り舞う嫁にただ感謝
すみ子 遣り繰りに惹無いのが妻の才
げんえい 大晦日家族動かす母の指
日の出 てきばきと働く人に恋こがれ
志華子 失望の中に埋もれている希望
雅尚 馬駆けて落馬すんぜん年の暮
好文 母老いて繋ぐ子の手が亡夫に似る
美籠 杉玉を吊して新酒大手打ち
靖鬼 牛年を税の一字で締めくくる
晶子 かなりサバ読んだ遺影が笑つてる
淑子 ひとり身を忘れルンルン米を研ぐ
隆 窓の外あんなに光る未来です

京都塔の会

榎本 宏子報

年毎に私の価下落する
夫には紅葉一葉の押し花を
千金の価あふれる朱雀庭
爺ちゃんは眼がねずらして株価みる
宣子 シマ子
妙子 順子

年代ものの私の時価は上がり気味
 思い出はふる里にまだ置いたまま
 やはり古稀スタミナ切れの音がする
 スタミナは老いてゆく程気力出る
 健さんに愛の価を教えられ
 信頼を置けば溶け出すわだかまり
 京料理味わいながら箸を置く
 無人駅に置いてきました恋ひとつ
 ひと呼吸置いたイエスが眠らせぬ
 失った時間に夢を置いてきた
 愛の字を粉末にして飲んでます
 植えつけを済んで寛くさくら草
 座禪からまずほ心のスタミナを
 エコライフ暮らしが狂う物価高
 ひと呼吸置いて買わずに済みました
 物置きは幼き日々のおもちゃ箱
 秋の夜が更けるコトトリとベンを置く
 語彙貧し錦秋の京うたうには
 森を飾る赤い実リスの置き忘れ
 使いたいスタミナ気力が邪魔をする
 置土産それは荷物となつて
 スタミナが切れて欠伸がひとつ出る
 展示までスタミナ持続させる菊
 散髪は犬ボクパバと価格順
 自由席ハンカチ置いて予約する
 招き猫置いて頑張る三代目
 紅葉に染まってみたい胸の中
 言わずとも態度に出ます人の価値
 好きだからスタミナ全部さしあげる

まごころの価は論吉も手が出ない
岩美川柳会(鳥取)
 胃の中をかき回されて異常なし
 検査する度ごとカルテ厚くなる
 ボケットの検査何時でもご勝手に
 ざまあみろ知能検査は秀だった
 生きている万物毒を隠し持つ
 添加物毒も混ざってちと旨い
 魅力です毒気ちよつぱり持つお人
 口軽く腰が重くて嫌われる
 重い日も軽い日もある靴を履く
 責任の重さ感じる孫の守
 真実を知っているから気が重い
 重くてもお宝くれりや持ち帰る
 刃物より言葉で刺した重い罪
 毒舌の裏にぬくみを抱えている
 多数決仁義も絡む重い挙手
 それなりの器に頼む重い役

美智代
 蟹郎
 重忠
 幸安
 一粹
 菖子
 敏子
 天翔
 圭一郎
 一瑤
 節子
 たぬ
 清帆
 茶子
 雅女
 弘子
 美恵子

反省は素直にするが同じ轍
 反省の海で私は溺れそう
 仏壇に向つて今日の願ひ事
 高齢者恋をするのも命がけ
 新年にでつかい夢をジャンボくじ
 豪気者惜しまれて逝く寒い朝
 惜しまれる人程先に仏様
 胸を打つマララの叫び胸を打つ
 阿弥陀様聞いたふりして澄ましてる
 思い出のなかに生きてるだけでいい
 補助力を外し覚悟の独り立ち
 子や孫には出費惜しまぬ里の母
 咲いたとて田んぼのかげの彼岸花
 捲れない指へ救いの唾を差す
 一円が足りず自販機そつぽ向く
 はやぶさに夢を託して待つ地球
 終章を飾る言葉はありがとう

浩司
 弘子
 敏義
 順子
 武臣
 洋勤
 盛夫
 和宏
 文香
 利子
 夏子
 和郎
 光久
 美恵子
 武彦

六甲川柳会(兵庫)
 言葉足らずを補っている笑顔
 お相手に不足はないと受けて立つ
 はずかしい二円不足の付箋付き
 ボケットで不足顧する万歩計
 足を知る心になれば不足なし
 花落とす不足は言わずに寒椿
 反省は山ほどすれどすぐ忘れ
 反省を強いる上司が奢る酒

市坪
武臣報

八尾市民川柳会(大阪)
 ちっけな釘一本にある矜持
 ゲノムから社会が変わり人変わる
 逆らつた父の墓標に残る悔い
 そろそろと暮れなすむころこの命
 托鉢も小走りになる十二月
 母となる覚悟まあるく爪を切る
 後悔の真ん中辺は結び目か
 愛の結び目時どきちよつと弛めま
 盃に月を落として一気飲み
 マジシャンは指先だけで煙に巻く

後悔を重ね人間老いの嵩
結び目の向こう命の芽生え知る
まっ白な未来を持つている卵

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

ときめいた頃の若さが今ほしい
奉仕とは喜怒哀楽をすててから
歴史ある学校今は声もなく
人並に生きたつもりの出納簿
十字路で受けた東風また迷う
台風の爪痕悲し乗り越える
山彦の余韻残した夕茜
分り合う酸いも甘いも同世代
鮮やかな引際世間を丸く生き

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

難儀やな人の心という扉
拗ねた児の凍てつく心開かせる
展開を大きく変えたワンカップ
素敵な幕開けたい暮れの腕奮う
挫折した子が開かれた母の鈴
とほけ役客席沸かす漫才師
本心を悟られまいととほけてる
空気読みとほける仕草しておこう
後悔を繰り返し人丸くなる
ごめんねが言えずちくはく溜めてゆく
悔しさを励みに変えて歩を進め
後悔はいつでも一夜干しにする
この道でまだ後悔を重ねてる

寿之 慶子 欣之 安子 好榮 澄子 はるみ 恵美子 英子 かつ子 ちよえ 昌 大輪 寿子 日出男 紀久子 富美子 佐一 ほか 和香 なる子 小雪 秀子 あきこ 徑子

リセットの効かない齢が恨めしい
リセットをしたら私もまだ動く
何もかもリセットされて真っ白に
リセットしよう心の傷を癒すため
五体満足リセットなどはせぬように
その時はその時なりのリセットを
変心願望リセットボタン押し違え

きやらほく川柳会(鳥取)政岡日枝子報

闊魔さまにも持ち味の笑顔むけ
親鸞会いねむりばかり目があかぬ
補聴器をまたもや落としいずこやら
赤毛のアンまた読んでいる九十歳
色づいたもみじに淋し色もつく
大山のもみじ絶景満喫す
加齢なき亡夫の笑顔に送られて
風の声澄んだ空気に伝えられ
リフトから紅葉の谷間下に見る
大山の引き立て役か花すすき
五七五の心を見抜く佛の目
でんとして腹をすえよと男道
ころころと手口をかえる口車
今いざこ嶮に残る山紅葉
あの世よりこの世がいいと神だのみ
神の手に守られ裸足のような旅
早く来い蜜月望む日中韓
木のなかま紅葉する木もしない木も
ほろほろと萩つぎつぎと咲くために

准一 保州 まさみ めぐみ 英子 克子 紀子 美佐子 かね子 登美枝 ゆき あやこ ひろこ ゆめこ 初枝 寿々子 正二 幹啓 恵子 卓雄 宏之 瑞枝 ひろし 公一 千代

先走る杖でころんではかりいる
継ぎ接ぎの袋に詰める忍と耐

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

沖繩の県民燃えた十二月
Uターン出来たらしたい十二月
遅なつてゴメンと酒臭いサンタ
十二月止めた時計が走り出す
子ひつじの足音近し十二月
日記帳計画だけで年が暮れ
年末の整理整頓脳の中
立ち話のおばちゃん減つてきた師走
今日冬至アテはカボチャと決めて
一年の計はこれから風まかせ
十二月街のどこかで非常ベル
子の進路親の思いと子の思い
豹柄でうどん啜っている気品
気高さの後押しされて外に出る
気品ある友もチラホラ金の欲
かすみ草の気品主役を輝かす
上品の仮面はがれたクラス会

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

点滴の老母見守る夜のしじま
要求は蹴られて逆に人減らし
左遷蹴り過去へ辞表叩きつけ
心の傷一生癒える事はない
古傷に触れず昔の話聴く

日枝子 紀の治 一步 美代子 六点 キーキー いさお 悦子 一文 勝弘 フジ子 瑠美子 喜代子 光男 扶美代 清之 大子 絹枝 忠央 仁 ルイ子 さち子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日)13時締切 素顔・夕刊・嵐・自由吟	寝屋川市立産業振興センター 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	15日(日)14時締切 甲乙・刻む 席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シユラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0037 藤井寺市津堂1-7-25 太田扶美代
川柳塔 わかやま 吟社	15日(日)14時10分締切 兼題=我流・肉・ゆるキャラ 課題吟=喜	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 泉原道夫
豊中 もくせい 川柳会	16日(月)13時50分締切 気配・逃げる・たぶん・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火)13時30分締切 風邪・ランク・着る・いろいろ 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田 川柳会	21日(土)12時30分開場 策・曲がる・白・こっそり	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	21日(土)17時締切 煽る・おやおや・愛嬌	弘前市桶屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦
はびきの 市川柳 川柳会	22日(日)14時締切 天神・膝・手加減・マニュアル	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)13時30分開場 第二幕・写メール・あの日	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	23日(月)18時開場 プレーキ・知恵・歩く やかましい	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	23日(月)14時締切 テンポ・さらり・力	京都ハートピア 地下鉄九太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳塔 すみよし	28日(土)14時15分締切 筋(連記)・明るい・くらくら	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂燕子
和歌山 三幸会 川柳会	28日(土)12時30分開場 トリック・今更・鏡	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛

★日時・会場などに変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	6日(金) 14時締切 舞う・民・時価	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	7日(土) 14時締切 階段・隠す・きわどい・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	7日(土) 14時10分締切 虹・尽くす・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土) 14時締切 きっぱり・燠(おき)・戻す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え社	7日(土) 13時45分締切 顔・動く・青・ロボット	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 仕業・苔・許す・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 合格・越す・こそこそ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「ブレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 謎・巻く・しかし	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 飛ぶ・水・しんしん・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 出る・男・理想・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	14日(土) 14時締切 壊す・線・大人	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 さ　か　い	14日(土) 13時開場 ときたま・コンビニ 折り句=さほう	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳塔 打　吹	14日(土) 13時締切 白・動く・のびのび	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

柳界展望

兵庫県議会議長賞

尾崎 一子
宿る子の命を繋ぐ血の鼓動

兵庫県川柳祭西脇市実行委員会賞

★第7回ごんぎつねの郷
全国誌上川柳大会には八〇一名の参加があった。
本社同人成績。

半田市観光協会賞

牧野 芳光
さよならの語尾にカモメがついてくる

中日新聞社賞

高瀬 霜石
映画館出るたびぼくは鳥になる

中日新聞社賞

籠島 恵子
鳥だった事で決着ついている

秀句

小谷 小雪
だんだんと森に馴染んでゆく巣箱

★兵庫県川柳祭西脇は、12月7日、西脇市民会館で開催。出席者215名。事前投句者476名。同人の成績は次の通り。

◇「保護司退任記念川柳句集―歩を妻に」、著者横山捷也。四六判81頁。私家版。

▽催 し△

○木津川計の『語る落語』東京紀尾井小ホール、7月12日(日)PM2時。連絡先055・48・3574

○木津川計の『一番町皿屋敷』異聞』初演。芦屋ルナホール、4月25日(土)PM2時。連絡先0797・35・0700

▽新誌友紹介△

福山市 藤後 卓也
紹介者 小島 蘭幸

茨木市 弘津秋の子
紹介者 小島 蘭幸

福山市 掛江 一弘
紹介者 小島 蘭幸

神戸市 上田 和宏
紹介者 山口 光久

大阪市 あまのとな
紹介者 居谷真理子
木本 朱夏

▽お詫びして訂正△
12月号P1上段1行目
情景の路↓憧憬の路。P

8下段4行目、津守志華
子↓津村。P80上段12行
目、阿保なテレビ見ている私もつとアホ↓阿呆。

▼1月号P43上段11行目
玄也さんも言う↓直樹さん。P58下段1行目、坂口のり子↓坂上のり子。P93下段、予告4月号お

知らせ↓削除。P156ひとこと欄、清水秀旺↓英旺。
常任理事会会11月7日(水)
①同人・誌友拡大②第21回川柳塔まつり、選者など③大阪川柳大会報告④定例確認事項⑤各部報告
次回11月25日(木)AM10時

ふあうすと1000号記念 2015ふあうすと川柳大会
日時 4月12日(日) 午前10時開場
場所 兵庫県民会館 9Fホール
TEL 078-321-2131

宿題 (欠席投句拝辞)

「刻 む」 村上 水筆 選
「スマイル」 徳永 怜子 選
「中 心」 瀬川 伸子 選
「高 い」 大野 登志子 選
「感じる」 上野 悦子 選
「世 界」 宮崎 ただし 選
「自由吟」 赤井 花城 謝選

事前投句 締切 業書に1句 出席者に限る

投句先 〒654-0151 神戸市須磨区北落合4-28-12
出句締切 12時 (各題2句)

会費 4000円 (100号記念誌・記念品・発表誌呈)
(昼食は各自でお済ませください)

懇親会 5000円 17時、当日受付
主催 ふあうすと川柳社

寒中御見舞申し上げます

宮 西 弥 生

柳誌「川柳塔みちのく」

一〇〇号記念誌上川柳大会

課題 「りんご」

選者 小島 蘭 幸 赤松 ますみ

丸山 あずさ 森中 恵美子

西出 楓 楽 江畑 哲男

徳永 政二 高瀬 霜 石

投句方法 誌上大会用紙または便箋等に郵便

番号・住所・氏名・電話番号を明記

投句料 1000円(切手不可)

締切 4月30日(当日消印有効)

賞

上位30位まで青森県産品を贈呈。ま

た各選者の特選句の中から、川柳塔

みちのく創設者・波多野五楽庵が大

賞1名、準大賞2名を選びます。

発表先 問合せ 〒036-8275 弘前市城西1-3-10

川柳塔みちのく事務局 稲見則彦宛

電話 0172-3618605

寒中お見舞申し上げます

熊本川柳会

高野 宵草

(故) 永田 俊子

杉野 羅天

岩切 康子

寒中お見舞い申し上げます

八尾市民川柳会

会長 土田 欣之 会員 一同

編集後記

鬼遊川柳句集」は、没後に編まれた。「温故知新」をご愛読ください。

★飲む会のハガキは著で裏返す 薫風

★「あの世から密書が届く出かけねば」の句を遺して、谷垣史好さんが亡くなられたのは平成三年一〇月二十六日。享年六八。「温故知新」は今号から史好さんから高杉鬼遊さんに替わります。平成一二年一二月初め、西出楓楽さんとポルトガルから帰国したところ、鬼遊さんが七日に亡くなられていた。享年八一。★鬼遊さんは温和で決して偉ぶらず庶民的な方だった。鬼遊さんの背骨は、反骨の精神と巧まざるユーモアで出来ている。「今回の句集はわが意にあらざる。句主不詳読み人知らずの一句が後人に口誦されれば過分の榮にして、これに優るものなし」と遺言。「高杉

★一月五日NHKテレビで「ネクストワールド」寿命はどこまで延びるか」を観た。二〇四五年には平均寿命は一〇〇歳になるといふ。長寿遺伝子の存在が解つたため、若さを保つたまま歳をとることが可能になったとか。しかし、単純に喜んでいいのだろうか。

★人はこの世に生を享けた時から、老いに向かつて歩み始める。栄耀栄華を極めた人にも、貧しく地を這つた人にも、死は確実に平等に訪れる。ところが三〇年後にはお金のある人は若さを、寿命を買うことが可能になる。寿命まで格差に支配される社会が恐ろしい。

★「こんにちはは新同人です」には、一〇人の方が参加してくださった。私にも先輩の背中が眩しく大きく見えた初心の時代があった。新同人の皆さん、皆さんの初々しいお力をお貸しください。そしてぜひ本社句会にもご参加ください。お待ちしています。

(朱夏)

□「波屋書房」のブックカバーは、いまでも大阪の夢二、「スジカズ」・宇崎純一氏の「辻馬車」の絵で飾られている。ナン

文太さんのこと

昨年11月28日、俳優の菅原文太さんが亡くなった。文太さんの奥さんから大宰府天満宮で密葬をするので、すぐ来てほしいと電話があった。私の住む山鹿から車で一時間弱とはいへ、前日は夜更かしをしていたので慌てて支度をした。昼過ぎに東京から柩が到着。十二〜三人の静かな密葬であったが、大学の後輩のかみさんが涙一滴も見せず、爽やかなものだった。

文太さんはたびたび山鹿を訪れてくれた。十年前、大親分と慕われた日ハム大沢監督の紹介であった。元来、政治屋と芸能人は好きでなかったが、文太さんだけは親しくお付き合いを頂いた。

「仁義なき戦い」の大スター文太というより、晩年は有機農業に取り組み、反戦、反原発を訴え、日本の将来を憂えていた文太さん。落花は枝に還らず。惜しい男を亡くした。

合掌 (三谷 直男)



川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「学校」(2月15日締切)

4月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B A

--	--

地名

市 都
府 道
姓 雅号

B A

--	--

地名

市 都
府 道
姓 雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

4月号発表(2月15日締切)

川柳塔(8句) 小島蘭幸選
 水煙抄(8句) 西出楓楽選
 愛染帖(3句) 新家完司選
 檸檬抄「学校」(2句) 牧野芳光共選
 (古久保和子選)
 インスレクション「ニヒ」(2句) 大西泰世選
 「目立つ」藤岡裕之選
 「助走」坂田隆彦選
 「バセリ」山口光久担当
 一路集(3句) 「真つ直ぐ」(3句) 山口光久担当

5月号
 檸檬抄「旗」
 一路集「主婦」「素通り」
 「さばさば」
 初歩教室「弁当」

本社2月句会

とき 2月5日(木) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。
 ところ アウイーナ大阪 3階 葛城の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし 「二字の重み」
 兼題 「散歩」
 「くどい」
 「どんどん」
 「真似る」
 「北国」
 三宅保州氏
 村上直樹選
 出口セツ子選
 江見清選
 奥田みつ子選
 坊農柳弘選
 小島蘭幸選
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社3月句会 5日(木) 午後1時から

兼題 「具合」「苦い」「コック」
 「迷う」「王者」

第32年度 夜市川柳募集

選 石霜瀬高「吐く」 9回
 1月20日締切
 ハガキに3句
 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 投句先 川柳塔さかい
 河内天笑方

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料86円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一五年(平成二十七年)二月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)67791349番
 振替(098)014129847番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本県中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十七年二月一日発行（毎月一日発行）

創刊大正十三年 通巻一〇五三号 川柳塔

二月号

定価 八百円（送料 八十六円）